

名護市の遺跡 (2)

分布調査報告

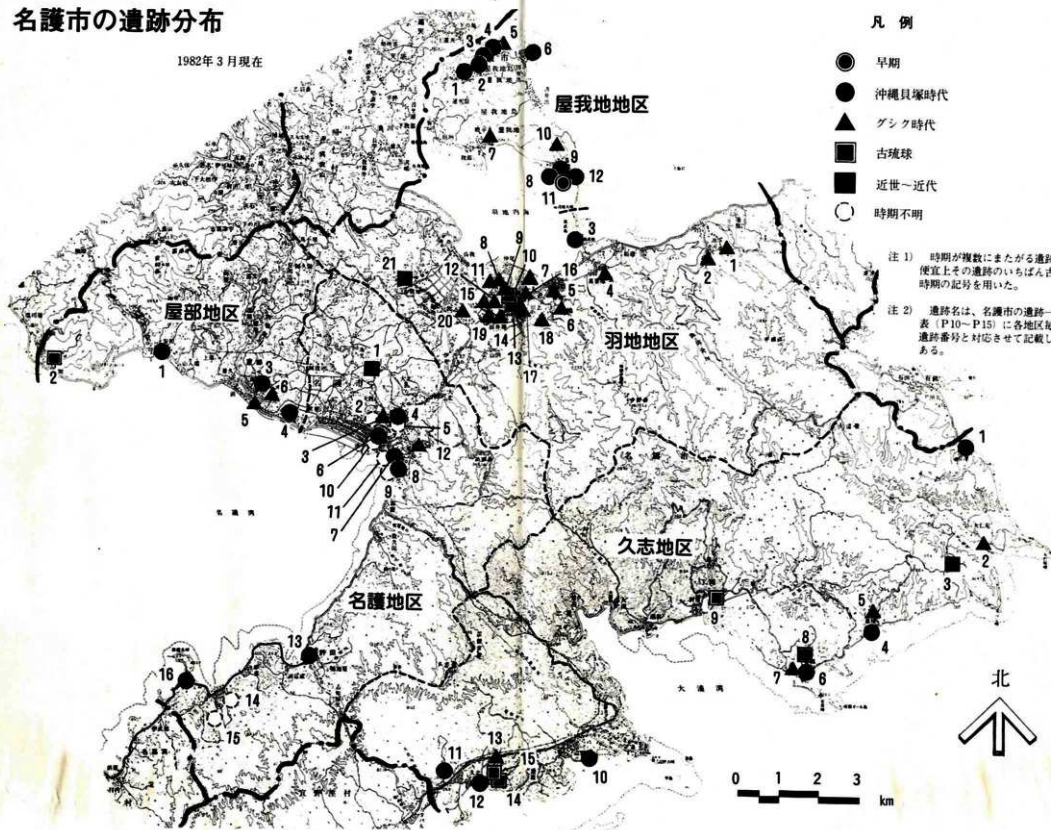


1982年3月

名護市教育委員会

名護市の遺跡分布

1982年3月現在



凡例

- 早期
- 沖縄貝塚時代
- ▲ グシク時代
- 古墳球
- 近世～近代
- 時期不明

注1) 時期が複数にまたがる遺跡は、便宜上その遺跡のいちばん古い時期の記号を用いた。

注2) 遺跡名は、名護市の遺跡一覧表 (P10～P15) に各地区毎の遺跡番号と対応させて記載してある。

北

0 1 2 3 km

名護市の遺跡 (2)

分布調査報告

1982年3月

名護市教育委員会

はじめに

わたしたちの先人は、建造物・天然記念物・民俗芸能など、多くの貴重な文化遺産を残してまいりました。文献のない古い時代を知る手がかりとなる、遺跡もまたそのひとつです。

ところが、遺跡は、地下に埋藏されたものであるため、その所在や価値が認識されないまま破壊されたものもあります。また、近年の農業基盤整備事業をはじめとする大規模な公共事業は、遺跡破壊の危機に拍車をかけています。

このような中で、名護市の歴史を明らかにするとともに、公共工事等の開発による遺跡破壊を未然に防ぐため、市内の遺跡分布調査を行ないました。調査によって、70ヶ所の遺跡の位置と性格が確認され、ここに『名護市の遺跡(2)』としてまとめました。

この報告書が、遺跡の保存と活用に役立てばと希望いたします。

終わりに、この調査に直接、間接多くのご協力をいただきました。記してお礼を申し上げます。

1982年3月

名護市教育委員会
教育長 比嘉太英

凡 例

1. 本報告書は、名護市教育委員会が1979年度より継続している名護市遺跡分布調査（1979年度は市単独予算、80、81年度は国・県の補助）のまとめである。
2. 本報告書は、多くの市民に、まず遺跡を知ってもらう目的で編集した。したがって、各遺跡の説明には、遺跡案内のための略図をつけ、複雑な記述はできるだけはぶくように心がけた。
3. 本報告書の第3章～7章の各遺跡の記述は、遺跡名・所在地・時代・概要・所見の順に基本的に説明しているが、遺跡によっては、伝承などの他の項目を追加している。また、略図の中に使用した記号は各々凡例をもうけるか、図中にそのまま説明しているが、これ以外の記号については下記に示すとおりである。

▽……………サトウキビ畑 ▽……………バイン畑 + ………………荒蕪地 ▨……………住宅地

4. 本報告書は、1982年3月15日現在、名護市内で確認されている遺跡、貝塚、遺物散布地、出土地などの埋蔵文化財70件をおさめている。
5. 本報告書では、埋蔵文化財について、下記のような分類を行った。

遺跡……………地中に住居址などの遺構や土器・石器などの遺物が確実に埋蔵されている地点。

貝塚……………遺跡のなかでも特に貝殻が多く堆積しているものは、便宜上従来の慣例に従い「貝塚」として遺跡名をつけた。

遺物散布地・出土地……………採集される遺物が少なく、遺物包含層も未確認で、遺物が、採集される地点に確実に埋蔵されているかどうか現状では断定できないものを遺物散布地、ないし出土地とした。両者とも将来の調査で確実な遺跡になる可能性があり、名称は仮称にしている。

6. 本報告書の第3章～7章の各遺跡名と並記しているアルファベットは、各遺跡の略記号である。

例：

<u>N</u>	<u>N</u>	<u>N</u>	<u>K</u>
名護市	名護地区	名護	貝塚
	(地区名)	(遺跡名)	(遺跡の種類)

7. 本報告書に示されている遺跡などの埋蔵文化財の位置・範囲はあくまでも地表面観察によるものであり、確実な位置・範囲を示すものではない。また、遺跡分布調査は、市全域については終了しておらず、未確認のものも多いと予想される。
8. 名護市内の遺跡などの埋蔵文化財ならびにその他の諸文化財の保護・保存については、市教育委員会社会教育課が担当しているので、諸開発事業を担当される機関は、工事着工の際、文化財破壊の問題がおこらないように、できるだけ計画の初期の段階で社会教育課に工事計画地内の文化財の有無を照会されたい。
9. 本報告書に紹介した遺跡に関する詳細な資料、および遺物の大部分は、なご博物館準備室（電話名護3-1342）に保管されているので、さらに詳しい情報を知りたい方、遺物をご覧になりたい方は連絡されたい。

目 次

はじめに	
凡 例	
第1章 名護市遺跡分布調査の課題と方法	1
1-1 名護市の概況	2
1-2 目的と方法	3
1-3 遺跡とその保護	5
第2章 名護市の遺跡の特色	7
2-1 名護市の遺跡—時代と分布	8
2-2 遺跡群とムラと共同体	16
第3章 屋我地地区の遺跡	25
屋我地地区の概要	26
3-1 運天原サバヤ貝塚 (NY g SK)	28
3-2 タキギター河口遺物散布地〈仮称〉	29
3-3 済井出長佐久貝塚 (NY g Na K)	30
3-4 大堂原貝塚 (NY g UK)	31
3-5 ハンタジー遺跡〈仮称〉	32
3-6 大堂浜遺物散布地〈仮称〉	33
3-7 鏡平名シマスハー御嶽遺跡群 (NY g SU)	36
3-8 ナンマー貝塚 (NY g NK)	40
3-9 アマグシク東方遺物散布地〈仮称〉	41
3-10 屋我グシク遺跡群 (NY g YG)	42
3-11 墨屋原遺跡 (NY g SI)	46
3-12 墨屋原浜崎遺跡 (NY g SHI)	48
第4章 羽地地区の遺跡	51
羽地地区の概要	52
4-1 瀬洲村跡遺跡 (NHS I)	54
4-2 源河大グシク遺跡 (NHUG)	55
4-3 奥武原遺跡 (NHO I)	58
4-4 上之御嶽遺跡 (NHU i U)	59
4-5 川之上遺跡 (NHHU I)	60

4-6	ウフ御嶽土器出土地〈仮称〉	61
4-7	仲尾次上グシク遺跡 (NHU i G)	62
4-8	仲尾古村遺跡 (NHNF)	65
4-9	親川グシク遺跡 (NHOG)	66
4-10	羽地間切番所跡 (NHHB)	68
4-11	仲間遺跡 (NHNI)	69
4-12	田井等遺跡 (NHTI)	70
4-13	ヤトバラ殿遺跡 (NHYI)	71
4-14	デーグシク遺跡 (NH DG)	72
4-15	フガヤ遺跡 (NHFI)	73
4-16	谷田遺跡 (NHKI)	74
4-17	川上遺跡 (NH HI)	75
4-18	親グシク遺跡 (NHU e G)	76
4-19	振慶名遺物散布地〈仮称〉	77
4-20	伊差川古島遺跡 (NHIF)	79
4-21	古我知焼窯跡 (NHKK a)	80
第5章 屋部地区の遺跡		83
屋部地区の概要		84
5-1	安和貝塚 (NY b A K)	86
5-2	部間権現青磁出土地〈仮称〉	88
5-3	屋部貝塚 (NY b Y K)	90
5-4	東兼久原貝塚 (NY b A g K)	91
5-5	屋部川口古瓦出土地	92
5-6	宇茂佐古島遺跡 (NY b U F)	93
第6章 名護地区の遺跡		95
名護地区の概要		96
6-1	宮里古島遺跡 (NNMF)	99
6-2	大西区遺物散布地〈仮称〉	100
6-3	大堂原西遺跡 (NNPWI)	101
6-4	大堂原東遺物散布地〈仮称〉	102
6-5	大中区土器出土地〈仮称〉	103
6-6	名護貝塚 (NNNK)	104
6-7	アバヌク貝塚 (NNAK)	105
6-8	溝原貝塚 (NNMK)	106

6-9	溝原人骨出土地	107
6-10	城人骨出土地	107
6-11	城古銭出土地〈仮称〉	108
6-12	ナングシク遺跡群 (NNNG)	110
6-13	許田貝塚 (NNKK)	115
6-14	イシグムイ遺物散布地〈仮称〉	118
6-15	喜瀬山田原遺物散布地〈仮称〉	119
6-16	部瀬名(喜瀬)貝塚 (NNBK)	120
第7章 久志地区の遺跡 122		
久志地区の概要 122		
7-1	有津遺跡 (NKAI)	124
7-2	天仁屋原遺跡 (NKTI)	126
7-3	ハサマ遺跡 (NKHI)	127
7-4	嘉陽貝塚 (NKKaK)	130
7-5	嘉陽原遺跡 (NKHaI)	131
7-6	安部貝塚 (NKAK)	132
7-7	北上原遺跡 (NKKI)	133
7-8	上之島遺跡 (NKU i I)	134
7-9	嘉手苺村跡遺跡 (NKKMI)	136
7-10	思原遺跡 (NKUI)	138
7-11	大川田原遺物散布地〈仮称〉	140
7-12	久志貝塚 (NKKK)	141
7-13	上里グシク遺跡 (NKUG)	142
7-14	久志古島遺跡 (NKKF)	143
7-15	久志前田原水田遺跡	144
第8章 まとめと今後の課題 145		
付編 参考文献目録 148		
あとがき 150		
囲み記事：グシク論争と名護市内のグシク 63		

目 次

<p>図1-1 名護市の位置……………2</p> <p>図1-2 名護市の自然環境……………3</p> <p>図2-1 稲福遺跡群とクサテ森の御嶽……………18</p> <p>図2-2 稲福上御願遺跡の集落構造……………18</p> <p>図2-3 屋我グシク遺跡群(概略図)……………19</p> <p>図2-4 南部東半地域のみら群……………21</p> <p>図2-5 南部東半地域の土器の胎土組成圏……………21</p> <p>図2-6 羽地湾岸のグシク時代遺跡とみら群……………22</p> <p>図3-1 屋我地地区の遺跡分布……………26</p> <p>図3-2 運天原・済井出区域……………27</p> <p>図3-3 運天原サバヤ貝塚……………28</p> <p>図3-4 タキギター河口遺物散布地(仮称)……………29</p> <p>図3-5 済井出長佐久貝塚出土の土器……………30</p> <p>図3-6 済井出長佐久貝塚……………30</p> <p>図3-7 大堂原貝塚・ハンタジー遺跡……………31</p> <p>図3-8 大堂浜遺物散布地……………33</p> <p>図3-9 採集された大山式土器……………33</p> <p>図3-10 饒平名・屋我区域……………34・35</p> <p>図3-11 饒平名シマヌハル御嶽遺跡群……………36</p> <p>図3-12 フルティラ(A地点)の略図……………37</p> <p>図3-13 A地点採集の土器(実測図)……………37</p> <p>図3-14 ナンマー貝塚出土のくびれ平底土器……………40</p> <p>図3-15 ナンマー貝塚……………40</p> <p>図3-16 アマグシク東方遺物散布地(仮称)……………41</p> <p>図3-17 屋我グシク遺跡群……………42</p> <p>図3-18 墨屋原遺跡……………46</p> <p>図3-19 墨屋原浜崎遺跡……………48</p> <p>図3-20 市営団地予定地および試掘地点……………49</p>	<p>図3-21 H-20ピットの断面図……………49</p> <p>図4-1 羽地地区の遺跡分布……………52</p> <p>図4-2 源河区域……………53</p> <p>図4-3 瀬洲村跡遺跡……………54</p> <p>図4-4 瀬洲村跡遺跡と大グシク遺跡……………55</p> <p>図4-5 源河大グシク遺跡……………55</p> <p>図4-6 真喜屋・仲尾次区域……………56・57</p> <p>図4-7 奥武原遺跡……………58</p> <p>図4-8 上之御嶽遺跡……………59</p> <p>図4-9 川之上遺跡……………60</p> <p>図4-10 ウフ御嶽土器出土地……………61</p> <p>図4-11 仲尾次上グシク遺跡……………62</p> <p>図4-12 仲尾・親川・田井等・川上・振慶名区域……………64</p> <p>図4-13 仲尾古村遺跡……………65</p> <p>図4-14 親川グシク遺跡……………66</p> <p>図4-15 羽地間切番所跡……………68</p> <p>図4-16 仲間遺跡……………69</p> <p>図4-17 田井等遺跡・ヤトバラ殿遺跡・デーグシク遺跡……………70</p> <p>図4-18 デーグシク遺跡……………72</p> <p>図4-19 フガヤ遺跡……………73</p> <p>図4-20 谷田遺跡……………74</p> <p>図4-21 川上遺跡……………75</p> <p>図4-22 親グシク……………76</p> <p>図4-23 振慶名遺物散布地……………77</p> <p>図4-24 伊差川・古我知区域……………78</p> <p>図4-25 伊差川古島遺跡……………79</p> <p>図4-26 古我知焼窯跡……………80</p> <p>図5-1 屋部地区の遺跡分布……………84</p>
--	--

図5-2	安和区域	85	図6-17	喜瀬区域	116・117
図5-3	安和貝塚	86	図6-18	イシグミイ遺物散布地	118
図5-4	安和貝塚出土の遺物実測図	87	図6-19	部瀬名(喜瀬)貝塚	120
図5-5	屋部・宇茂佐区域	89	図7-1	久志地区の遺跡分布	122
図5-6	屋部貝塚	90	図7-2	有津区域	123
図5-7	東兼久原貝塚	91	図7-3	有津遺跡	124
図5-8	川口から採集された古瓦の文様	92	図7-4	天仁屋区域	125
図5-9	屋部川口古瓦出土地・宇茂佐古島	93	図7-5	天仁屋原遺跡	126
図6-1	名護地区の遺跡分布	96	図7-6	ハサマ遺跡	127
図6-2	名護市街北区域	97	図7-7	嘉陽・安部区域	128・129
図6-3	名護市街南区域	98	図7-8	嘉陽貝塚	130
図6-4	宮里古島遺跡	99	図7-9	嘉陽原遺跡	131
図6-5	大西区遺物散布地	100	図7-10	安部貝塚	132
図6-6	大堂原西遺跡	101	図7-11	安部部落の遺跡	134
図6-7	大堂原東遺物散布地	102	図7-12	汀間区域	135
図6-8	大中区土器出土地	103	図7-13	嘉手苜村跡遺跡	136
図6-9	名護貝塚	104	図7-14	辺野古区域	137
図6-10	アバヌク貝塚	105	図7-15	思原遺跡	138
図6-11	溝原貝塚	106	図7-16	久志区域	139
図6-12	溝原人骨出土地	107	図7-17	大川田原遺物散布地	140
図6-13	城人骨出土地の出土状況	107	図7-18	久志の遺跡と村落移動	141
図6-14	ナングシク遺跡群	110	図7-19	上里グシク遺跡	142
図6-15	許田区域	114	図7-20	久志古島遺跡	143
図6-16	許田貝塚	115	図7-21	久志前田原水田遺跡	144
			図7-22	416番地試掘溝の層序	144

表 目 次

表2-1	名護市の遺跡編年—時代区分表	8	表6-1	古銭鑑定一覧表(城古銭出土地)	109
表2-2	名護市の遺跡一覧表	10	表8-1	地主一覧表	146

写 真 目 次

写真1-1	久志貝塚発掘調査風景……………1	写真3-26	墨屋原遺跡出土の主な土器……………47
写真1-2	大規模な土地改良事業(屋我地)……5	写真3-27	墨屋原遺跡出土の石器類……………47
写真2-1	屋我グシクのイビ……………7	写真3-28	団地建設前の墨屋原浜崎遺跡全景…48
写真3-1	多野岳より屋我地島遠望……………25	写真3-29	P-12ピットの石敷遺構……………50
写真3-2	運天原サバヤ貝塚遠景……………28	写真3-30	団地建設後の墨屋原浜崎遺跡……………50
写真3-3	タキギター河口遺物散布地全景……29	写真3-31	試掘調査風景……………50
写真3-4	大堂原貝塚全景……………31	写真3-32	墨屋原浜崎遺跡出土の遺物……………50
写真3-5	ハンタジ-遺跡全景……………32	写真4-1	田井等・親川・川上部落……………51
写真3-6	岩の割れ目に堆積した遺物包含層…32	写真4-2	瀬洲村跡遺跡と源河大グシク遺跡 遠景……………54
写真3-7	ハンタジ-遺跡出土のヤジャガマ B式土器……………32	写真4-3	奥武原遺跡全景……………58
写真3-8	大堂浜遺物散布地全景……………33	写真4-4	上之御嶽遺跡出土のグシク土器…59
写真3-9	フルティラ(A地点)洞穴内の様 子……………36	写真4-5	川之上遺跡出土の遺物……………60
写真3-10	F地点の貝層……………38	写真4-6	ウフ御嶽土器出土地近景……………61
写真3-11	F地点貝層出土の中国製青磁……38	写真4-7	仲尾次上グシク遺跡遠景……………62
写真3-12	シマスハー(島之川)……………39	写真4-8	仲尾古村遺跡全景……………65
写真3-13	鏡平名シマスハー御嶽遺跡群全景…39	写真4-9	仲尾古村遺跡出土の遺物……………65
写真3-14	アマグシク東方遺物散布地全景……41	写真4-10	親川グシク遺跡遠景……………66
写真3-15	屋我グシク遺跡群全景……………42	写真4-11	親川グシク遺跡の石垣……………67
写真3-16	A小貝塚出土の遺物……………43	写真4-12	親川グシク遺跡出土の青磁……………67
写真3-17	A小貝塚出土の鉄滓(金屎)……………43	写真4-13	羽地間切番所跡全景……………68
写真3-18	A小貝塚(頂上)の様子……………43	写真4-14	羽地間切番所跡採集遺物……………68
写真3-19	B小貝塚……………44	写真4-15	仲間遺跡全景……………69
写真3-20	B小貝塚出土の遺物……………44	写真4-16	ヤトバラ殿遺跡遠景……………71
写真3-21	C小貝塚出土の遺物……………44	写真4-17	田井等遺跡出土の遺物……………71
写真3-22	D小貝塚にある済井出の押所……45	写真4-18	ヤトバラ殿遺跡の貝層……………71
写真3-23	G地点の壁穴住居址露出状況……45	写真4-19	デーグシク遺跡全景……………72
写真3-24	G地点の保存工事後……………45	写真4-20	フガヤ遺跡出土の遺物……………73
写真3-25	墨屋原遺跡遠景(西側部分)……………47	写真4-21	谷田遺跡全景……………74
		写真4-22	川上遺跡全景……………75
		写真4-23	親グシク遺跡全景……………76

写真4-24	振慶名遺物散布地……………77	写真6-15	B地点出土の類須恵器……………111
写真4-25	伊差川古島遺跡全景……………79	写真6-16	C地点出土の灰色瓦……………112
写真4-26	古我知焼窯跡全景……………80	写真6-17	D地点出土の土器底部……………112
写真4-27	古我知焼窯跡出土の陶片……………81	写真6-18	ナングシク遺跡群出土遺物……………113
写真4-28	古我知焼窯跡出土の碗……………81	写真6-19	許田貝塚全景……………115
写真5-1	屋部部落と嘉津字岳遠望……………83	写真6-20	イシグミイ遺物散布地全景……………118
写真5-2	安和貝塚全景……………86	写真6-21	喜瀬山田原遺物散布地全景……………119
写真5-3	試掘調査した畑(安和60番地)……………87	写真6-22	喜瀬部落の遺跡遠景……………119
写真5-4	部間権現全景……………88	写真6-23	部瀬名(喜瀬)貝塚全景……………120
写真5-5	部間権現出土の青磁……………88	写真7-1	嘉陽部落……………121
写真5-6	屋部貝塚全景……………90	写真7-2	右津遺跡出土の土器……………124
写真5-7	東兼久原貝塚全景……………91	写真7-3	天仁屋原遺跡全景……………126
写真5-8	宇茂佐古島遺跡全景……………93	写真7-4	ハサマ遺跡出土の近代陶磁器……………127
写真6-1	名護城……………95	写真7-5	ハサマ遺跡に残る井戸……………127
写真6-2	宮里古島遺跡全景……………99	写真7-6	嘉陽貝塚出土の遺物……………130
写真6-3	大西区遺物散布地全景……………100	写真7-7	嘉陽原遺跡全景……………131
写真6-4	大堂原西遺跡全景……………101	写真7-8	安部貝塚全景……………132
写真6-5	大堂原東遺物散布地全景……………102	写真7-9	北上原遺跡全景……………133
写真6-6	大中区土器出土地全景……………103	写真7-10	北上原遺跡出土の類須恵器……………133
写真6-7	名護貝塚出土の遺物……………104	写真7-11	上之島遺跡出土の遺物……………133
写真6-8	アバスク貝塚近景……………105	写真7-12	嘉手苜村跡遺跡出土の遺物……………136
写真6-9	溝原貝塚試掘状況(名護291番地)……………106	写真7-13	思原遺跡全景……………138
写真6-10	城古銭出土地の中国銭(大城嘉助氏蔵)……………108	写真7-14	大川田原遺跡出土の土器……………140
写真6-11	ナングシク遺跡群全景……………110	写真7-15	久志貝塚出土の土器……………141
写真6-12	ナングシク遺跡群A地点……………111	写真7-16	上里グシク遺跡出土の青磁……………142
写真6-13	A地点出土の遺物……………111	写真7-17	久志古島遺跡出土の遺物……………143
写真6-14	B地点の状況(古墓?)……………111	写真7-18	久志前田原水田遺跡青磁出土状況……………144
		写真8-1	久志貝塚展……………145
		囲み記事写真	親川グシクの石垣……………63

A black and white photograph of an archaeological excavation site. Several workers wearing hats and work clothes are visible. One worker stands in the upper left, while others are crouching or kneeling in the foreground, working in the dirt. The site is marked with numerous rectangular and irregular trenches and pits. The overall scene depicts active field research.

第1章
名護市遺跡分佈調査の
課題と方法



図1-1 名護市の位置



1-1 名護市の概況

名護市は、琉球列島のほぼ中央、沖縄本島の北部に位置する人口47,700人の都市である。ほぼ北緯26度30分、東経128度に位置し、面積は210.73km²である。沖縄県は日本で唯一の亜熱帯気候区に属するが、名護市にも、ノグチゲラやリュウキュウヤマガメ、クロイワトカゲモドキなどの亜熱帯独自の天然記念物が生息している。沖縄本島北部は、中・南部に比べ山がちな地形で、昔から「山原」と呼ばれてきた。名護市も、市の中心部より東側は多野岳・名護岳・辺野古岳・久志岳などの標高300m級の山が、西側には、嘉津宇岳・安和岳などの400m級の山が連なっている。平野は、この両山地の間にある羽地地区の羽地ターブックワと、名護市街地のある平野が目立つだけである。また、中・小の河川が発達し、20数本の川が本市域を流れている。

名護市は、1970年に旧屋我地村・羽地村・屋部村・名護町・久志村の5町村の合併により誕生した若い「市」であるが、市内には55の部落があり、これが名護市を構成する基本単位になっている。これらの部落は、おおまかにいって、羽地地区や名護地区の現市街地などの平野をひかえている地域では、近世以前に起源をもち、集村をなす「平民百姓村」が分布する。その他の山がちな地区は、近世以降に成立した散村形態の「屋取村」が分布する。



図1-2 名護市の自然環境

1-2 目的と方法

私たちが、まず昔の歴史を知りたいという関心をもつときは、身近なことから始まることが多い。「名護市の歴史を知りたい」という気持も、よく考えると「自分のおじいさんはどう暮らしていたのか?」とか、「祖先(ウヤファーファジ)は、どこからきたのだろうか?」などや、「自分の部落の立ち始めは何年前だろうか?」といった自分の家族の歴史や、住んでいる部落などの歴史といった身のまわりの関心から始まっていることが多い。

こうした身近な関心事も、よく考えてみると、単に自分の家族だけのできごとだけでなく、また部落だけの問題だけでもないことに気づかないだろうか。つまり、自分も、また家族も部落の中で、他の家族と日頃親密に関係をもちながら生活しているし、部落も一つの部落だけでなく他の部落と、様々な取り決めや助け合いをもちながら動いてきているのである。

名護市では、現在、このような部落が55ヵ所ある。そして、これらの部落が相互に関係をもってつくった地区が5ヵ所ある(屋我地・羽地・屋部・名護・久志)。「名護市」とは、このように、第1には自分(市民)や家族一つ一つが基礎になってつくっている地域であるが、それは同時に、55ヵ所の部落

の集合体でもあり、また5ヵ所の地区の集まったものと考えることができる。

このような理由で、名護市の歴史を調べることは、私たちの住んでいる地区や部落、そして何よりも私たち自身の歴史を知ることにつながるのである。そして逆に言えば、私たち自身の歴史を知るためには、住んでいる部落や地区、および名護市全体の歴史を調べなければならないのである。そして、山原や沖縄全体、さらに日本や世界の歴史にも関心をもつ必要もあるだろう。

ところで、昔の歴史を調べる方法に大きくわけて二つある。一つは、昔の公文書や辞令書、手紙などの文字に書かれた古文書を主な資料(史料)として研究するもので、一般に文献史学と呼ばれるものである。この方法は、文献資料の残っている時代に活躍し、沖縄では主に古琉球(約500年前)以後に限られることになる。もう一つの方法は、私たちの祖先が残した遺跡を調べることで、考古学と呼ばれている。遺跡とは、住居址、貝塚、鍛冶跡などの遺構と、土器、石斧などの石器、貝器、貝殻などの遺物とからなるものである。この方法は、沖縄では、約3000年前から、約500年前まで主に用いられているが、最近では、近世(約300年～100年前)頃までの部落跡の調査も行われてきている。

名護市遺跡分布調査は、この考古学の方法によって名護市の歴史を明らかにすることを基本目標にして、1979年4月にスタートした。そして、この当時は、広い面積をもつ名護市にもかかわらず、10余ヵ所の遺跡しか確認されていなかったことと、同時に、このように未確認の遺跡が多数予想されたにもかかわらず、土地改良事業の公共事業や住宅建設などの個人開発、諸開発事業が多く計画されていたということ、そして、従来、遺跡や遺物の考古資料が、案外身近に存在するにもかかわらず、あまり市民には親しまれず、学校等でも活用されることが少なかったという、3つの状況があった。

これらのことから

1. 遺跡の確認を急ぎ、保全を計る。
2. 考古学的に名護市および各地区・各部落の歴史を明らかにする。
3. 学校や部落誌編さんなどと連携して遺跡、遺物の活用を行う。

という目的をたて、遺跡分布調査を行うことにした。

このような状況と目的から、次のような方法をとった。

1. 名護市内で計画されている向こう10年間の諸開発公共事業を着工年度順に優先順位をつけ、その順序に従って調査を行う。
2. 調査は、基本的に埋蔵文化財(遺跡)について行うが、他に遺跡との関連で、御嶽(拝所)・拝泉・古墓(風葬墓など)・小地名などや、遺跡に関わる土地の所有者、保有者、現況、将来の計画なども調査する。
3. 調査結果は、所定の様式のカードにまとめ、各遺跡ごとに一件ファイルを作成する。
4. 調査後、遺跡の情報を地主および関係機関へ通知し、遺跡保存について協議する。



写真1-2 大規模な土地改良事業(屋我地)

1-3 遺跡とその保護

遺跡とは、私たちの祖先が住み生活した場所のことである。そこには、当時の人々が食べた後すてた貝殻や動物の骨、生活に使った石器や土器、磁器、そして住んでいた住居の跡などが埋もれている。

遺跡は、私たちの祖先のくらしの様子や文化を、具体的に知ることの出来る貴重な文化遺産といえる。私たちは、名護・山原や沖縄の歴史文化を知るため、この遺跡を大切に保存していかなければならない。いくつかの遺跡については、部落の神聖な拝所として、あるいは伝承に残る部落発祥の地として親しまれ大切に保存されてきた。しかし多くの遺跡が、その存在も確認されないまま忘れさらられてきた。

近年、名護市でも土地改良など大規模な公共事業が計画され、実施されつつある。それに加えて、個人や団体による開発行為も年々増えている。それにつれて遺跡破壊の危機も年々高まっているわけである。

私たちは、こうした開発から、無為に遺跡が破壊されることのないよう、市内の遺跡分布調査を行なってきた。遺跡の存在とその性格を確認し、地域の人々が共有する文化遺産とするためである。また、開発側との事前調査を行ない、破壊を未然に防ぐためにも基本的作業として必要だからである。

遺跡は、地下に埋蔵され直接目に見ることのできない文化財であるだけに、その価値が正しく理解されにくい状況があることも事実である。遺跡を守り後世に伝えるためには、開発する側も含め、市民みんなが身近な遺跡のことについて知ろうとすることであり、地域に住む人々全ての共有財産であるという意識を持つことが大切だと思う。



第2章
名護市の遺跡の特色

2-1 名護市の遺跡 — 時代と分布

名護市の先史時代（歴史史料の無い時代）や原史時代（歴史史料の少ない時代）は、3年間の遺跡分布調査によって、少しずつではあるが明らかにされつつある。ここでは、名護市の各時代の遺跡が、本島中・南部とどこが共通し、どこが違うかを浮彫りにして、名護市の遺跡の特色をさぐりたい。しかしながら、発掘や試掘調査がされた遺跡は少なく、ほとんどの遺跡が表面調査からの考察であるため、今後発掘や詳細調査によって書き直される可能性は多いにある。沖縄における考古学編年で、定説になったものは今のところない。私たちは、考古学を歴史学の一部と把らえる立場から、下の表のように、グンク時代・古琉球・近世の如く、考古学と文献史学がつながるように設定した。

先土器時代 沖縄で最古の遺跡は、今から約3万2千年前の山下町第一洞穴遺跡で、ヒトの骨、

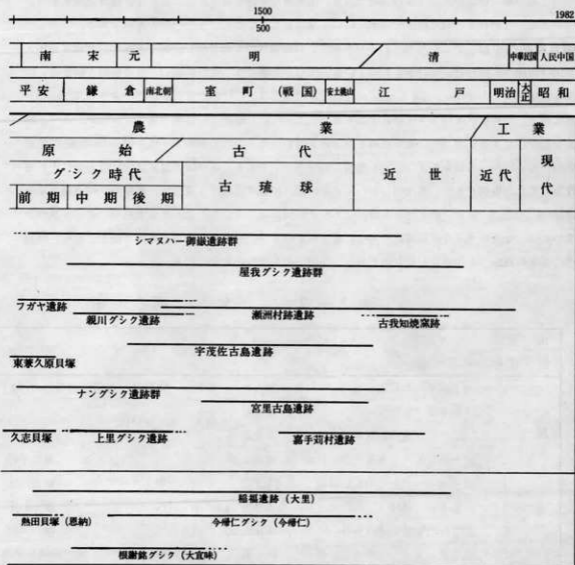
表 2 - 1 名 護 市 の 遺 跡

西 暦		8000 4000 3000 2000 1000 0 1000											
何 年 前		30000 10000 6000 5000 4000 3000 2000 1000											
中 国	旧石器時代	(仰韶・竜山)		殷	周	春秋戦国	前漢	後漢	北魏	唐	北宋		
日 本	旧石器時代	(縄 文)		/ (弥 生) /		(古墳)	大和	奈良	平安				
沖 縄 本 島	生産経済	漁 撈 ・ 狩 猟 ・ 植 物 採 集											
	時 代	原 始											
	考古学 の編年	先土器 時代		早 期		沖 縄 貝 塚 時 代		前 期		中 期		後 期	
	名護市の 主な遺跡	屋我地	墨屋原遺跡				大堂原貝塚		運天原サバヤ貝塚				
		羽地							墨屋原浜崎遺跡				
		屋部							奥武原遺跡				
		名護							安和貝塚				
		久志					有津遺跡				久志貝塚		
	主 他 な 地 遺 域 跡 の	山下町第一洞穴遺跡(原野)		室川貝塚下層(沖縄)		野国貝塚(嘉手納)		伏宮貝塚(北中城)		カヤウチバンタ遺跡(国頭)		具志原貝塚(伊江)	
		港川ワイウツシャヤ遺跡(具志原)		渡具知東原遺跡(読谷)		伊波貝塚(石川)		西山貝塚(宜野湾)		西長浜原遺跡(今帰仁)		熱田貝塚	

石球・鹿の化石が出土している。伊江島のゴヘズ洞穴遺跡（約2万年前）でも人骨や叉状になった鹿骨化石が出たが、この鹿骨が人工物であるか、鹿の咬跡なのかで議論されている。旧石器時代という表現は、旧石器—打製石器が見つからないので使えないが、洪積世に沖縄で人類がいたことは確かである。名護市内で、この時期にあたる古い遺跡はまだ発見されていない。

早期 港川人（約1万8千年前）より約1万年間の空白期間の後、日本縄文時代早期の爪形文土器の影響を受けたヤブチ式土器（指頭押圧文）が、野国貝塚、ヤブチ洞穴遺跡、渡具知東原遺跡等に出土した。これが現在沖縄で一番古い土器となっている。このヤブチ式土器に続くものが東原式土器、曾畑式土器、条痕文土器、室川下層式土器で、早期の指標になっている。この時期の遺跡が立地する地形は、室川貝塚を除いて、ほとんどが海面と同レベルの低平地である。さて、名護市で最も古い遺跡である

編年一時代区分表



屋原遺跡は、日本縄文前期の^{そびた}曾畑式土器や^{とびす}轟式土器に類似したものや室川下層式土器が採集されていることから、早期でも後半にあたる。同遺跡は、海浜にあることから、前記の諸遺跡と立地が似ているが、実際どういう生活をしていたかは、発掘が難しく明らかにされていない。

沖縄貝塚時代前期 室川下層式土器より約千年の空白期間の後、沖縄の独自文化が強くなる貝塚時代前期に入る。この長期の空白期間は、沖縄考古学の謎の一つである。この時期は石灰岩洞穴が岩陰の近くに立地していると思われていたが、調査が進むにつれ、山原地域や^{とうしよ}島嶼には海浜にあるなど、環境に応じた立地をしていることがわかってきた。土器の文様はバラエティに富んでいる。石器や貝製品の種類も多い。当時の住居が岩陰では石敷、砂丘地では竪穴住居等が発掘によって出ている。名護市でこの時期の遺跡が出ているのは、屋我地地区と久志地区だけで、少ない。屋我地地区では、海浜からこの時期の土器が拾われることが多く、はっきりした陸の遺跡は大堂原貝塚のみである。なぜ海浜からこの時期の土器が見つかるのかは今後の課題である。奄美系の土器も見つかることから、対外交流も多いに関連があると思われる。羽地地区や名護湾沿いに見つからないのも、今後の調査課題である。

沖縄貝塚時代中期 この時期は約500年間で、貝塚時代でも割合短い時間であるが、沖縄本島中・南部では台地上に住むという特徴をもっている。山原や島嶼では、地形に制約されて前期と同じく、砂丘上に居住することが多い。この時期における土器の指標は、口縁部が長方形に肥厚するカヤウチパンタ式土器や、三角形を呈す宇佐浜式土器である。この時期の遺跡は、貝塚を残していないことや、磨石や石皿が出土することから、原始農耕を説く研究者もいる。この時期の人々は、炉を伴う竪穴住居や敷石住居に住み、石鏃をつけた弓矢も使用していたようである。この頃の葬制は住居址の中に土坑墓を作ったりした事例がある。名護市においてこの時期に相当する明確な遺跡は、墨屋原浜崎遺跡と奥武原遺跡の二つだけである。両遺跡とも離島にあり、狩猟に適していたと思われる本島側に遺跡が見つからないのは、今後の大きな研究課題である。墨屋原浜崎遺跡の試掘調査で敷石遺構が出土したが、具志川市の地荒原遺跡でも同様なものが出ており、住居址の可能性が考えられる。

表 2 - 2 名 護 市 の

地区	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	立地	
屋我地	1	運天原サバヤ貝塚	運天原	前期?・中期?・後期	岩陰・丘陵下	
	2	タキギター河口	運天原	前期・グシク時代	河 口	
		遺物散布地(仮称)	済井出			
	3	済井出長佐久(ナガサク)貝塚	済井出	後期	海岸平野	
	4	大堂原(ウフドール)貝塚	済井出	前期・中期?・後期	砂 丘	
	地	5	ハンタジー遺跡(仮称)	済井出	グシク時代	崖 下
		6	大堂浜遺物散布地(仮称)	済井出	前期・後期?	海 浜
7		饒平名シマヌハー御嶽遺跡群	饒平名	グシク時代~近世	丘陵・平地	

沖縄貝塚時代後期 この時期になると、砂丘に住み、人口増加に伴って大規模な貝塚を形成するようになる。土器は薄手で堅く、文様も簡単な文様から、後半になると無文になっていく。底部の形も乳房状尖底からくびれ平底に変わっていく。前期・中期に多く用いられた石斧がこの時期に減少する。貝錘が発掘によって多く出ることから、網漁という共同漁法も出現すると考えられる。弥生式土器の流入や、読谷村の木綿原遺跡の箱式石棺墓、あるいは具志川市の宇堅貝塚群で出土した板状鉄斧等、弥生文化の影響も見られる。名護市内にあるこの時期の遺跡の立地は、他地域と共通している。ただ、羽地地区だけにこの時期の遺跡が見つからないのは、地形条件のためか、北向きの立地のせいかな、今後の研究課題である。久志貝塚の発掘調査の成果で特徴的なことをあげると、他遺跡であまり見られない網目文土器が出たこと、靱痕のついた後期の土器が出土したことから稲作農耕の可能性があること、グシク土器の出土により、その後の遺跡を経由して現部落まで連続性を持つ可能性が強いこと、である。

グシク時代・古琉球 これらの時期に関する詳述は、次の項「遺跡群とムラと共同体」でされるので、ここではグシク時代の指標になった考古学的遺物の簡単な説明をする。指標は、久志貝塚と屋我グシクの発掘成果や、表面採集による共伴遺物を検討した上で決めた。まず、グシク時代をグシク土器が用いられた期間とし、その終末は15世紀前半の三山統一頃に置いた。グシク時代を3期に分け、前期は久志F類土器というコブ状突起がかった土器や、ヤジャー・ガンB式土器が出る時期、中期は粘板岩粒を混入した胎土H土器や、南宋の青磁、白磁が出る時期、後期は砂粒を混入した胎土I土器と、表面に小穴がありアバタ状を呈する胎土J土器等とともに、明初の青磁等が出る頃である。古琉球は、グシク時代を脱した後から島津の琉球侵入までの琉球王国時代である。

近世・近代 島津侵入から琉球処分（廃藩置県）までの近世と、明治から第二次大戦までの近代は、それ以前の時代に比較してにわか文献史料が増え、主に文献史学によって研究されている。しかしながら、部落内の日常生活や、蔡温の時代を中心にした部落移動の問題、屋敷部落に関する問題など考古学的に研究すべき課題が残っており、名護市でも、この時代の遺跡について、調査していく予定である。

遺 跡 一 覧 表

1982年3月 現在

現 況	保存 状況	開 発 計 画	確 認 年 月 日	備 考
原 野 ・ 畑 地	●		1954・1・31	県指定史跡 1956年
河 口	?		1980・8・13	アジャブク川河口遺物散布地を 改称
原 野 ・ 畑 地	◎	土地改良	1980・8・13	
原野・畑地・海浜	●		1979・11・24	1981年10月採砂により一部破壊
原 野	●		1980・1・5	遺物包含層の自然崩壊が進む
海 浜	?		1980・8・1	愛楽園東方遺物散布地を改称
原野・畑地・宅地・坪所	●		1979・7・2	饒平名の古集落跡、農道で一部破壊

地区	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	立地
屋我地	8	ナンマー貝塚	鏡平名	後期	浜地
	9	アマグシク東方遺物散布地(仮称)	屋我	後期?	丘陵下
	10	屋我グシク遺跡群	屋我	グシク時代～近世	丘陵
	11	墨屋原(スミヤバル)遺跡	屋我	早期・中期・後期	海浜・海底
	12	墨屋原浜崎遺跡	屋我	中期・後期	海岸平野
羽地	1	瀬洲村(シームラ)跡遺跡	源河	グシク時代～近代	丘陵斜面
	2	源河大(ウー)グシク遺跡	源河	グシク時代～近世	丘陵
	3	奥武原遺跡	真喜屋	中期～後期	海岸平野
	4	上之御嶽遺跡	真喜屋	グシク時代	丘陵斜面
	5	川之上(ハースウイ)遺跡	仲尾次	グシク時代	平地
	6	ウフ御嶽土器出土地(仮称)	仲尾次	グシク時代?	山地斜面
	7	仲尾次上グシク遺跡	仲尾次	グシク時代?～近世	丘陵
	8	仲尾古村遺跡	仲尾	グシク時代～近世	小谷
	9	親川グシク遺跡(羽地グシク)	親川	グシク時代	丘陵
	10	羽地間切番所跡	親川	古琉球～近世	丘陵
	11	仲間(ナハマ)遺跡	田井等	グシク時代	小谷
	12	田井等(テーヤ)遺跡	田井等	グシク時代～近世	小谷
	13	ヤトバラ殿遺跡	田井等	近世	丘陵下
	14	デーグシク遺跡	田井等	グシク時代	丘陵上・下
	15	フガヤ遺跡	田井等	グシク時代	小谷
	16	谷田(コクデン)遺跡	川上	グシク時代～古琉球	丘陵・平地
	17	川上(ハーマー)遺跡	川上	グシク時代	丘陵下
	18	親(ウェー)グシク遺跡	川上	グシク時代?	丘陵斜面
	19	振慶名遺物散布地(仮称)	振慶名	グシク時代～古琉球	小谷
	20	伊差川古島遺跡	伊差川	グシク時代～近世	丘陵斜面
	21	古我知焼窯跡	古我知	近世	丘陵
屋部	1	安和貝塚	安和	後期・グシク時代	砂丘上
	2	部間権現青磁出土地(仮称)	安和	古琉球?	洞穴
	3	屋部貝塚	屋部	後期	砂丘上
	4	東兼久原貝塚	宇茂佐	後期～グシク時代	砂丘上
	5	屋部川口古瓦出土地	宇茂佐	グシク時代?	河口
	6	宇茂佐古島遺跡	宇茂佐	グシク時代～近世	小谷

現 況	保 存 状 況	開 発 計 画	確 認 年 月 日	備 考
原野・畑地・海浜	○		1979・4・30	
原 野 ・ 畑 地	?		1979・6・25	
原野・畑地・坪所	◎		1954・1・31	屋我・濟井出の古集落, 80年発掘調査
原野・海浜・海底	●	港湾計画	1980・3・18	名護市内で最古の遺跡
原野・畑地・遊園地	◎		1980・8・28	集落跡? 1980年9月試掘調査
原 野 ・ 畑 地	◎		1979・4・25	源河の古集落跡の一つ
原野・畑地・宅地	○	道路工事	1979・5・27	源河の古集落跡の一つ
畑 地	○	土地改良	1980・9・12	羽地地区で唯一の貝塚時代遺跡
坪 所	○		1981・11・19	真喜屋の古集落跡?
坪 所 ・ 畑 地	○		1981・11・20	
坪 所	○		1981・11・21	
原 野 ・ 畑 地	○	土地改良	1979・4・24	仲尾次の古集落跡
原野・畑地・坪所	●	土地改良	1979・4・24	仲尾の古集落跡
原野・畑地・坪所	◎	土地改良		石垣, 遺物包含層を有する
原野・畑地・坪所	●	土地改良	1979・6・24	
畑 地	○	土地改良	1981・4・13	
畑 地	●	土地改良	1981・4・10	田井等の古集落跡
坪 所	◎	土地改良	1981・4・10	
坪 所 ・ 畑 地	◎	土地改良	1981・4・10	
畑 地	○	土地改良	1981・4・11	
坪 所 ・ 畑 地	◎	土地改良	1981・4・17	川上の古集落跡
畑地・宅地・坪所	◎		1981・11・20	川上の古集落跡
原 野 ・ 畑 地	●			川上の古集落跡
宅 地 ・ 道 路	?		1981・4・10	
畑 地	●	土地改良	1981・9・6	伊差川の古集落
原 野 ・ 畑 地	●	土地改良		県指定史跡 1972年指定
原野・畑地・宅地	●	道路改良		1980年10月, 試掘調査
坪 所	○	採 石	1979・7・8	洞穴内より青磁採集
原野・畑地・宅地	●		1980・7・12	1980年7月, 試掘調査
宅 地 ・ 畑 地	●		1980・9・18	
河 口	?			1960年9月, 大川清氏が調査
原 野 ・ 畑 地	●	土地改良	1979・5・8	宇茂佐・屋部の古集落跡

地区	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	立地
名護	1	宮里古島遺跡	為又	古琉球?~近世	丘陵
	2	大西区遺物散布地(仮称)	大西区	(不明)	微高地
	3	大堂原(ボードーバル)西遺跡	大中区	グシク時代~近世	微高地
	4	大堂原東遺物散布地(仮称)	大中区	後期~グシク時代	丘陵上
	5	大中区遺物散布地(仮称)	大中区	(不明)	砂丘上
	6	名護貝塚	大中区	後期	砂丘上
	7	アバヌク貝塚	大東区	後期	砂丘上
	8	満原(ミズバル)貝塚	東江	後期	砂丘上
	9	満原人骨出土地	東江	(不明)	砂丘上
	10	城(グスク)人骨出土地	城	(不明)	砂丘上
	11	城古銭出土地	城	グシク時代?	砂丘上
	12	ナングシク遺跡群	城	グシク時代~近世	丘陵斜面
	13	許田貝塚	許田	後期	砂丘上
	14	イシグムイ遺物散布地(仮称)	喜瀬	(不明)	丘陵下
	15	喜瀬山田原遺物散布地(仮称)	喜瀬	(不明)	丘陵下
	16	部瀬名貝塚(喜瀬貝塚)	喜瀬	後期	砂丘上
久志	1	有津(アツ)遺跡	天仁屋	前期	山裾~海岸
	2	天仁屋原遺跡	天仁屋	グシク時代~近代	台地上
	3	ハサマ遺跡	天仁屋	近世~近代	小谷
	4	嘉陽貝塚	嘉陽	後期~グシク時代	砂丘上
	5	嘉陽原(ハヨーパロー)遺跡	嘉陽	グシク時代~近世	丘陵下
	6	安部貝塚	安部	後期・グシク時代~近世	丘陵下
	7	北上原遺跡	安部	グシク時代~近世	台地
	8	上之島(ウイヌシマ)遺跡	安部	古琉球?~近世	台地
	9	嘉手苺村跡遺跡	汀間	古琉球?~近世	河岸低地
	10	思原(ウムイバル)遺跡	辺野古	後期?	砂丘上
	11	大川田原遺跡	久志	前期	川沿い
	12	久志貝塚	久志	後期~グシク時代	砂丘上
	13	上里グシク遺跡(久志グシク)	久志	グシク時代	丘陵上
	14	久志古島遺跡	久志	古琉球~近世	台地
	15	前田原水田遺跡	久志	古琉球~近代	谷口

注1:前期、中期、後期というのは沖繩貝塚時代の時期区分である。編年表参照。

現況	保存状況	開発計画	確認年月日	備考
原野	●	国道工事	1980・9・18	宮里の前集落跡、採土で破壊
畑地・公園	●	街路計画	1980・9・20	
畑地・宅地	◎	街路計画	1980・9・19	大兼久の古集落跡？
原野・宅地	●	街路計画	1980・9・19	畑地開墾により一部破壊
畑地・宅地	●	街路計画	1980・9・20	宅地造成で破壊
宅地・道路	●			宅地造成で破壊が続く
宅地・道路	●		1980・7・8	大兼久貝塚を改称
宅地・道路	●		1980・7・4	1981年7月試掘調査
宅地	●		1980・10・25	北部土木事務所構内
宅地	●		1980・11・17	
道路	●			15世紀以前の中国古銭が出土
原野・畑地・拝所・公園	◎			城の古集落跡
畑地・宅地	◎		1979・3？	
拝所・畑地	？	土地改良	1981・6・18	
畑地	？	土地改良	1981・6・19	
畑地・道路・公園	◎	国道工事	1953	
原野・道路	●		1978・7	県道により一部破壊
拝所・遊び場・道路	●		1978・4・24	天仁屋の古集落跡
原野・畑地	○		1981・12・19	底仁屋の前集落跡
畑地・宅地	●	土地改良	1978・4・24	嘉陽貝塚はマンカ原散布地を含む
畑地	◎	土地改良	1981・9・29	
畑地・宅地	◎	土地改良	1981・10・1	
畑地	●	土地改良	1981・10・2	
拝所・畑地	●	土地改良	1981・10・1	安部の前集落跡
畑地	●		1980・5・15	汀間の前集落跡
海浜・原野	●		1980・8・4	米軍海兵隊の上陸訓練で破壊
河川・湿地	●	土地改良	1980・10・6	出土遺物は客土内？
宅地	●		1979・7・8	集落跡、1979年発掘調査
原野	●		1979・8・15	久志の古集落跡？
原野・畑地	◎		1979・7・17	久志の前集落跡
原野・畑地	○	土地改良	1979・9	水田跡、1979年発掘調査

注2：保存状況は、○包含層の保存が良好 ◎保存がやや良好 ●破壊が著しい

2-2 遺跡群とムラと共同体

遺跡群の意義 ややもすると、遺跡というものは一つ一つが別個の存在としてみられがちである。しかし、多くの場合、遺跡は個々ばらばらに分布しているのではなく、近隣の遺跡が有機的に関係しあって遺跡群を形成している。だから、遺跡群という観点から個々の遺跡をみると、遺跡群内の遺跡相互の関係——規模、位置、遺構、遺物の内容などが重要な意味を持ち、たとえ小遺跡でも遺跡群の中のある役割をなすものとしてないがしろにはできないのである。また、集落跡などの遺跡群には、当然各遺跡の結びつきを支える経済上の基盤としての生産址があるはずだ。例えば農耕社会のグシク時代では水田址などであり、貝塚時代では潟湖での漁撈址である。これらの生産址は、その性質上集落跡などのように、地面に多くの貝殻や土器が散らばることは少ないので、通常では発見し難いものだが、遺跡群をとらえることによってその近辺に生産址の存在位置を推定することも可能となる。

遺跡保存は、こうした遺跡群という観点から考えていかねばならない。したがって遺跡分布調査では個々の遺跡のデータを羅列するだけでなく、遺跡群をとらえることも重要な作業だと考える。そこで、本項では、その試みとして遺跡群をいかにとらえるかについて、グシク時代のムラと共同体の復元作業を通して行なうことにしよう。そして、グシク時代の遺跡群が近世の村そして現在の部落にどうつながるのか、また名護、山原のムラと共同体が南部と比較していかなる特質を持っていたかについても述べたいと思う。

古層の村 現在の部落（字）は近世には村と呼ばれる行政上の自治単位であった。この村をたどっていくとグシク時代の集落跡にまでさかのぼることができる。村とグシク時代集落跡との系譜的關係は、村の古島（旧集落）がグシク時代の集落跡であったり、あるいは村がグシク時代から同一場所で連続と続いてきたことで明らかにできる。しかし、このような直接的連続関係がなくとも、村の重要な拝所であるクサテ森の御嶽付近にあるグシク時代集落跡を、その村の初期の集落として特定できるのである。

このことを理解するために、仲松弥秀教授の民俗地理学的方法による沖縄の古層の村論を要約して以下に紹介しよう。

沖縄の村には、マキ（マキヨ、マクなどともいう）と呼ばれる祭祀集団があり、その拝所としてクサテ森の御嶽と殿または神アサギなどがある。クサテ森の御嶽とは、マキの祖霊神を祀った聖域であり、殿や神アサギはマキの人々が参集してクサテ森の神を招聘して祭祀を行う場所である（中・南部では主に殿と呼び、山原では神アサギと呼ぶ）。したがって、ふつう、村には1クサテ森の御嶽に対応して1殿—神アサギそして1マキ（祭祀集団）が存在する。近世の村は、かかるマキが複数結合して形成されている場合が多いが、古琉球においては、個々のマキがそれぞれ集落を形成し、これが行政上の自治単位をなしていた。ところで、マキは、1クサテ森の御嶽を持つ場合が多いから、その限りでは祖先を同じくする単一の血縁集団が多い。しかし、全てのマキがそうではない。1殿—1神アサギを持つ1つのマキでありながら複数のクサテ森の御嶽を持つ場合もあるからだ。このようなマキは、祖先を異にする

複数のクサテ森の祭祀集団（血縁集団）で形成された地縁集団なのである。このような、クサテ森の祭祀集団がマキ成立以前の血縁集団を示している。つまり、原初の集団としてクサテ森の血縁集団があり、これらが複数結合して祭祀の統合が行われた後、殿—神アサギという祭祀場が出現したため、複数のクサテ森の御嶽がありながら殿—神アサギは1つという坪所構成の集団が形成されたのである。この殿—神アサギ発生後の集団がマキと呼ばれるものであるが、殿—神アサギの発生いかにえればマキの発生は16世紀中葉と考えられる。以上が仲松教授の古層の村論である。

グシク時代集落跡とクサテ森の集団の対応 さて、仲松教授の古層の村論から考えると、グシク時代の集落は、クサテ森の血縁集団を単位として、それが単一で、あるいは複数結合してマキの原形となるムラを形成していたことになる。実際、グシク時代の集落跡は必ずといってよい程クサテ森の付近にあり、このグシク時代集落が、仲松教授のいうクサテ森の血縁集団に対応するのである。この関係を本島南部大里村^{オハ}稲福部落（旧稲福村）のクサテ森の御嶽と稲福遺跡群を例にとってみることにしよう。

『琉球国由来記』によると、稲福村には3クサテ森の御嶽と1殿がある。現在の調査でもこれらの坪所を確認できる他に、同村が3祭祀集団から構成されていることも明らかである。つまり、稲福村は3つのクサテ森の祭祀集団から成るマキである。

稲福村が立地する石灰岩小丘上には、3つのグシク時代遺跡がある（図2-1）。この3遺跡は若干存続時期を異にしている。その変遷は、前期（約800～700年前）にまず稲福上御嶽遺跡が出現し、次いで中期（約700～600年前）には新たに仲村御嶽遺跡と稲福殿遺跡が形成されて3遺跡併存となるが、中期末～後期（約600年前）に稲福殿遺跡の場所へ他の2遺跡が移動結合し1個の大遺跡となり、これが古琉球・近世の稲福村へと続いていく。

さて、稲福遺跡群は、中期に3遺跡となるのであるが、これらが稲福村—マキを構成する3クサテ森の祭祀集団に対応する。例えば、そのうち2遺跡はそれぞれクサテ森の御嶽位置と重複している。さらにその中の1つ稲福上御嶽遺跡は、発掘によって、現在のクサテ森の坪所の真下にグシク時代の祭祀場があり、これと接してグシク時代の掘立柱建物群（住居群）が確認されている。このことによって、クサテ森の御嶽の発生が少なくともグシク時代中期にさかのぼるとともに、稲福上御嶽遺跡のようなグシク時代の小集落跡が仲松教授のいうクサテ森の血縁集団に対応することも明らかとなる。また、グシク時代3遺跡が、径100mの狭い範囲に近接して存在し、続いて一つの集落に結合することから考えても、これらは当初から密接な関係にあったことは疑問の余地がない。そこに、稲福マキの原型がグシク時代中期にすでに形成されていたことを知るのである。このような、マキの原型となったグシク時代の集落跡群を、マキ、村と区別してムラと呼ぶことにしよう。

グシク時代のムラの構造 グシク時代の稲福ムラは、3小集落跡から構成される集落群の形をとっているが、その集団構造はどのようなものであろうか。稲福ムラの構成単位である稲福上御嶽遺跡（図2-2）から、その集団構造を考えてみよう。

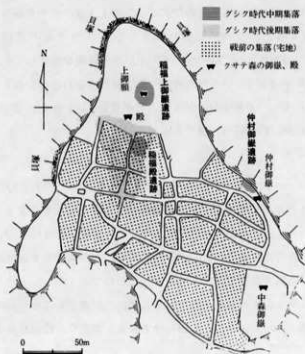


図2-1 稲福遺跡群とクサテ森の御塚

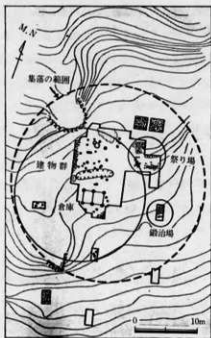


図2-2 稲福上御原遺跡の集落構造

まず、この小集落の居住人員であるが、建物群の範囲あるいは他の平坦部分を考慮しても、建物は倉庫を含めてせいぜい5、6棟を許容するにすぎないから、居住者数は最大30人程度、おそらく実数は10数人と考える。この人数は数世帯程度の規模である。

この数世帯の集団は、クサテ森の御塚の原初の祭祀場を共有し、クサテ森の血縁集団に対応するのであるから、祖先(出自)を同じくする血縁集団だと考える。また、この集団は、倉庫を共有している。このことは、生産と消費が共同で行われていたことを意味している。つまり、この数世帯はカマドを共にしていたと考えるのである。このような血縁関係にある数世帯が、生産を共同で行いカマドを共にして結合している集団関係は、^{マカヒキョウドウカイ}世帯共同体と呼ばれるものに他ならない。かかる世帯共同体は、生産力が低い個々の世帯がそれぞれでは自活できないために形成される数世帯の生産と消費の共同体である。

稲福ムラは、世帯共同体を構成単位としてそれが3個結合して形成されている。その結合関係は、出自-血縁を異にしている3世帯共同体の地縁的結合ムラといえる。このようなムラは、他に玉城村の糸^{オノ}数遺跡群、船越遺跡、フルティラ遺跡、糸満市の新垣遺跡群などがあり、南部に多い。

名護・山原のムラ これまで南部の遺跡群を例にとって古シク時代のムラの姿をみてきたが、名護・山原ではどうか。屋我地島の屋我古シク遺跡群から名護、山原のムラをみることにしよう。

屋我地島の屋我村と済井出村の関係は、近世に屋我村から済井出村が分村したと考えられている。実際両村のクサテ森の御嶽は、一つの小丘上に隣接して存在し、この小丘上にはグシク時代～古琉球の貝塚群（屋我グシク遺跡群）があるから、両村はもともと1つの集落を形成していたことが遺跡の上でもうかがえる。

さて、この貝塚群は径約200mの範囲内に分散している（図2-3）。グシク時代の貝塚はA、C、Dの3貝塚で、そのうちC、D貝塚が古琉球に及び、古琉球には新たにB、E、F、Hの貝塚が出現する。以上の貝塚のうちB貝塚だけは平坦地に貝層があり、これは発掘の結果古琉球の祭祀場であることがわかった。B貝塚以外は、斜面に投棄された貝層と、土器、陶磁器、カマド片などの遺物包含層ないしは散布地で構成され、またD貝塚では竪穴住居址も確認されており、いずれも居住跡と推定されるものである。

これらの貝塚群は、存続時期が若干ずれており、次のような変遷をたどったとみられる。まず、グシク時代前期末ないし中期初頭（約700年前）にA貝塚が形成された後、中期（約700～600年前）にC貝塚へ移動。そして後期末にC貝塚からD貝塚がわかれ、C、D貝塚が併存した。続く古琉球（約500～300年前）には、C、D貝塚がそのまま継続する一方、新たにE、F、H貝塚が出現し5貝塚となった。

上記の如き変遷をたどった貝塚の規模をみると、中期のA、C貝塚は貝層も比較的規模が大きく、また遺物の出土量も比較的多い。これに対し古琉球の貝塚、とくにグシク時代の貝塚と重複しないE、F、H貝塚はいずれも貝層の規模は小さく、また遺物の出土量も僅少である。これらの規模を稲福遺跡群と比較すると、中期のA、C貝塚は稲福上御願遺跡より若干小規模ではあるが、仲村御嶽遺跡に並ぶかや、大きい規模であるから、1個の世帯共同体と考えてよい。また、A貝塚は、屋我村のクサテ森の御嶽である屋我グシクのイビ（拝所）と重複している点で稲福上御願遺跡と類似している。これらの点から屋我グシク遺跡群の中期の貝塚を世帯共同体としてとらえることができれば、古琉球の小貝塚群は、グシク時代中期の世帯共同体が各世帯ごとに住居を分散させたものと推定できるのである。

そこで、屋我グシク遺跡群＝屋我ムラの特徴として次の点を指摘することができる。

- ① 1個の世帯共同体で形成された、単一血縁集団の小規模ムラである。
- ② グシク時代中期には世帯共同体が一かたまりの集落を形成しているが、古琉球では各世帯ごとに分散居住した集落形態へと変化している。
- ③ ②の各世帯ごとの分散居住が、グシク時代後期末から認められるか否かは屋我グシク遺跡群では明らかでない。



図2-3 屋我グシク遺跡群（概略図）

かではない。しかし、田井等遺跡群では明らかにグシク時代後期に遺跡の小規模分散性が認められる。このことが直ちに世帯共同体の分解—個別世帯の生産単位としての自立を意味するのかは明らかではないが、この分散した世帯が近世の村を構成する小家族に連なるものではないだろうか。

屋我ムラのような①②の特徴を持つ遺跡群としては、他に屋我地島の島之川御嶽遺跡群(鏡平名ムラ)、羽地の仲尾遺跡群(仲尾ムラ)、田井等遺跡群(田井等ムラ)などがあり、いずれも1クサテ森の御嶽に対応している。かかる屋我型のムラは南部に多い稲福型のムラと対置される名護・山原に典型的なムラである。

ムラと共同体 近世の村は、一まとまりの集落を形成しているだけでなく、土地を共有する主体でありまた自給自足する経済の単位であった。つまり1個の共同体であった。したがって、近世の村は集落と共同体が一致しているのである。

では、グシク時代のムラも近世の村と同様それ自身で1個の共同体であったのか。近世の村と比較しつつ考えてみよう。

まず第一に、グシク時代のムラは人口が少ない。これは労働力という観点からみると、ムラが経済的に自立しえたか否かに関わる重要な意味をもつ。ムラは、屋我グシク遺跡群では数世帯、古琉球に入っても5世帯程度である。規模の大きな稲福遺跡群でも十世帯前後に過ぎない。

次に、グシク時代は農業社会とはいえず、近世に比べると生産力がかなり低かった。農具を例にとると、近世では鉄製クワ、牛馬に引かせる犁を用いて田畑を耕耘し、収穫は根刈用の鉄鎌で行っている。一方、グシク時代では、鉄製クワ、犁はなく、水田は牛に踏ませ、畑地は鉄刃の小型ヘラでコツコツと耕すというもので、しかもその収穫は、稔熟不揃いの穂を鉄製の小形鎌で一本一本摘みとるというものであった。この農具をみても近世とグシク時代の生産力の差ははなはだ大きかったことがうかがえる。グシク時代の個々の世帯が生産と消費の単位として経済的に自活できず、世帯共同体を形成して生産を共同で行わざるを得なかったのは、こうした生産力の低さが原因している。

生産力が低く、また人口も数世帯—十数世帯前後のグシク時代のムラが、独自で新たな耕地を開拓して経営し自給自足しえたかは大いに疑問である。開発の際の労働力、耕地とりわけ水田の経営に際しての水利の問題、そして低い生産力が常に抱えもつ飢きん、あるいは絶えず損耗する鉄器の補給のために行う海外との交易などを考慮すると、グシク時代のムラは、生存のために他のムラと生産の共同関係を結び、その共同体全体で上記の問題に対処していたと考えざるを得ないのである。

グシク時代の共同体の範囲 しかば、どの程度の範囲のムラ・ムラが関係しあって共同体を形成していたであろうか。グシク時代の農業は麦・粟畑作、水稲作に立脚していたが、とくに水稲作においては、水田の開発と経営の際の水利をめぐる同一水系を利用するムラは利害関係をもたざるを得ない。グシク時代のムラとムラの生産の共同関係は、この水田水利をめぐる典型的に現われる。

図2—4は、南部東半地域における、遺跡(ムラ)群と水田可耕地(谷底低地・海岸低地)との対応を



図 2-4 南部東半地域のムラ群



図 2-5 南部東半地域の土器の胎土組成圏

円でくくって示したものである。すなわち、この図から、一連の水田水系をめぐって遺跡（ムラ）群が存在していることが明らかであるが、このムラ群が水田の開発と経営をめぐって共同体を形成していたと考えるのである。

ところで、共同体は、自給的な経済の単位であるだけでなく、他の共同体との接触——例えば交易、戦争など——の単位でもある。共同体のこの側面を、グシク土器の胎土分布からみることにしよう。

グシク土器には、数タイプの胎土がある。この土器胎土は、地域によって製作した土器の胎土が異なるだけでなく、同一地域内でも製作した土器の胎土が時期によって変化した場合もあることがわかっている。このような土器胎土を、遺跡単位でみると、大体数タイプの胎土で構成されているのである。この遺跡の土器は、そこで製作された主体を占める土器（胎土が時期的に変化する場合があります）と他の地域から搬入された少量の異なる胎土の土器から成る。したがって、遺跡の土器胎土組成は、そこで製作された胎土変化の歴史と他の地域との土器交流の在り方を反映したものだといえる。かかる観点から各遺跡の土器胎土組成をみると、胎土組成が極めて類似し、かつムラを越えたグループ—胎土組成（共通）圏の存在が明らかとなる（図2-5）。土器が人間によって製作され、また人間によって運搬され流布していくことを考えると、この土器胎土組成圏内のムラ・ムラは、土器製作の伝統を共通にし、それを維持する緊密な人間の交流があったばかりでなく、他地域との土器をめぐる交流に際しては一体となって対応したものであると思う。そこに、他の共同体との交流の主体となる共同体の側面をみることができる。

そこで、土器胎土組成圏とききにみた水田水系をめぐるムラ群とを比較すると、両者の範囲はほとんど一致している。若干の違いは、土器胎土組成圏は、稲福遺跡と佐敷上城遺跡の胎土組成が類似するよう、水田水系のムラ群よりも、範囲が広い。かくて、グシク時代の共同体は、水田水系をめぐって

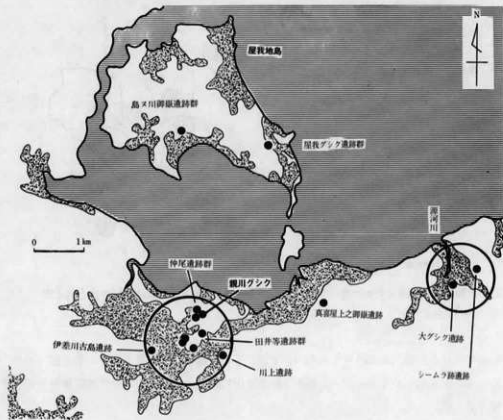


図2-6 羽地湾岸のグシク時代遺跡とムラ群

結合したムラ群を中核に、周辺の孤立的なムラを含んだ範囲として把握することができるのである。

グシク時代の共同体の範囲を上述の如くとらえると、その中に大体1個の中規模の城塞的グシクが存在することが明らかとなろう。グシク時代の共同体の具体像がここまで至れば、それは、按司時代～三山時代の按司が統轄する²くに²に対応することも明らかである。²くに²は後の近世の間切の範囲(旧市町村と大体一致)の基礎となったものであるが、土器胎土組成圏は²くに²あるいは後の間切に大体一致し、その中の中規模の城塞的グシクは三山時代の按司の居城として伝えられるものである。

名護・山原の共同体 グシク時代の共同体を、南部を例にとりつつみてきたが、では名護・山原ではどうであろうか。残念ながら、私たちの調査は、名護・山原の共同体の範囲について南部のように明確にとらえるまでには至っていない。しかしながら、羽地湾岸の地域については、羽地大川と我部祖河川周辺の低湿地(水田可耕地)をとりまくムラ群、あるいは源河川をとりまくムラ群という二つのムラ群の存在を確認している。この羽地湾岸地域は、羽地間切の範囲であり、その中に中規模の城塞的グシク(親川グシク)が一基存在しているところをみると、羽地大川・我部祖河川のムラ群を中核として、

源河川のムラ群および周辺の孤立的ムラを含めた形で共同体が形成されていたのではないかと考えている。中規模の城塞的グシクを共同体のメルクマルとすると、山原では他に、名護グシクを中心とした名護間切の名護湾岸地域、根謝銘グシクを中心とした国頭間切地域、今帰仁城を中核とした今帰仁間切地域にそれぞれグシク時代の共同体を設定できるように思う。

そこで、名護・山原の共同体を南部と比較すると、その構成単位であるムラが単一血縁集団であることから、共同体はより血縁社会的性格が強く、また、ムラが小規模で自立性が弱いから共同体は反対により強固な組織となったと思われる。これに対し、南部の共同体は、規模が大きい地縁的ムラが多いから、そこではムラの自立性が相対的に強く、反対に共同体はよりルーズな組織だったと考えられる。とくに、石灰岩台地地帯の糸満市地域は、ムラ・ムラを生産のうえで結合させる水稲作が未発達で、個別経営が可能な畑作地帯である。そこでは、一層ムラの自立性は強く、共同体はムラムラとの緩い関係にとどまっていたのではないだろうか。

参考文献

- 仲松弥秀 『古層の村』 沖縄タイムス社刊 1977年
安里進・他 「グシク土器の地域色と『くに』・『世』」 国分直一博士古稀記念論集 1980年
東恩納寛淳 『南島風土記』(第三版) 1974年
嘉手納宗徳編 『李朝実録琉球史料』 第一集～第三集 球陽研究会刊 1971年～72年
伊波・東恩納・横山編 『琉球国由来記』 『琉球史料叢書』 第一巻 1973年

A black and white photograph of a coastal landscape. In the foreground, there is a dark, forested hillside with some foliage visible. The middle ground shows a wide bay or inlet with several small, rocky islands and peninsulas. The water is calm, and the sky is filled with soft, diffused light, suggesting an overcast day. The overall scene is serene and scenic.

第3章
屋我地地区の遺跡



図3-1 屋我地区の遺跡分布

屋我地区の概要

屋我地区の遺跡は現在までのところ12ヵ所が確認されている。羽地地区や名護地区に比べて遺跡数は少ないが、面積や部落の数からいえば、むしろ他の地区よりも充実している。時代的にいっても、名護市でもっとも古い早期の墨屋原遺跡（約5000年前）から、近世（約100年前）の遺跡までバラエティーにとんでいる。

屋我地区の遺跡は、その分布からおおむね3つの範囲に分けられる。1つは運天原部落から済井出部落の北側海岸にかけた屋我地島北側の遺跡、2つ目は饒平名部落の饒平名シマヌハー御嶽遺跡群、3つ目は屋我部落周辺の遺跡である。屋我地島北側の遺跡は、沖縄貝塚時代前期後半（約3000年前）からグシク時代後期（約600年～500年前）にわたる6ヵ所の遺跡がある。これらの遺跡と距離的に近く、かつ古い部落には済井出部落があるが、両者の歴史的な関係は今後の課題である。

2つ目の饒平名シマヌハー御嶽遺跡群は、現在の饒平名部落の古い部落跡だと考えられる。グシク時代の前期（約800年前）から近世（約300年～100年前）までと推定され、饒平名部落が南側の現部落へ次第に移動する過程がうかがえる。

3つ目の屋我部落周辺の遺跡群は5ヵ所の遺跡が確認されているが、最も古い墨屋原遺跡（約5000年前）から屋我グシク遺跡群（約800年～100年前）まで、時間的には継続している。しかし、現在の屋我部落の歴史が5000年前までさかのぼるが否かは今後さらに詳しい調査を継続しなければならない。

屋我地区では、屋我地西部地区の土地改良事業（137ha）をはじめ、その他の公共事業が多く、これまでも何件かの遺跡保存問題があり、今後も予想される。また屋我地の歴史について明らかにすべき課題の多い今日、一つ一つの遺跡を保存していくことが重要である。

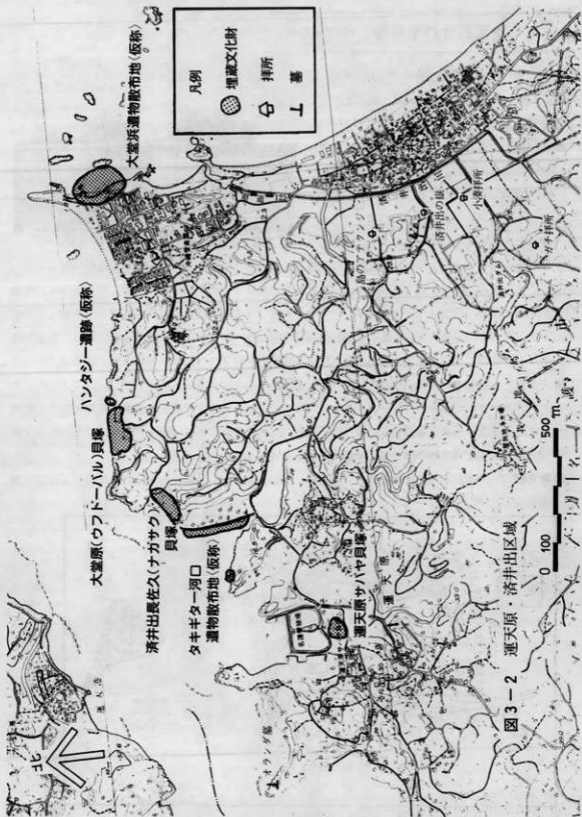


図3-2 運天原・清井出区域

3-1 ウンデンバル 運天原サバヤ貝塚 (NYgSK)

所在地：屋我地地区運天原 ウンデンバル 浜苗代原
時代：沖縄貝塚時代後期，前期後半？
 中期？

概要：運天原公民館の東に隣接する独立小丘陵の南側斜面下にこの貝塚の位置を示す標識がある。ここにはアラスジケマンガイを主体にした混土貝層が堆積しており、周囲にも土器片や貝殻が散布する。この上



写真3-2 運天原サバヤ貝塚遠景(南側より)

には半洞穴がある。また、この丘陵上は琉球石灰岩になっており、その下部が黄褐色の固くしまったシルト質の地層で、両者の境は半洞穴の底部付近である。この貝塚は、出土した土器から、沖縄貝塚時代後期(約2000年～800年前)と考えられる。また、沖縄貝塚時代前期後半～中期(約3000～2000年前)の遺物の報告もあるが今回は確認できなかった。1956年、琉球政府によって指定文化財になったが、1972年の日本復帰とともに現在は県の指定文化財(史跡)になっている。

所見：発見者の多和田真淳氏によれば、上部の半洞穴は貝塚時代の住居址ということである。この洞穴内には破砕されたアラスジケマンガイやキクザルガイ等が散布するが、風葬墓跡の可能性もある。また、この丘陵の北側は海に面しているため、もしこの南側斜面に居住地があったとすれば、海からの北風を防ぐのに絶好の場所だったと考えられる。

参考文献：多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」 「文化財要覧」琉球政府文化財保護委員会 1956年

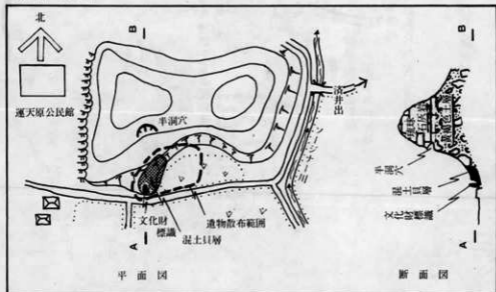


図3-3 運天原サバヤ貝塚

3-2 タキギター河口遺物散布地 〈仮称〉

所在地：屋我地地区運天原 ウシゴチ 運天原

済井出 サイノエ 長佐久

時代：沖縄貝塚時代前期、グシク時代中期

概要：運天原と済井出の境にあるタキギター川河口の両岸で遺物が採集される。東岸側は礫がごろごろした浜で、細長い範囲に遺物が散布している。西岸側は陸の先端に近く、琉球石灰岩のすぐ下



写真3-3 タキギター河口遺物散布地全景(北側より)

である。採集遺物は土器・類須恵器・沖縄製陶器である。土器は波によって著しく磨耗しており、全て無文の胴部で、貝塚時代前期とグシク時代のものである。

所見：東岸の陸地は現在客土され、キビ畑になっているが、以前は湿地帯であった。遺物が、付近から落ちたものか、タキギター川の上流から流されたものか、あるいは海流に乗って他から来たものか、はっきりしない。西岸は、琉球石灰岩の上の方から落ちてきた可能性が強い。

1981年3月に発刊した『名護市の遺跡』(1)において、本散布地を「アジャブク川河口遺物散布地」

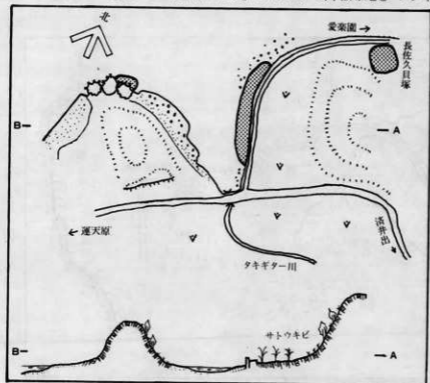


図3-4 タキギター河口遺物散布地〈仮称〉

(仮称)、としたが、「アジャブク」は河口付近の田の名であり、この河川の上流が「タキギター」と呼ばれているので、以後上記の遺跡名に改める。

3-3 スミイデナガサク 済井出長佐久貝塚 (NYgNaK)

所在地：屋我地地区済井出 長佐久

時代：沖縄貝塚時代後期

概要：運天原との境に近く、タキギター河口遺物散布地から北側に海岸線道路を約400m行った所の、通称ミナトガマと呼ばれる海岸低地に立地する。ここは海岸から丘陵間に入りこむ小さな低地で、中央付近を小川が流れている。遺物は低地の出口付近の畑内に散布し、この一帯は茶褐色の砂地である。

伝承：このミナトガマ一帯は、戦前7~8軒の家があったそうである。そしてこの低地の中央付近には、飲料水として使っていた井戸があり、現在でも残っている。

所見：採集される土器には、尖底とくびれ平底（オア）があり、わりあい長期間居住した可能性がある。

この畑は県営屋我地西部地区畑地帯総合整備地区に入っているため保存に向けて関係機関との調整が必要である。

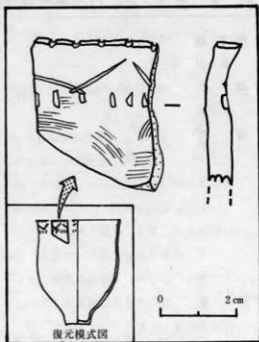


図3-5 済井出長佐久貝塚出土の土器

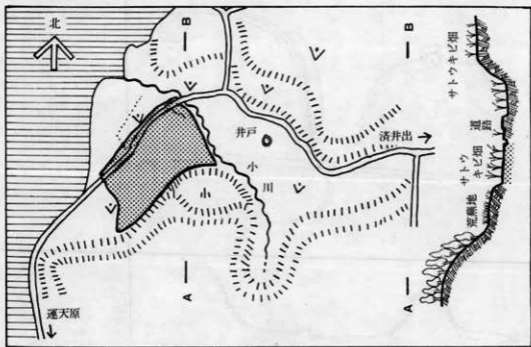


図3-6 済井出長佐久貝塚

3-4 ウフドーバル 大堂原貝塚 (NYgUK)

所在地：屋我地地区濟井出 ウフ 大堂原

時代：沖縄貝塚時代前期、中期？、後期

概要：愛楽園から運天原に向かう道の途中から北の方へ下って行くとうンドーバマと呼ばれる砂浜の海岸に着く。その一帯が大堂原貝塚である。西と南の丘陵斜面からキビ・イモ畑さらに海浜まで広



写真3-4 大堂原貝塚全景(西側より)

範囲に遺物が散布している。しかし、キビ畑は今から7年程前に採砂した後、国頭マージを客土し大部分が破壊されてしまった。西側斜面から おもむねざんていしき 面縄前庭式土器、ちんせんもん 沈線文、しとつもん 刺突文、にきじよくもん 二叉状刻文土器 ※ カウチバンタ式土器に似たもの等が採集された。平地から海浜にかけては後期土器、石器片、石皿、貝斧？等が拾われ、沖縄貝塚時代前・中・後期(約3000-1000年前)の長期間にわたる遺跡である。海浜からは弥生式土器を思わせる厚手の土器の底部が採集されたが詳しいことは不明である。

※ 沈線文…先の細いヘラで直線や曲線を画いた文様。

刺突文…先のするどいヘラでつき刺した文様。

二叉状刻文…先端を二叉にしたヘラでつけた文様。

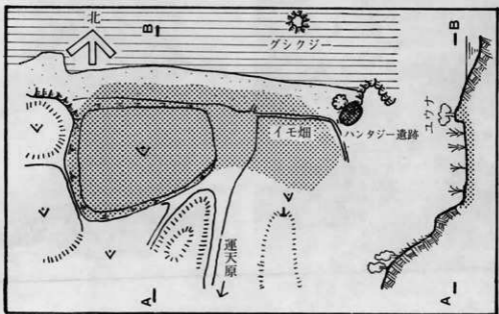


図3-7 大堂原貝塚・ハンタジー遺跡

3-5 ハンタジ遺跡〈仮称〉

所在地：屋我地地区済井出 ^{ウツトール} 大堂原

時代：グシク時代前期

概要：大堂原貝塚の東端にあたるハンタジという崖の割目に、茶褐色～黒褐色の遺物包含層がある（前頁図3-7参照）。層は波に洗われ、約3mの断面をあらわしており、層中に1cm前後の炭化物（スミ）がみられる。また、この包含層の崩れた土中よりグシク時代前期のヤジャガマB式土器（写真参照）が採集され、本遺跡の時代判定資料になった。

所見：本遺跡は大堂原貝塚に接しており、今後の調査いかんによっては、両遺跡を一つに統合する可能性が生じるかもしれない。



写真3-5 ハンタジ遺跡全景(西側より)



写真3-6 岩の割れ目に堆積した遺物包含層

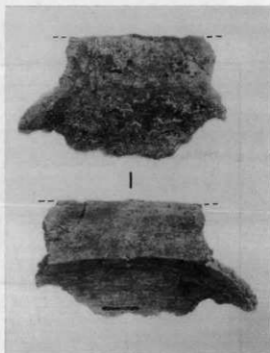


写真3-7 ハンタジ遺跡出土のヤジャガマB式土器

3-6 ウフドーバマ 大堂浜遺物散布地 (仮称)

所在地：屋我地地区^{ウフドーバマ} 大堂原

時代：沖縄貝塚時代前期、後期？

概要：屋我地の最北端に近い愛楽園の東、満潮時には海面下になる浅瀬に遺物が散布している。陸の方は砂地の平坦地だが、浅瀬は礫が多い浜である。



写真3-8 大堂浜遺物散布地全景(西側より)

採集遺物は、貝塚時代前期の大山式と後期と思われる数個の土器である。大山式土器は、図3-9に示したものが、波によって相当^{まろつ}磨滅を受けている。^{はひろみ}幅広の^{かたびきり}押引文^{ほどこ}を施している。

なお、1981年3月に発刊した『名護市の遺跡』(1)で、「愛楽園東方浜地遺跡(仮称)」としたのは「大堂浜遺物散布地」が適切なので変更した。

所見：付近の砂地からは遺物が見つからなかった。しかし、以前愛楽園内より土器を採集したという情報もあるので、砂丘上に遺跡があって流された可能性はある。



図3-8 大堂浜遺物散布地

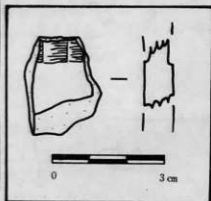


図3-9 採集された大山式土器

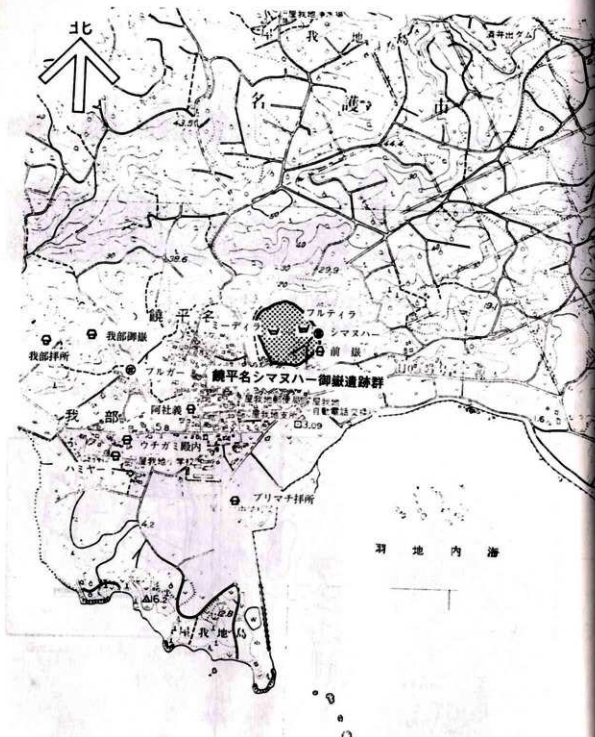
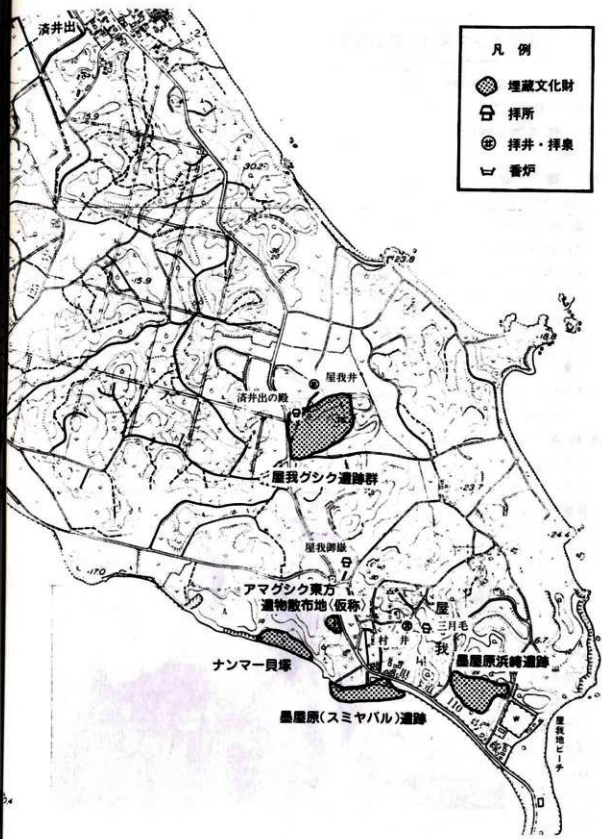


図3-10 鏡平名・屋我区域



- 凡例
- 埋蔵文化財
 - ⊕ 拝所
 - ⊗ 拝井・拝泉
 - ▽ 香炉

ヨヘナ
3-7 饒平名シマヌハー御嶽遺跡群 (NYgSU)

所在地：屋我地区饒平名
安田・村内

時代：古く時代前期～
近世

概要：字饒平名の東側の
森はシマヌハー（島之川）御
嶽と呼ばれる拝所であるが、
この森の石灰岩洞穴や斜面、
および周辺の低地に5ヵ所の
小貝塚と2ヵ所の遺物散布地
が確認された。この御嶽の森
は、ほぼ中央を通る道路によ
り東側のフルティラ、ミーデ
ラの2拝所の森と、西側のメ
ーダギの森に二分されている。

A地点：東側の森の北側
にあるフルティラという洞穴
内より古く時代前期の土器が
採集された。

この洞穴は奥
行約18m、最
大幅約7m、
最大高約3m
であるが、奥
に行くほど幅
・高さともに
狭くなる。入
口から中央の
部分にかけて
は、アラスジ
ケマンガイを
主体にした貝



図3-11 饒平名シマヌハー御嶽遺跡群



写真3-9 フルティラ(A地点)洞穴内の様子

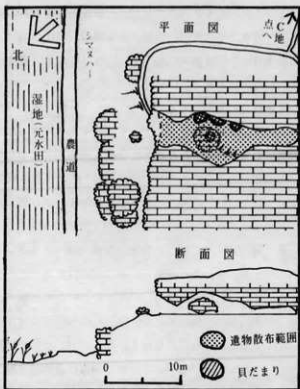


図3-12 フルティラ(A地点)の略図

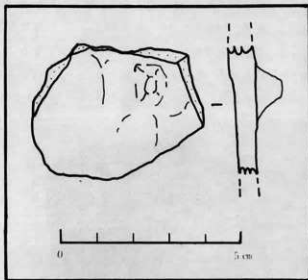


図3-13 A地点採集の土器(実測図)

層があるが、4ヶ所に集中してかたまっており、投棄当時の原位置をあまり壊していないとみられ、他の洞穴遺跡と同様、保存の良好な遺跡と考えられる。本地点の土器中、沖縄貝塚時代後期土器の胎土に類似したものもあるので、時代がこの時期までさかのぼる可能性もある。

- B 地点**： B地点は鏡平名部落からシマヌハへ行く時、井の近くが切通し道になっていて、南側の貝層の断面が露われている所である。フルティラのある森とB地点のある森との間は以前小谷だったが、20数年前切通しの道を作った、と言う。採集される遺物はグシク時代土器、中国製青磁、染付、南蛮陶器、沖縄製陶器等である。土器は胎土分類により無混入(胎土K)、砂粒混入(胎土I)、の二つに分けられる。時期はだいたいグシク時代中期(600年前)頃である。B地点のある森の頂上付近にメーダキという坪所があり、その近くは琉球石灰岩があるが、その周辺からは遺物が拾われていない。

- C 地点**： 東側の森の南西端の、A地点に通じる道に入る所にある貝層をC地点とした。ここは、貝層の前の道を造成ないし拡張した際に削られており貝殻や遺物が貝層前面に散布している。遺物は、中国製の青磁が採集されたが、アラマカイなど沖縄製陶器も多い。

- D 地点**： 東側丘陵の南斜面にある厚さ30cm位の貝層をD地点とした。貝層中には、沖縄製陶器が含まれており、これまでのところ近世～近代の時代と考えられるが、東に隣接するサトウキビ畑がグシク時代の遺物を含むG地点なので、それとの関連にも注意しなければならない。

E 地点： C地点のすぐ南側にある段丘状になった花卉畑^{かき}をE地点にした。土質は砂利混じりのマージ層である。採集した遺物は類須恵器、グシク時代土器、青磁、白磁、南蛮陶器、清代の染付、沖縄製陶器等である。土器は粘板岩粒混入（胎土H）、砂粒混入（胎土I）に分けられる。遺物から見てグシク時代前期（約700年前）に住みついたと思われる。

F 地点： F地点は、E地点と民家の間にはさまれている所である。そこはマウンド状に盛上った貝塚で、ガジュマルの大木やハゼの木が生えている。アラスジケマンガイを主とする貝がびっしり堆積している。南蛮陶器、染付、青磁、沖縄製陶器等が採集されたが、外国輸入陶磁器はおおむね



写真3-10 F地点の貝層

明代のものである。土器が今のところ採集されていないことから、他地点より割合新しいと思われる。

G 地点： C地点とD地点の間の畑内よりグシク土器、中国製の青磁、白磁などが採集された。ここは、背後がA地点（フルティラ）のある森で、南向きに立地している。本地点は1981年にブルトナーによって大規模な耕耘^{こまか}が行われた後に発見され、畑内には上記の遺物と黒色の遺物包含層が露出していた。採集された遺物は、グシク時代後期（約600～500年前）から古琉球（約500～300年前）のものが多い。地形的にみて、住居址などの遺構が存在する可能性が高い。土器のなかには、滑石混入（胎土I）が一個あるが、これは他遺跡でもほとんど出ず、めずらしい。

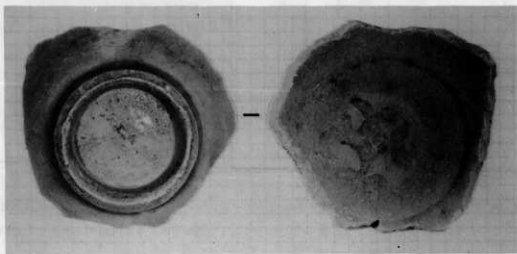


写真3-11 F地点貝層出土の中国製青磁

信 仰：フルティラの洞穴内に、以前採まれていた二つのビジュルがある。このビジュルは近代になって破損されているが、昔は子孫繁栄、五穀豊穡を願う貴重なものであった。民俗資料としても現在では少なく、重要であり、保存しなければならない。

所 見：シマヌハー御嶽遺跡群は、本島における他のグシク時代遺跡に比べ、大規模な貝塚を形成している。これから考えると、その時代は稲作農耕より漁撈に生産の比重があったのではないかと思われる。また、明治、大正あたりまで貝を大量に食べたらしく、現部落内の屋敷の垣根に相当投棄されている。

A地点は、島尻でよく見られる貝塚時代からグシク時代に移行する時の洞穴遺跡と類似する。B、C、D、E、F、Gの各地点は、現在道路により分断されているが、距離的に接しており、一つにまとめられる可能性もある。従来の地点における村落移動を採集遺物だけで考察してみると、次のようになる。

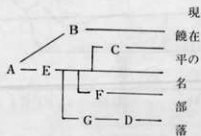


写真3-12 シマヌハー(島之川)



写真3-13 饒平名シマヌハー御嶽遺跡群全景(北東側より)

3-8 ナンマー貝塚 (NYgNK)

所在地：屋我地地区^{ミヘナ} 晩平名^{ワツラン} 湧増

時代：沖縄貝塚時代後期

概要：屋我我にある自然休養村管理センターの西側丘陵の遊歩道を通して越えると羽地内海に面した小さなサトウキビ畑に出るが、ここから沖縄貝塚時代後期の土器片や貝殻が採集される。土器はこれまで沖縄貝塚時代後期の中でも後半(約1,500~800年前)に属するくびれ平底^{ひらぞこ}(図3-14)が発見されており、貝殻はアラスジケマンガイやオハグロガイなど、羽地内海に多い貝殻が採集された。この貝塚の前面はすぐ浜になっているため波によって断面が削られ遺物包含層^{ぶくろい}が露出している。

所見：南側の浜に露出している遺物包含層は強風時の波によって洗い流されており、護岸設置などの保存対策が必要である。

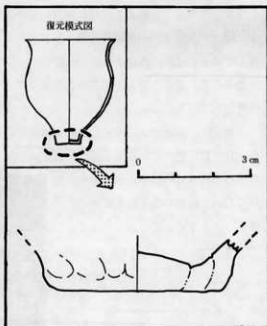


図3-14 ナンマー貝塚出土のくびれ平底土器

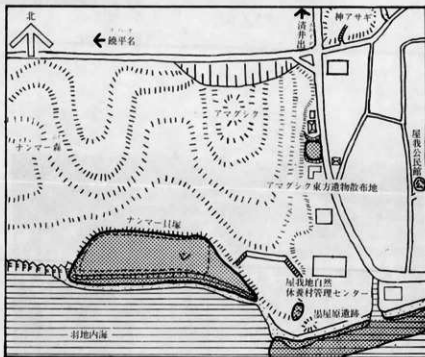


図3-15 ナンマー貝塚

3-9 アマグシク東方遺物散布地 (仮称)

所在地：屋我地区屋我 ^{スミヤハシ} 墨屋原

時代：沖縄貝塚時代後期？

概要：字屋我墨屋原の西端（鏡平名側）の森を地元ではアマグシクと呼んでいる。

このアマグシクの屋我部落側の斜面下の畑から10数片の土器を採集した。土器は小片なので、時代を決定するのは困難であるが、胎土^{ないど}から沖縄貝塚時代後期と推定される。現場は標高10m位で、現在の海岸からは約180m内陸にはいつている。

所見：本遺物散布地からはいままで遺物包含層は確認されていないが、背後を山にまもられた立地は遺跡存在の可能性が高く今後の詳しい調査が必要である。



写真3-14 アマグシク東方遺物散布地全景(東側より)

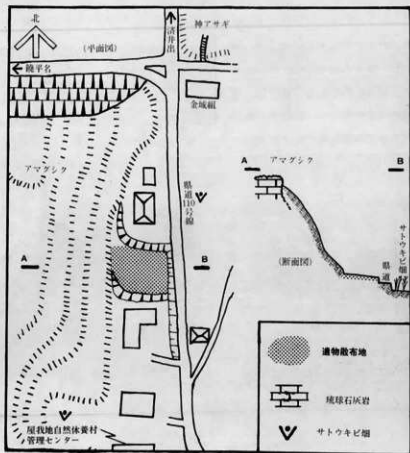


図3-16 アマグシク東方遺物散布地(仮称)

3-10 屋我グシク遺跡群 (NYgYG)

所在地：屋我地区屋我 アタイノ 阿太伊原

時代：グシク時代中期～近世

概要：屋我部落から済井出部落に行く途中に屋我グシクと呼ばれる坪所がある。

ここは、グシク時代の中期（約700年前）から近世（約130年前）までの約600年間続いた部落跡と考えられる。標高約36mの丘陵の頂上から斜面、および周辺にA～F、H、の7ヶ所の小貝塚と、G地点とした住居址の遺跡が1ヶ所ある。

このうちA小貝塚は、丘陵頂上とその周囲に遺物が散布する。頂上は、露頭した石灰岩と人為的に積んだ石垣とを組み合わせ、直径10m程の平坦地になっており、屋我グシクのイビがある。南側斜面では、11世紀に



図3-17 屋我グシク遺跡群



写真3-15 屋我グシク遺跡群全景(南西側より)

銭造された中国銭や13～14世紀の中国（南宋）の青磁とともに多量の鉄滓（かねくず金屎）や焼土などが出土し、グシク時代中期（約700年前）頃の鍛冶場跡と考えられる。

B小貝塚は中腹の平坦地におおむね長方形に堆積していたが、発掘によって古琉球（約500年前）の祭り場の跡ということがわかった。またD小貝塚に隣接するG地点は、採土によって土を削られた時に竪穴住居跡が確認された。D小貝塚は、G地点の住居跡と同時期のものと考えられる。（本書19頁参照）。

済井出の屋我屋宮城姓の祖先は屋我グシク周辺に住んでいたといわれ、今でもD小貝塚にある坪所を坪んでいる（『屋我地郷土誌』）。また、屋我部落が現在の墨屋原に移動したのは1858年（124年前）とされている（『球陽』）。



写真3-16 A小貝塚出土の遺物



写真3-17 A小貝塚出土の鉄滓(金屎)



写真3-18 A小貝塚(頂上)の様子



写真3-19

B小貝塚(南側より)



写真3-20

B小貝塚出土の遺物



写真3-21

C小貝塚出土の遺物

所見：グシク時代の遺跡はA、C、Dの3貝塚と、Gの住居址である。このうちC、D、Gは古琉球まで続き、古琉球にはB、E、F、Hの貝塚が出現する。そしてC、D、E、G、Hは、近世の1858年に現在の墨屋原に移動するまで継続すると考えられる。

これまでの調査で屋我部落には、名護市で最も古い墨屋原遺跡（約5000年前）、沖縄貝塚時代中期（約2500～2000年前）の墨屋原浜崎遺跡、沖縄貝塚時代後期（約1000～800年前）のナンマー貝塚とアマグシク東方遺物散布地などの、まだ屋我の祖先が農業を行なわないで生活していた沖縄貝塚時代以前の遺跡と、農業を生活の基礎にして生活したグシク時代以降である、この屋我グシク遺跡群など、5ヵ所の遺跡が発見された。これらの遺跡から、現在の屋我部落は少なくとも数千年の歴史をもつ可能性が考えられる。1980年の春に行われた屋我グシク遺跡群の小規模な発掘調査で、その一端は明らかになったが、数千年の間、屋我の祖先がどのような生活をおくってきたのかを知ることは、今後の調査に待つところが大きい。

参考文献： 仲宗根重吉『屋我地郷土誌』 1975年3月
球陽研究会編著『球陽』 角川書店 1974年



写真3-22 D小貝塚にある済井出の拝所

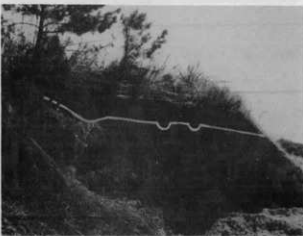


写真3-23 G地点の竪穴住居址露出状況(北側より)



写真3-24 G地点の保存工事後(北側より)

3-11 スミヤバル 墨屋原遺跡 (NYgSI)

所在地：屋我地地区屋我 墨屋原

時代：早期、沖縄貝塚時代中期、後期

概要：屋我部落の南側は羽地内海に面する浜になっているが、この浜より九州縄文時代前期の曾畑式や轟式に類似する土器や沖縄本島に分布の中心をもつ室川下層式土器など現在の沖縄先史時代の中で古い時代に属する土器（約5000～4500年前）、沖縄貝塚時代中期（約2,500～2,000年前）と沖縄貝塚時代後期（約2,000～800年前）、そして奄美地方の土器である面縄前庭式土器や本土の弥生式と思われる土器など、多数にわたる土器片が、石斧などの石器類とともに採集された。

現場は屋我部落の西側にある屋我地自然休養村管理センター前のボート置場付近から東側のブニハジムイ（舟接森）の南側付近にかけての浜一帯で、長さ約350mにわたり遺物が散布している。なかでも自然休養村管理センターのボート置場と前の浜は数年前に浚渫されたために特に遺物の量が多い。

所見：本遺跡は名護市の遺跡の中では最も古い曾畑式や轟式に類似する土器（約5000年前）から沖縄貝塚時代後期（約2000～800年前）までの時代を含み、また地域的にも奄美諸島や九州に中心をもつ土器を出土するなど、屋我地や名護市全体の歴史の古さや数千年前の交流の状況を知るうえで重要な遺跡である。これまでの調査では明確な遺物包含層は確認されていないが、試掘調査や浚渫工事の状況から推測すれば浜の砂層の下にある灰黒色～赤色の粘土層中に古い時代の遺物が含まれる可能性が高い。

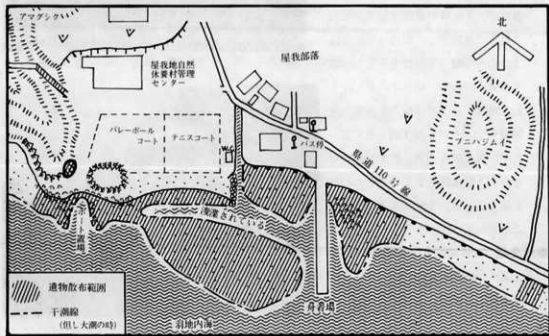


図3-18 墨屋原遺跡



写真3-25

墨屋原遺跡遠景(西側部分)

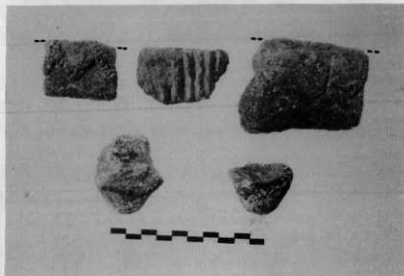


写真3-26

墨屋原遺跡出土の主な土器

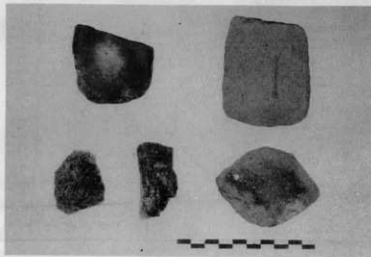


写真3-27

墨屋原遺跡出土の石器類

3-12 ^{スミヤバルハマサキ} 墨屋原浜崎遺跡 (NYgSHI)

所在地：屋我地地区屋我 ^{スミヤバルハマサキ} 墨屋原浜崎

時代：沖縄貝塚時代中期、後期

遺跡の概要：墨屋原浜崎遺跡は、現やが市営団地の遊園地の下と西側のキビ畑にあたる。遊園地は、発見当時キビ畑であった。遺跡の北側は標高20m以上の丘陵をなし、冬の北風を防いでいる。羽地内海や外海まで100m程で、生活の場として好適である。団地建設予定地で破壊の恐れがあったが、試掘調査を経て名護市建設課と調整した結果、遊園地として保存することになった。



写真3-28 団地建設前の墨屋原浜崎遺跡全景(南側より)

試掘調査に 至る経過：墨屋原浜崎遺跡は、建設予定の「やが市営住宅団地」の事前調査の折り、1980年8月28日に発見された。そこで、市建設課の「市営住宅建設計画」をもとに、詳細な表面調査を実施した。遺物の散布状況から判断して、試掘調査を行なうこととし、その結果をもって、建設計画との調整を進めるに至った。

調査の概要：試掘ピットは、図3-20に示す地点に数ヶ所設定した。住居棟予定地のD-21・36、

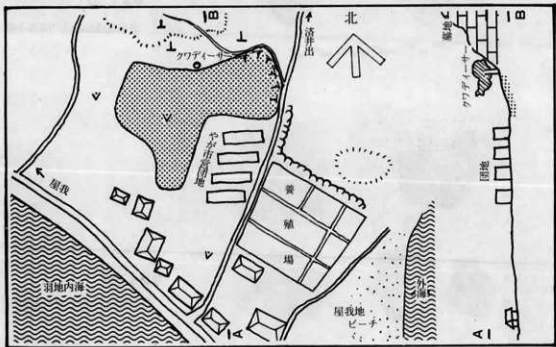


図3-19 墨屋原浜崎遺跡

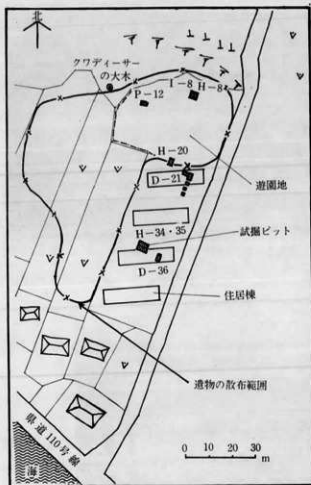


図3-20 市営団地予定地および試掘地点

H-34・35の各ピットは、数年前3m程採砂された後、国頭マージや粘土等で客土されていた。H-20ピットは客土された境に設定されたが、図3-21に見る通り、以前の層を斜めに削って客土されているのがよくわかる。第1層は黒褐色のこまかい土層で、攪乱された耕作土層である。第2層は貝や炭を含む黒褐色土層で、遺物包含層である。第3層は白砂層の地山である。なおこの層序は他のピットも共通であった。H・I-8ピットは、第1層から沖縄貝塚時代後期と中期の土器が出土し、第2層から中期の土器とともに柱穴が一つ出た。土の状態から、踏みかためられた住居の床面である遺構の可能性が高いので、そこで発掘をストップした。P-12ピットの第2層は、石灰岩の小石が敷きつめられており、その上面から溝状のくぼみや、獣骨が出土した。遺構と判断し、発掘を止めた(写真3-29)

試掘によって多量の貝類と土器が出土した。

土器は小破片が多く、ほとんど無文である。

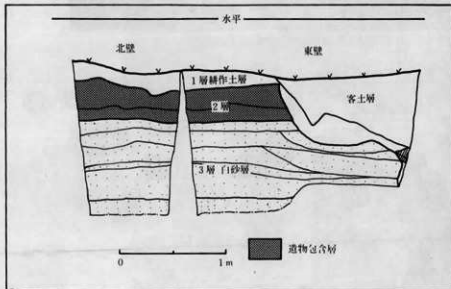


図3-21 H-20ピットの断面図

土器の口縁部器形は三角形を呈する宇佐浜式土器、口唇部が丸く肥厚するもの、直口のものの、外反のものに大別され、底部は丸底、尖底(乳房状を含む)にわけられる。有文土器は少なく、押引文と刺突文の2種類である。遺跡の時

期は、だいたい中期の宇佐浜式から後期前半と推定される。

市建設課との調整 試掘調査の結果を踏まえ、市建設課と遺跡保存に関し調整した結果、次の事項で合意した。

1. 住居棟建設予定地は、すでに大規模な採砂客土によって遺跡が確認されないで、建設を認める。

2. 北側の遊園地予定部分は試掘によって遺構が発見されたことから、住居地の可能性の高い遺跡である。したがってそこは十分な深さまで盛土し、保存をはかった上で団地の遊園地を建設する。

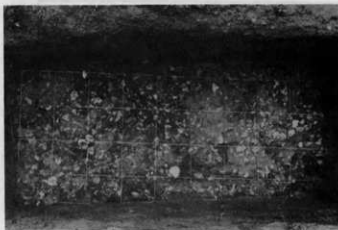


写真3-29 P-12ピットの石敷遺構



写真3-30 団地建設後の墨屋原浜崎遺跡(北側より)



写真3-31 試掘調査風景

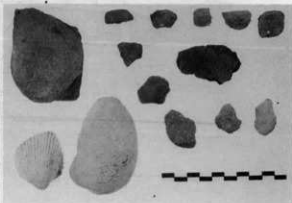


写真3-32 墨屋原浜崎遺跡出土の遺物

A black and white photograph of a valley with a village and mountains, overlaid with a faint map. The map shows a network of roads and geographical features. The text is centered over the upper part of the image.

第4章
羽地地区の遺跡



図4-1 羽地地区の遺跡分布

羽地地区の概要

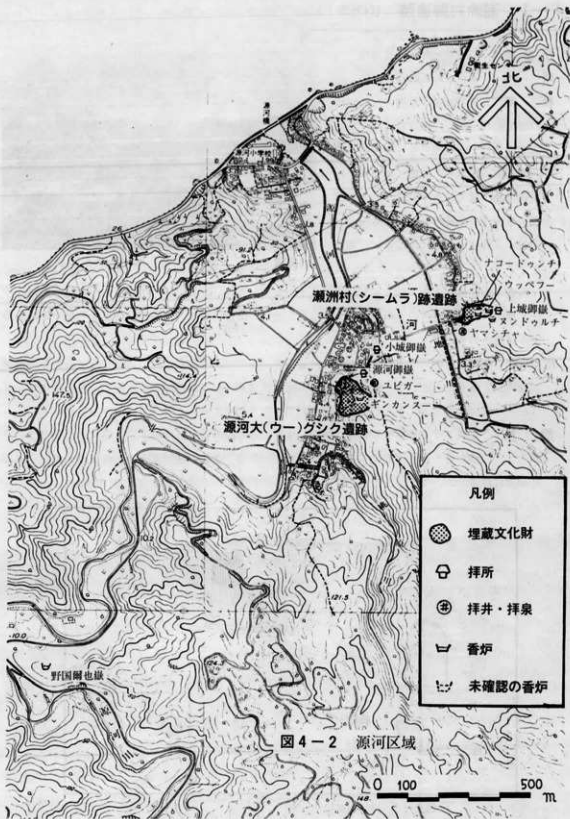
現在、羽地地区では21ヶ所の遺跡が確認されている。北側の源河部落や、真喜屋、仲尾次、川上、伊差川部落にも遺跡が確認されている。また、仲尾から親川、田井等、振慶名に続く丘陵地帯には、グシク時代から古琉球にかけての遺跡が集中している。古我知には古我知焼窯跡が、戦前から知られていた。

これらの遺跡の中で、とくに仲尾～振慶名の遺跡は、親川グシク遺跡を中心にして、周囲の小谷（マタ）内に分散して立地しており、グシク時代（約800年～500年前）から古琉球にかけて発展した部落跡と考えられる。また他の遺跡もほとんどがグシク時代以後の遺跡であり、現在の部落に関連をもつ重要な遺跡と考えられる。

羽地地区で、これまで確認された遺跡のうち沖繩貝塚時代の遺跡は、真喜屋の奥武原遺跡（中期、約2500年～2000年前）ただ一つであり、グシク時代以降の遺跡数に比較して極端に少ない。このため、今後は貝塚時代の遺跡確認も急ぐ必要がある。

「羽地ターブックワ」といえば、沖繩中に聞こえた美田であったが、この水田をいつの頃から開拓しはじめたのかということも、遺跡をとおして探らねばならない課題のひとつである。また、日本でも有名な「古我知焼」は、実のところ、詳しいことはあまりわかっておらず、窯跡自体の詳細な調査が求められている。

こうした中で、私たちは羽地地区内の一つ一つの遺跡を大切に残していかなければならないと思うのである。



4-1 瀬洲村跡遺跡 (NHSI)

所在地：羽地地区源河^{メーザール} 前川原

時代：古シク時代後期～近代

概要：源河部落の東側の丘陵中腹の標高約45～70mの地点に立地する。海岸より約1km内陸に入った所の、西向き斜面にあたる。北西に海が開け、屋我地島、運天、古宇利島がみえ、西側にも大古シク遺跡などがみえるが、南側から背後の東側は山によって視界がとざされる。



写真4-2 瀬洲村跡と源河大古シク遺跡遠景

現在は大部分がミカン畑として利用されているが、その一帯と上部の坪所、また北側下方の畑や住宅地より古シク時代の土器や、古シク時代～近代の染付、青磁、沖縄製の荒焼、上焼などの陶器片が採集される。

伝承：現在の源河部落は、大古シク付近のタバルやミズバルなどのいわゆる源河と、この瀬洲が合併して成立したという。瀬洲が最終的に丘陵斜面からおりたのは昭和2年で、大正時代までは、「源河と瀬洲はマキューがちがう」といわれていたそうである。

所見：これまでの遺物散布範囲は略図に示すとおりであるが、ヌブイジョウ、メーヌクワ、クガチヤーの跡といわれる付近にもひろがる可能性がある。現在の源河部落は、もとは大古シク遺跡と瀬洲村跡遺跡の、少なくとも2カ所のムラにわかれていたと考えられる。

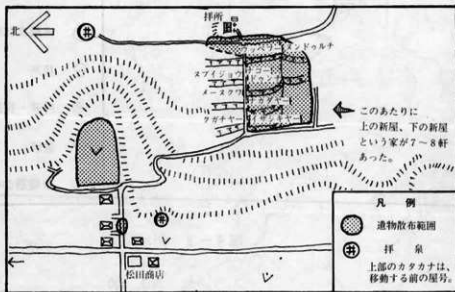


図4-3 瀬洲村跡遺跡

4-2 源河大グシク遺跡 (NHUG)

所在地：羽地地区源河 桃原

時代：グシク時代後期～近世

概要：字源河の平野の中央奥、北側に向って突き出た丘陵の北側斜面、標高20～40m 付近に立地する。グシク時代の土器や類須恵器、中国製青磁、南蛮陶器などと、近世の中国製陶磁器、沖縄製陶器が採集される。この付近には2カ所の拝所があり、下方の拝所の東隣りには小規模な石垣があるが、遺跡との関連は不明である。また、東側斜面下にはユビガーと呼ばれる拝泉がある。

伝承：この丘陵上の拝所のうち、上方の拝所を大グシク、下方をギンカンスー、またはギンカンシユウ（源河の主）と呼んでいる。これらは平良門中と新里門中が中心になって拝むそうである。

所見：この遺跡内には近世の陶磁器類も多く、近世までは何らかの家屋があった可能性がある。現在の源河部落が成立する前のムラのひとつだと考えられる。

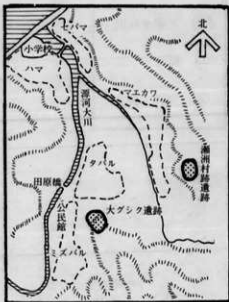


図4-4 瀬洲村跡遺跡と大グシク遺跡

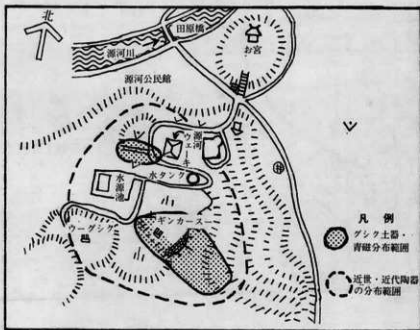


図4-5 源河大グシク遺跡

凡例	
	埋蔵文化財
	拝所
	拝井・拝泉

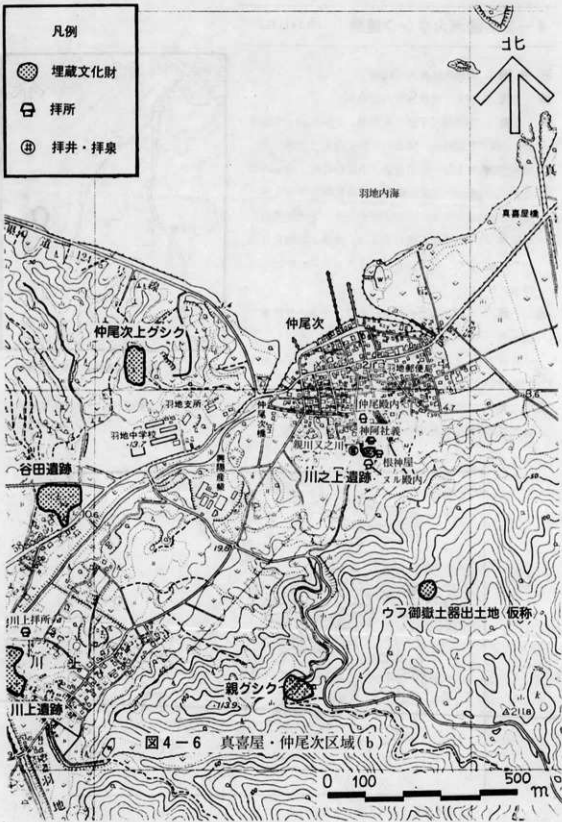
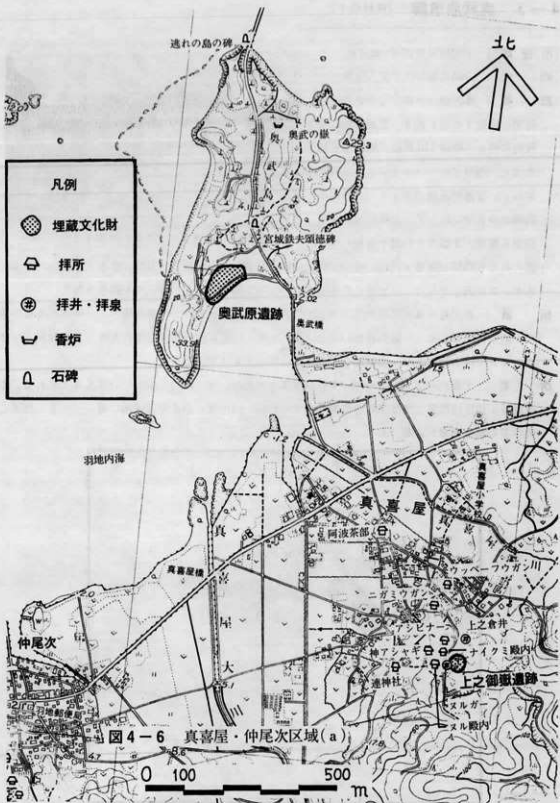


図4-6 真喜屋・仲尾次区域(b)



4-3 奥武原遺跡 (NH01)

所在地：羽地地区真喜屋 ^{オーバン} 奥武原

時代：沖縄貝塚時代中期～後期

概要：奥武原島は字真喜屋と屋我地島
の間に位置する島である。真喜屋から屋
我地に向かう県道 110 号線の奥武橋を越
え、西側にサトウキビ畑として利用
されている海岸低地がみえる。この畑の
西側部分を中心にして、沖縄貝塚時代中
期から後期の土器片と石皿や石製の錘と



写真4-3 奥武原遺跡全景(南側より)

と思われる石器類が採集された。後期土器は中期土器よりも少量だが、海浜に分布する傾向がある。また、この海浜からはアラマカイや荒焼などの沖縄製陶器に加え、青磁片が採集された。

伝承：奥武原島は真喜屋と仲尾次の墓地である。戦前はオーバン（奥武番？）と呼ばれる墓の番人が両字の出資によって雇われていたという。またこの真喜屋と奥武原島間の海峡は、奥武橋がかけられるまでは水深があり、山原船などの停泊地だったそうである。

所見：土器片の中で底部の厚い平底が採集されたが、本土系の土器の可能性も考えられる。本遺跡はJ地区団体営土地改良総合整備事業（昭和58～62年度）の予定区域内になっており、保護に向けての調整作業が必要である。



図4-7 奥武原遺跡

4-4 ウィーヌウタキ 上之御嶽遺跡 (NHU1U)

所在地：羽地地区真喜屋 押原
 時代：グシク時代中期～後期
 概要：真喜屋公民館から南方向へ道を登って行くと左右に数カ所の押所が見えてくる。左手の鳥居をくぐり、さらに登って行くと押殿やホルトノキ、リュウキュウハリギリの

大木がそびえる小広場がある。ここが上之御嶽でこの広場一帯からグシク時代の土器が採集される。採集遺物は土器のみで陶磁器は採集されていない。土器は胎土に粘板岩粒を入れたもの（胎土H）、貝殻片を入れ、これが脱落して表面がアバタ状を呈するもの（胎土J）、その他に大別でき、アバタ状土器が多いことからグシク時代中期の終末から後期まで住んでいたようだ。

所見：伝承によると、真喜屋の祖先は、稲嶽の北部製糖株式会社後方にある真喜屋御嶽と上之御嶽下方のアシャギ庭付近に住んでいた、と言われていた。しかし、上之御嶽からグシク時代の遺物が出ていることから、アシャギ庭に住む以前は同御嶽に住んでいたようだ。



写真4-4 上之御嶽遺跡出土のグシク土器

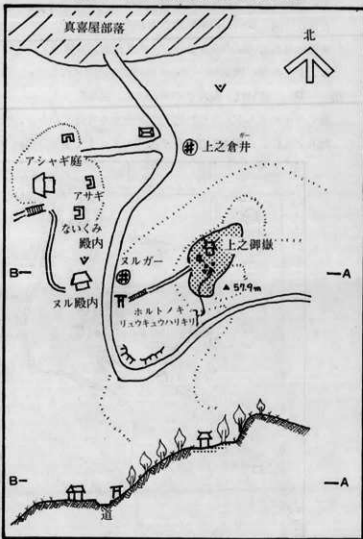


図4-8 上之御嶽遺跡

4-5 ハーヌウイ 川之上遺跡 (NHHU1)

所在地：羽地地区仲尾次 川之上

時代：グシク時代

概要：字仲尾次のヌルドゥンチ、神アサギ、根神屋のある場所の東隣の畑内より、グシク土器、類須恵器、青磁片が採集される。ここは仲尾次部落の南側にあたり、部落の向きからみれば、もっとも奥に位置することになる。標高は約12~14mであるが、部落とはほぼ同一レベルの平坦地である。

東側は標高41.9mの丘があり、その北側麓には親川又川ウレ-ガマツガエと呼ばれる拝泉がある。西側には小川がある。また南側に標高160~200m位の山がそびえている。

所見：遺物は、現在までのところ、図示したように、一部の範囲からしか採集されていないが神アサギやヌルドゥンチ付近まで分布する可能性がある。仲尾次上グシク遺跡やウフ御嶽土器出土地とともに、仲尾次部落の歴史を考えるうえで重要な遺跡である。

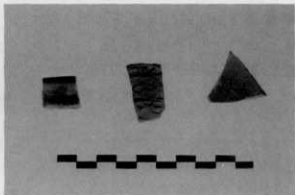


写真4-5 川之上遺跡出土の遺物

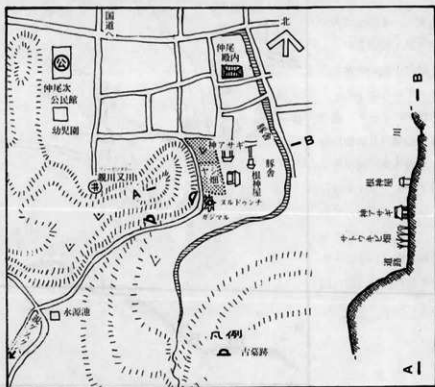


図4-9 川之上遺跡

4-6 ウフ御嶽土器出土地〈 仮称 〉

所在地：羽地地区仲尾次 ムナオデ 茂久地原

時代：グシク時代？

概要：ウフ御嶽は字仲尾次の拝所である。仲尾次の背後にあたる南側丘陵の標高約120～150mの斜面に位置する。現場は枯葉と腐植土によっておおわれているが、土器の小破片を1個得ただけである。香炉の設置されている付近は人為的に平坦にされている。



写真4-6 ウフ御嶽土器出土地近景(北側より)

この御嶽の場所は森林中であり、また参道も明確ではなく、初めての者が場所を確認することは非常に困難である。

所見：土器は小破片のため、時代は判然としない。しかし、御嶽から出土したということからグシク土器の可能性が考えられる。

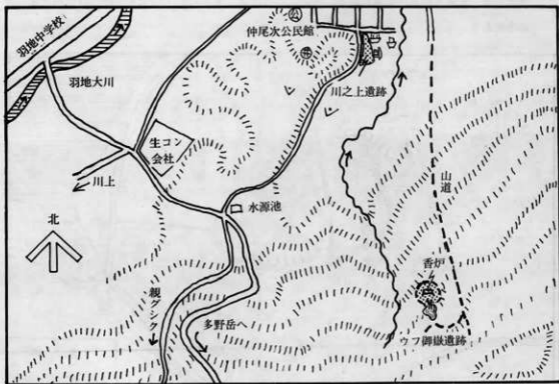


図4-10 ウフ御嶽土器出土地

4-7 仲尾次^{ウイ}上グシク遺跡 (NHUIG)

所在地：羽地地区仲尾次^{ウイ} 仲尾次

時代：グシク時代?～近世

概要：羽地中学校の北側背後のこんもりした森を、地元では上グシクと呼んでいる。この森の中や、南側斜面のサトウキビ畑より、南蛮陶器や沖縄製陶器などと、判然としないが土器に類似するものが採集された。ここは標高約46mの頂上を中心に、南側はゆるやかな斜面をなしているが、東から北側にかけては急傾斜になっている。南側にはこのグシクとともに仲尾次部落が押んでいる押泉が3ヶ所ある。また、この森の中にウイグシク、ナカグシクの2ヶ所の押所があるが、どちらがどの名称であるかは、部落の中でも2つの意見があり現状では決定できない。



写真4-7 仲尾次上グシク遺跡遠景

所見：これまでの調査では、明確なグシク時代の遺物は採集されていない。しかし仲尾次ではこの上グシクから現在の部落へ移動した、という伝承があるので、今後さらに詳細な調査を行なう必要がある。

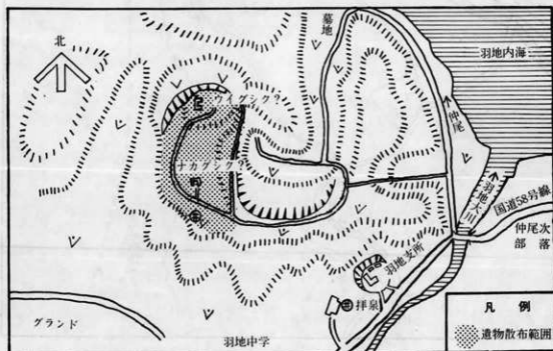


図4-11 仲尾次上グシク遺跡

グシク論争と

名護市内のグシク

「屋我グシク」や「親川グシク」あるいは「ナングシク」といった、いわゆる「グシク」は名護市内や山原にも数多く地名として現存し、また遺跡としても確認されている。

ところで、この「グシク」とは一体何なのだろうか。じつは、まだはっきりした結論はでていない。グシクの性格については、幾人かの研究者によって論議されているが、その中の代表的な見解に、1) 御嶽説、2) 防禦的な集落説、3) 日本中世の館うたけに類似するものとする説などがある。

グシクは、その大部分が、考古学的にグシク時代と呼ばれる今から約 800～500 年前の時代に発生したものと考えられている。この時代は、それまで海や山の動植物の採集を生活の基盤にしていた沖縄貝塚時代と、尚巴志によって琉球王国が成立した後の古琉球との間にあたり、沖縄ではじめて農業を生産の基礎にして生活するようになった時代である。この時代は、農業や海外貿易が飛躍的に発展しており、また按司あじと呼ばれる支配者も出現してくる。グシク時代は、沖縄の前近代の歴史を解明するためにも重要な鍵をにぎっているといってもいい。ところが、上記のとおり、グシクの性格についてはまだ結論がでていない。

この問題は名護市でも同じである。ナングシクやその他の多くのグシクは、現在の各部落の発祥に関係すると言いつたられているにもかかわらず、その性格については不明な点が多い。今後は、考古学の調査によって明らかにしていかなければならないが、地元ちよんのグシクについて知っている方が、どなたかいらっしゃらないだろうか？



親川グシクの石垣

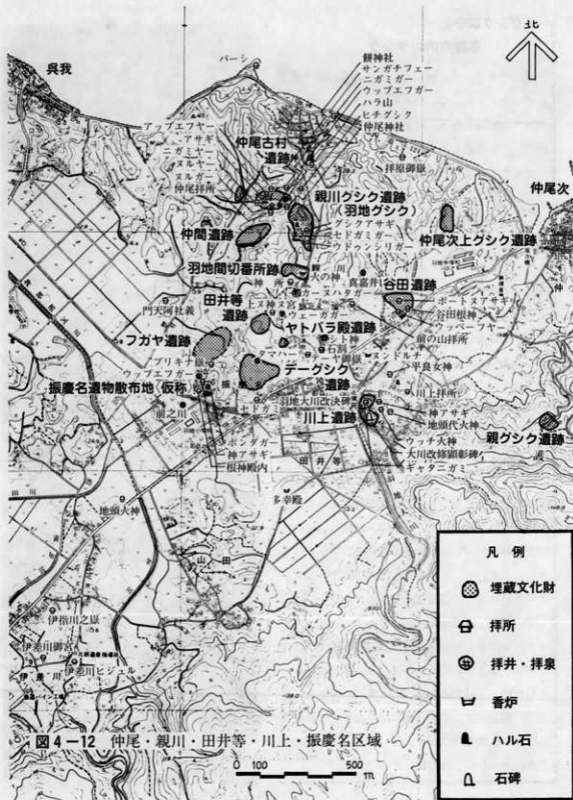


図4-12 仲尾・親川・田井等・川上・振慶名区域

4-8 仲尾古村遺跡 (NHNF)

所在地：羽地地区仲尾 ^{ハツチ マヅハ} 半田、真高

時代：グシク時代後期～近世

概要：振慶名から仲尾トンネルに向かう道の右側にある小谷が仲尾の古い村落である。現在は、キビ畑や野菜畑になっている。

採集した遺物は、近世期の沖縄製陶器で、なかでも古我知焼が多い。その他青磁、新旧の染付が採集され、土器、白磁、灰白磁、南蛮陶器が少量見つかっている。古村の西側は真高と呼ばれており、その一部の小丘陵からも青磁や陶器が少し見つかっている。古村から14世紀の染付と線刻蓮弁文の青磁が出ている。

所見：仲尾の祖先の人は、グシク時代終末頃、今の御願所の南斜面に住みつき、又の入口附近を水田耕作しながら数百年間住み続け、勘定納港の発展にともなって便利な海沿いに移って行ったと考えられる。



写真4-8 仲尾古村遺跡全景(南側から)

写真4-9 仲尾古村遺跡出土の遺物

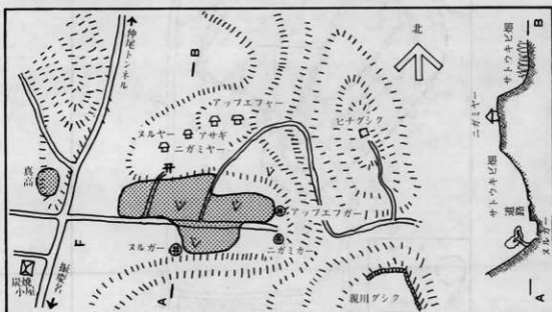


図4-13 仲尾古村遺跡

4-9 親川グシク遺跡 (NHOG)

所在地：羽地地区親川 イバザス(イバジャフ)

時代：グシク時代

概要：羽地間切番所跡の北側に見える標高約50mの丘陵頂上に立地する。ここは、親川・田井等・振慶名の部落から羽地内海沿いの仲尾部落付近まで続く、標高35～53mの丘陵地帯のほぼ中央に位置する。この丘陵地帯は多くの小さな谷

(マタ)が入りこんでおり、その低地部分は、近年まで主に天水田として利用されていた。

遺構：丘陵頂上に連続する3ヶ所の石垣圍いがあるが、石垣の石が根石部分を除いてとり去られた部分が多く、平面プラン以外の当時の石垣の状況を知ることは困難である。石垣の石は直径30cm程の石が多く使われており、野面積みである。



写真4-10 親川グシク遺跡遠景(南側より)



図4-14 親川グシク遺跡

遺物包含層：いちばん高い所にある石垣囲いのサトウキビ畑の南側断面と石垣囲いの外部に、2ヵ所の遺物包含層が確認される。

遺物：グシク土器、中国製青磁、染付、南蛮陶器なんばんなどが多い。グシク土器は他の遺物に比べて、採集したのが5個と非常に少ない。粘板岩粒たいど（胎土H）と砂粒混入（胎土I）、無混入（胎土K）に分けられる。なお、沖縄製陶器など、近世～近代の遺物も採集されるが、この遺跡との直接の関係は不明である。

伝承：このグシクは羽地按司が築かせたものであるが、工事途中で中止し、今帰仁の北山グシクに移ったために、実際には使用されなかったという伝承がある。

所見：現在はほとんどが私有地に含まれ、サトウキビ畑として利用されており、上層部の攪乱かくらんは進んでいると考えられるが、深耕は行なわれていないようなので、遺構残存の可能性はある。本遺跡一帯は県営仲尾地区の土地改良事業（昭和56年度採択予定）区内に入っており、現在保存に向けて調整中である。名護市内ではもっとも大きな規模をもつグシク遺跡という点からも、将来この遺跡自体の整備を行ない、保存と活用をはかることが重要である。

参考文献：島袋源一郎『沖縄県国頭郡志』1919年7月

平良盛吉・川上清栄『羽地村字親川郷土誌』1962年7月



写真4-11

親川グシク遺跡の石垣

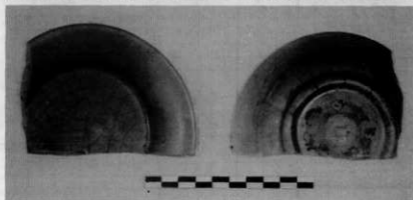


写真4-12

親川グシク遺跡出土の青磁

4-10 羽地間切番所跡 (NHHB)

所在地：羽地地区親川 イバザス

時代：古琉球～近世

概要：羽地間切番所跡は、親川部落の北の小丘陵上である。遺物が採集される所はこの小丘陵上とその斜面、後ろ側の「神の道」を越えた崖下である。崖下は当時のちり捨て場と思われ、遺物が堆積している。採集遺物は、青磁、中国製染付、白磁、沖縄製陶器、赤瓦等である。現在キビ畑になっていて番所の遺構は残っていないが、池城殿内と羽地御殿の両「火又神」が祀られている。

伝承：親川グシクの石垣を運んで三段の高い石垣を築き、建物は瓦葺であったという。明治35年仲尾次に移された。

所見：番所が設置されたのは、17世紀といわれている。しかしここではそれ以前の青磁や染付が出ていることから、古琉球時代より、何らかの人が住んでいたと思われる。

参考文献：羽地村誌編集委員会編 『羽地村誌』1962年8月

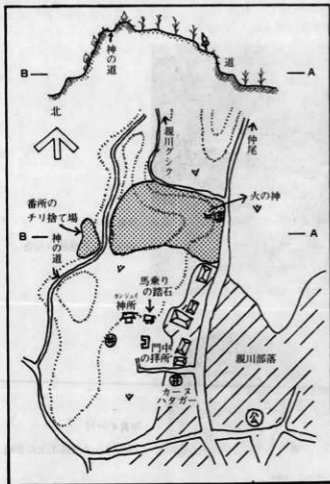


図4-15 羽地間切番所跡



写真4-13 羽地間切番所跡全景



写真4-14 羽地間切番所跡採集遺物

4-11 ^{ナハマ} 仲間遺跡 (NHNI)

所在地：羽地地区田井等 ^{ナハマ} 仲間

時代：グシク時代

概要：仲尾古村遺跡の南側に、丘陵をひとつはさんで隣接する小さな谷に立地し、グシク時代と考えられる土器片と青磁が散布する。遺物が散布するのは、現在までのところ、カボチャ畑とサトウキビ畑に利用されている低



写真4-15 仲間遺跡全景

地部分（標高約8m）のみで、北・東南をとりかこむ丘陵（標高35～45m）および斜面からは発見されていない。また、近世から近代にかけての陶磁器も散布している。土質は、東側の低地からカボチャ畑までは粘土質の土で、それより高くなるサトウキビ畑はかわいた赤土である。なお、南側斜面下には拝泉がある。本遺跡からの採集遺物が少ないため、北側に隣接する仲尾古村遺跡など、周辺遺跡との関連は不明である。

伝承：以前、この小谷には人々が住んでいたといわれ、いまでも仲尾の一門中が拝泉をおがみにくるそうである。数年前にこの畑からウーストニー（豚の餌箱）が出土したという。

所見：本遺跡は小さな谷の底に立地するため、住居址や水田址の存在する可能性が高い。

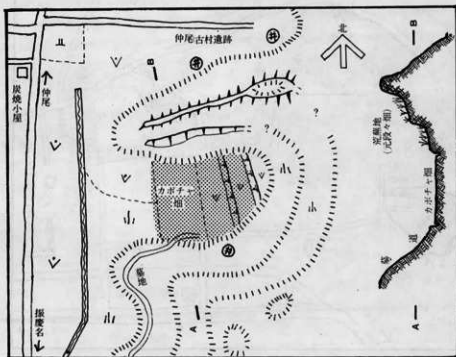


図4-16 仲間遺跡

4-12 テーヤ 田井等遺跡 (NHT1)

所在地：羽地地区田井等 ^{テーヤ} 田井等

時代：古く時代後期～近世

概要：親川部落と田井等部落の拝所である神の宮（^{ハノミヤ} 上の神の宮）の南東側の畑内より、少量の土器片と、青磁、染付、南蛮陶器および沖繩製の上焼と荒焼が採集される。現在、主に遺物の採集される畑（田井等 301番地）は数年前に大きく削土されているが、以前は平坦か、南～南東向きの傾斜地だったと想定される。

伝承：この神の宮の南東側は現在の田井等部落の元村だったといわれている。

所見：現状変更の甚しい田井等 301番地に比べ、西隣りの高くなったサトウキビ畑（田井等32・307番地付近）は遺構の存在も考えられる。

参考文献：津波高志「神役集団の構図」 『沖繩民俗研究』創刊号 沖繩民俗研究会 1978年12月

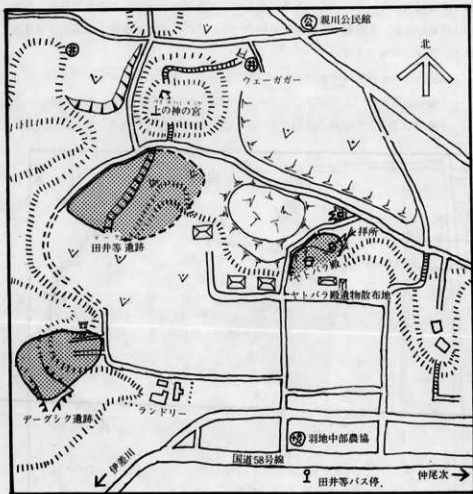


図4-17 田井等遺跡・ヤトバラ殿遺跡・デーグシク遺跡

4-13 ヤトバラ^{トウシ}殿遺跡 (NHY1)

所在地：羽地地区田井等^{チーニ} 田井等

時代：近世

概要：羽地中部農協から北側に向かって、約150m行くと、ヤトバラ^{トウシ}殿とよばれる拝殿があるが、この周囲より近世の沖縄製陶器などが採集される。また、この拝殿の奥側に小さな拝所があり、ここには小規模な貝層がみられる。この場所は田井等部落の最も後背にあたる森の斜面下にあたり、田井等^{チーニ}遺跡やデーグシク遺跡と近接している。

所見：ヤトバラ^{トウシ}殿については詳しい調査を行っていないので断定できないが、今回確認された遺物や貝層は、このヤトバラ殿の由来に関係するものではないだろうか？



写真4-16 ヤトバラ殿遺跡遠景

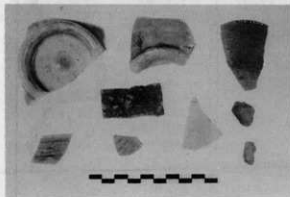


写真4-17 田井等遺跡出土の遺物



写真4-18 ヤトバラ殿遺跡の貝層

4-14 デーグシク遺跡 (NHDG)

所在地：羽地地区田井等 田井等

時代：グシク時代

概要：田井等バス停の北側は、北・東・西を標高35～45m程の丘陵によってとり囲まれる袋状の平地になっている。その西側の丘陵上および斜面、斜面下の平坦な畑地に、グシク時代の土器が散布している。この丘陵はデーグシクと呼ばれ、頂上に2ヵ所の拝所があるが、いずれも松の根元に数cmの小石を円形に配列しただけのものである。しかし、このうち南側の拝所の付近には数十cmの石が数十個集積している場所がある。この丘陵は、北東・南東・南西側の三斜面が自然崩壊により切り立っている。東側の畑地には、タマハーと呼ばれる拝泉がある。



写真4-19 デーグシク遺跡全景

所見：土器は現在のところ4片しか採集されていないが、丘陵頂上から斜面、斜面下に散布しているので、この東側に開いた小さな谷の頂上部から斜面にかけて形成された遺跡と考えられる。土器の胎土分類からすれば（胎土I、J、K）、グシク時代の後期に位置づけられそうであるが、採集した土器が少量のため断定はできない。

所見：土器は現在のところ4片しか採集されていないが、丘陵頂上から斜面、斜面下に散布しているので、この東側に開いた小さな谷の頂上部から斜面にかけて形成された遺跡と考えられる。土器の胎土分類からすれば（胎土I、J、K）、グシク時代の後期に位置づけられそうであるが、採集した土器が少量のため断定はできない。

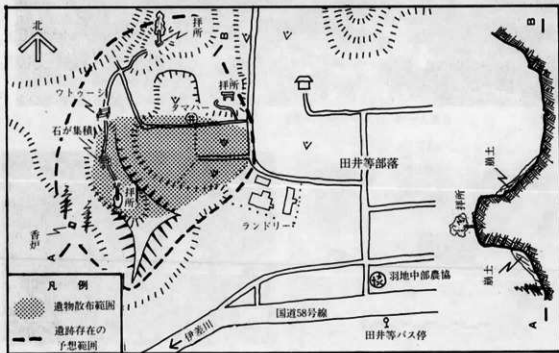


図4-18 デーグシク遺跡

4-15 フガヤ遺跡 (NHFI)

所在地：羽地地区田井等 井ガヤ

時代：グシク時代前期～後期，近世？

概要：振慶名部落の東側に仲尾へぬける道路がある。その道路を仲尾部落に向かって約250m行くと右手に幅約70m、奥行約180mの小さな谷がある。この一帯はフガヤと呼ばれているが、この谷の南側斜面下の畑からグシク土器、類須恵器、染付などが出土する(南地点)。これらの遺物は地表面や、畑の周囲に掘られた浅い溝の断面の灰黒色の粘土層中にもみられ、遺物包含層と考えられる。また表面には、沖縄製の上焼や荒焼が散布する。なお、この南地点の北東側にあたるサトウキビ畑内より類須恵器が1個採集された(北地点)。

伝承：聞くとところによると、このフガヤの谷(マタ)の低地部分は、近年まで水田として利用

されていたそうである。

所見：小さな谷の中に立地する遺跡のひとつである。グシク土器のなかでは、砂粒などを含まない、沖縄貝塚時代後期に類似する泥質のものも比較的多く、この遺跡はグシク時代の前期から始まる遺跡と考えられる。また、近世にあたる清の時代の染付が1片得られたが、いまのところ遺跡との関連は不明である。



写真4-20 フガヤ遺跡出土の遺物

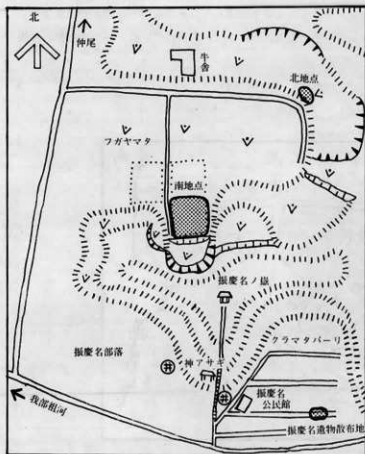


図4-19 フガヤ遺跡

4-16 ^{コクデン} 谷田遺跡 (NHK I)

所在地：羽地地区川上 ^{コクデンバ} 谷田原

時代：グシク時代後期～古琉球

概要：川上の国道沿いにあるポトヌアサギと呼ばれる小丘陵と北側の野菜畑になっている低地帯から遺物が採集される。採集された遺物は、赤瓦、^{せんこくわん} 線刻蓮弁文の青磁、14、15世紀頃の染付、白磁、砂



写真4-21 谷田遺跡全景

混入で厚手のグシク時代土器（胎土I）、^{なんばん} 南蛮陶器等である。坪所の周辺は住宅地や採土、客土等で現状改変が進んでいるため遺跡範囲を確定することは難しいが、これまでの調査によると人々は坪所の北側に居住していたと思われる。

伝承：「昔、谷田村は人口が増え、その分れが川上に移った。その後川上の方が逆に大きくなって、ついには川上と谷田は合併されて一つのムラになった」と言われている。「羽地村誌」は併合を1736年頃としている。

参考文献：羽地村誌編集委員会編 「羽地村誌」 1962年8月

津波高志「神役集団の構図」 『沖縄民俗研究』 創刊号 1978年12月

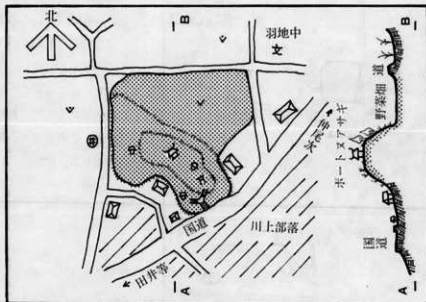


図4-20 谷田遺跡

4-17 ^{ハミ}川上遺跡 (NH1)

所在地：羽地地区川上 ^{川上}

時代：古シク時代

概要：字川上の公民館は、羽地大川沿いの小丘陵上にあるが、この西斜面下の畑から北斜面下の住宅地にかけて古シク時代の土器片が採集された。そのうち、口縁部は現在までのところ1片しか採集されていないが、やや内湾した鉢型土器である。



写真4-22 川上遺跡全景

伝承：字川上は、元々は川上と谷田という2つの部落に分かれていたようで、川上は現在の公民館のある丘が坪所の森になっていたということである。

所見：丘の下にあった公民館を現在の位置に移した時に、かなり丘陵上が削られたが、丘陵下はそれほど現状変更はなされていないので、遺構が残っている可能性がある。遺物は東側から南側にかけても分布する可能性がある。

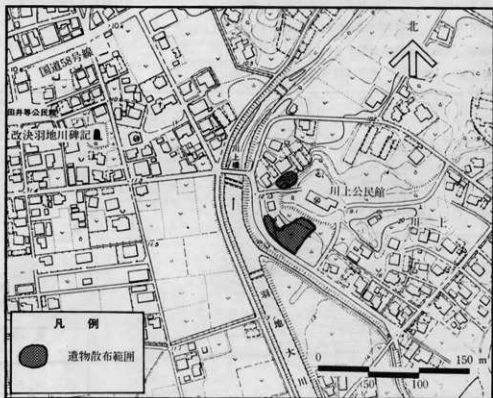


図4-21 川上遺跡

4-18 親グシク遺跡 (NHUeG)

所在地：羽地区川上 マガク

時代：グシク時代？

概要：字川上の南側山地の中腹付近、標高約100mの尾根上に立地する。この尾根は、ほぼ東西に走り、南北は各々急斜面になっている。親グシクと呼ばれる部分はほぼ平坦になっており、この北側斜面に石垣遺構と思われる石列がみられる。



写真4-23 親グシク遺跡全景

この遺跡から海への距離は、もっとも近い仲尾次海岸（羽地内海）でも、直線距離で1km以上ある。「沖縄県国頭郡志」には、「羽地城（親川グシク・筆者注）より以前の築城にして羽地を支配せし世の主の拠りし所ならんといふ。」と記されている。この親グシクは、拜所ではないが、第2次大戦までは出兵する人の船を見送る場所などとして利用されていたそうである。

所見：本グシクの石列遺構は、いわゆる石垣とは異なり、階段状に斜面を加工し、その傾斜面を補強するようにかぶせられたもののように思える。ただし、石垣が崩れて斜面をおおっている可能性もある。「沖縄県国頭郡志」によれば、本グシク付近の開墾中に青磁皿が採集されたそうであるが、それ以後遺物が発見されたという記録はない。

参考文献：島袋源一郎『沖縄県国頭郡志』1919年7月

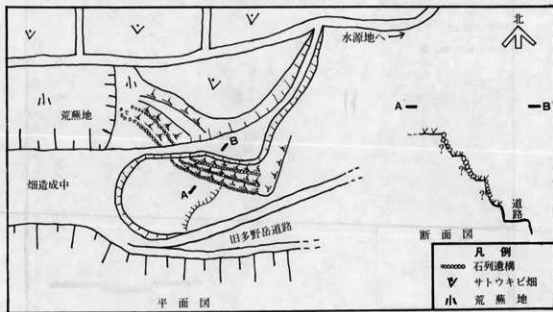


図4-22 親グシク遺跡

4-19 ^{フリキナ}振慶名遺物散布地 〈仮称〉

所在地：羽地区^{フリキナ}振慶名 振慶名

時代：グシク時代～古琉球

概要：字振慶名の公民館南側の小道上より土器片、中国製染付、沖縄製陶器等が採集される。現場は、振慶名10番地前川進氏宅の前にあたるが、ここは幅約70m、奥行約90mのクラマタバーリと呼ばれる南に開く小谷の低地の出口付近になっている。遺物の採集される付近の標高は約10mである。クラマタバーリの西側丘陵上は振慶名の嶽といわれる坪所である。坪泉がこの丘陵の先端部に2カ所ある。



写真4-24 振慶名遺物散布地

伝承：『沖縄県国頭郡志』によれば、振慶名は、1736年（元文元年）に現在の今帰仁村呉我山付近より移動してきたという。

文化財：ウップエフガーと呼ばれる坪泉の石組に、呉我山より移動した際にもってきたという長方形の石がはめられている。聞き取りによれば、この石には何かの文字が刻まれていたという人もおり、印部石（バル石）の可能性はある。

参考文献：島袋源一郎『沖縄県国頭郡志』1919年7月

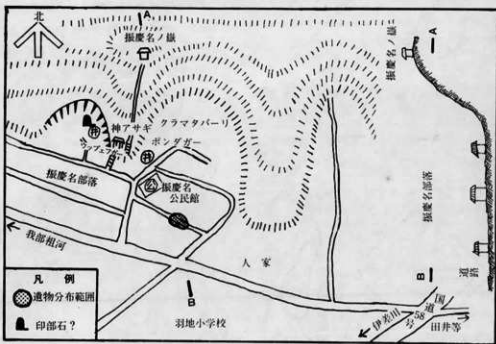
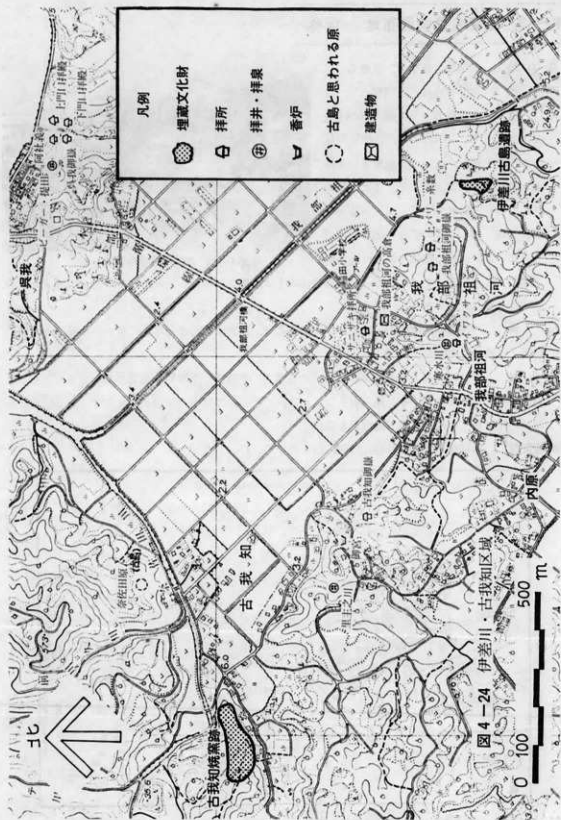


図4-23 振慶名遺物散布地



イザシヤフルシマ
4-20 伊差川古島遺跡 (NHIF)

所在地：羽地地区伊差川^{フルシマ}古島
時代：グシク時代中期～近世
概要：遺跡の場所は稲田小学校と波名喜橋のちょうど中間にある森の側にある。以前は森からなだらかな傾斜面をなしていたようだが、近年平坦に削られ赤土の地膚を見せている。包含層は残っていない。現在キビ畑に利用されている。



写真4-25 伊差川古島遺跡全景

採集した遺物は、グシク土器、類須恵器、沖繩製陶器等である。土器は砂粒混入（胎土I）と粘板岩粒混入（胎土H）に大別できる。土器と類須恵器は無文胴部のみである。

所見：遺跡の北東側は広大な低地をなし近くに我部祖河川もあることから稲作水利には便利な所であったと思われる。遺跡の南の又々には近世期の沖縄製陶器が出る個所が三つ確認されているので人口増加にともなう南の方に拡がっていったと考えられる。波名喜橋の北側に十数軒の「屋取」の民家がある。その中の丘陵にフルシマウガンとアサギントウという地名が残っているが、伊差川部落のものと坪所の跡で以前伊差川の人達はここに住んでいたという伝承がある。

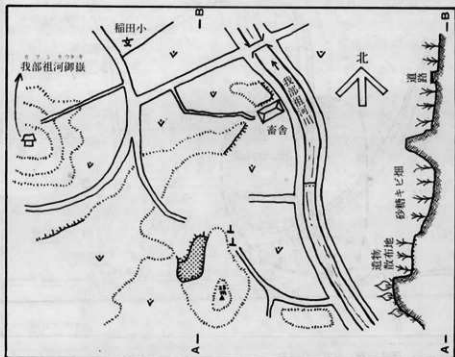


図4-25 伊差川古島遺跡

4-21 古我知焼窯跡 (KHKKa)

所在地：羽地地区古我知 ウラマツノ 奥又原

時代：近世(?)

概要：字我部祖河の羽地農協河知支

所前より我部祖河公民館へ行く道からはい
る。同公民館から西に折れ古我知公民
館を、さらに約 500 m 程すすむと小さ
な十字路があるがこの道むかひの標高20
~30mの丘陵上が古我知焼の古窯跡であ
る。この丘陵の北西側に向かってU字形



写真4-26 古我知焼窯跡全景

に開いた小さな谷と周囲の斜面部に陶器の破片が散布している。これまで数人の研究者によって、
碗、皿、水甕みづがら（ハンドゥガミ）、耳付壺みみづぼ（ミミチブ）、搗鉢うしひら、扇子甕せんすいやその他さまざまな種類の
陶片が報告されているが、そのうちでも緑色や灰緑色の釉薬をかけた碗が多く、これは湧田なるや初期
壺屋かづらの技法にも通じるという。また、水甕などに釉薬をかけてから布やワラでふく手法（布ぶき、
ワラぶき）がみられるが、これは古我知焼独特の手法といわれている。

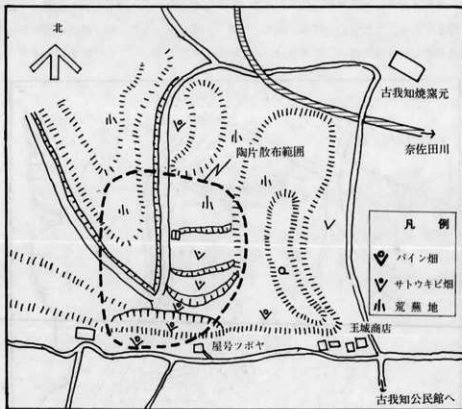


図4-26 古我知焼窯跡

指定地：本窯跡は、1972年（昭和47年）5月12日県指定の文化財（史跡）に指定された。指定地はつぎの通りである。名護市字古我知479番地、499番地、500番地、501-2番地、503番地。

所見：県指定史跡にもかかわらず、個人による陶片の採集が後をたたない。以前にくらべ陶片が少なくなった今日、土地買上げと、正式な発掘調査を念頭においた保存整備計画を県および市はたてる必要がある。

参考文献：大城精徳・宮城篤正『古我知焼』琉球の古陶（1） 琉球文化社 1972年10月
やらむん会編 『図録 沖縄の古窯』 1979年



写真4-27
古我知焼窯跡出土の陶片



写真4-28
古我知焼窯跡出土の碗

第5章
屋部地区の遺跡

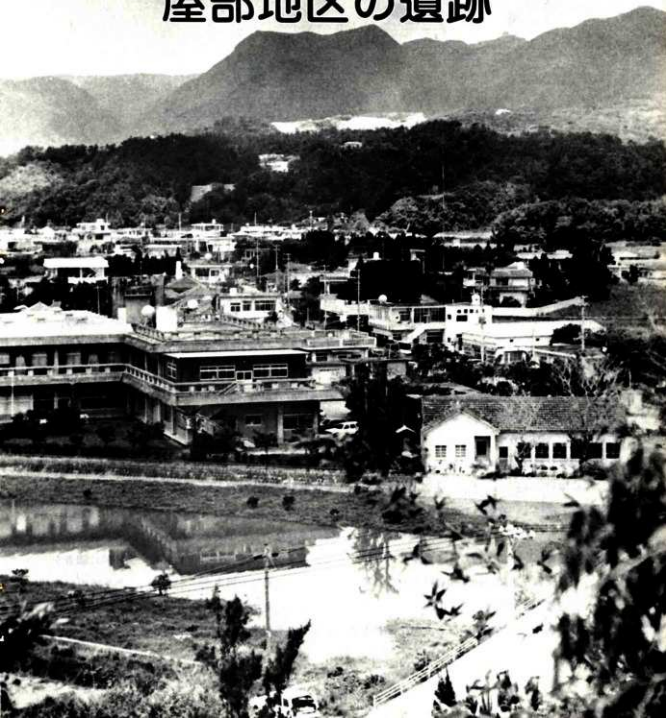




図5-1 屋部地区の遺跡分布

屋部地区の概要

屋部地区では今までに沖縄貝塚時代後期3、グシク時代2、古琉球時代1、の計6ヵ所の遺跡が確認されている。貝塚時代後期以前の古い遺跡はまだ未発見である。貝塚時代後期（約2000年～800年前）の遺跡のうち、安和貝塚と屋部貝塚は現部落のある砂丘地と重複して立地している。安和貝塚は市内でも最大の遺跡と思われ、広範囲に遺物が広がっている。当時としては大規模な村落を形成していたと予想される。安和貝塚の中からグシク時代（約800年～500年前）の土器も見つかることから、貝塚時代から人々はずっと住み続けたとも考えられる。東兼久原貝塚は遺物の器形や胎土から見て、貝塚時代からグシク時代に移行する過渡期の遺跡と考えられる。宇茂佐古島は宇茂佐と屋部の両部落の古村と信じられている。古島から屋部河口古瓦出土地と同じと思われる高麗系瓦が出ていることから、屋部川河口は古島の港だったであろう。部間権現の洞穴より明代の青磁碗が採集された。残存部が大きい青磁だが、古琉球時代（約500年～350年前）と思われる。

安和貝塚と屋部貝塚の範囲内にある新築予定地の屋敷内を、地主の協力を得て試掘調査した。屋部地区には貝塚時代後期と現部落が重なる所が多く、住宅建設や道路建設によって遺跡が壊される危険も増してきた。遺跡は一度壊されると絶対に元へ戻らないのである。私たちの祖先が数千年もの長い間残した文化遺産を一朝にして闇から闇へ葬るようなことは許されないことである。私たちは遺跡と現在の生活との共存をはかるよう努めることがまず大切である。万が一やむを得ないとしても、徹底的に調査を行い、その成果を子孫に伝える義務がある。屋部・宇茂佐の両部落の祖先が住んでいた、また坪所がある宇茂佐古島も土地改良の範囲に入っているが、祖先の歴史、生活を明らかにするためにも保存して行かねばならない。部間権現のまわりは、採石事業によって自然環境が破壊され荒廃している。

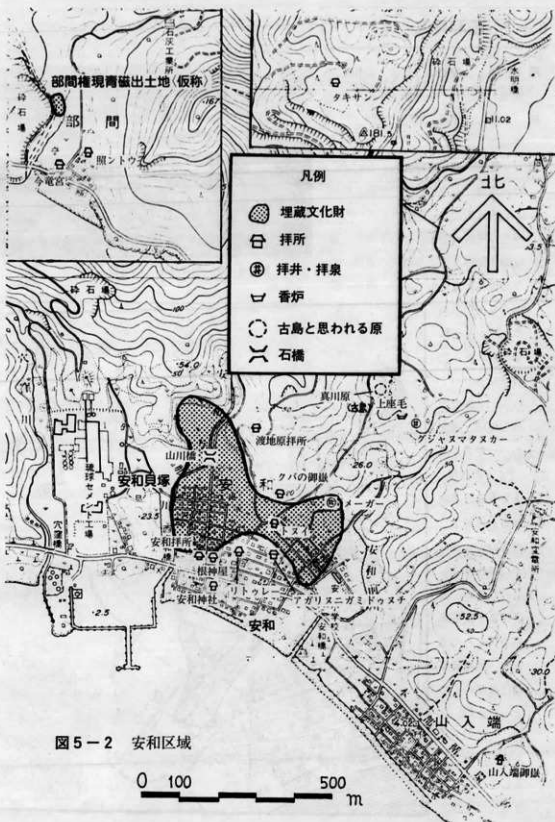


図5-2 安和区域

5-1 安和貝塚 (NYbAK)

所在地：屋部地区安和 安和・渡
地原・佐江原・山川原・与那川原

時代：沖縄貝塚時代後期、グシク時代

概要：安和貝塚はちょうど「くばの御嶽」を中心にして東西に標高3.5~4mの高さに形成されている。現在は宅地や畑地になっており、貝塚時代後期とグシク時代の遺跡、そして現代と重複している。遺跡の範囲が与那川の向こう岸から安和小学校に至る地域にひろがっている。名護市内の大規模な遺跡の一つである。

「くばの御嶽」より東側は遺物散布が希薄で、西側の方に多いが、時代差は感じられない。表面採集や試掘調査で得られた遺物は、沖縄貝塚時代後期のものとして土器、貝、石器があり、それ以後のものとしては、グシク時代の土器、



写真5-2 安和貝塚全景(北側より)



図5-3 安和貝塚

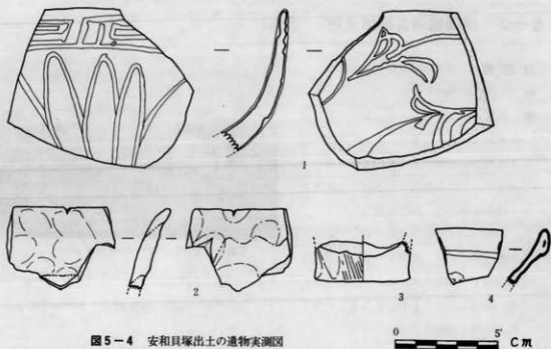


図5-4 安和貝塚出土の遺物実測図

1 青磁(採集) 2 後期土器口縁部(試掘) 3 後期土器底部(採集) 4 白磁(試掘)

青磁、白磁、染付、沖縄製陶器等がある。後期土器の特徴は、全体的に薄手で堅く、ほとんど無文である。口縁部は直口かわずかに外反した夔びやく、底部は少しくびれを残す平底である。時期的には貝塚時代の後半と推定される。グシク時代の遺物は、貝塚時代の遺物にくらべて少ない。グシク時代の土器は粘板岩破片を混入(胎土H)している。青磁には表面が雷文帯+蓮弁文、内面が副花文の文様が画かれている14~15世紀の碗がある。白磁は、口唇部が玉縁状に肥厚した灰白色の碗が試掘で出ているが、13~14世紀頃と思われる(図5-4)。グシク時代は中期~後期の時期である。



写真5-3 試掘調査した畑(安和60番地)

試掘調査：1980年10月、安和60番地の長山氏宅建築にともなう試掘調査を実施した。約70cmまで黒い砂層であったが、下の方から銅線が出るなど、擾乱されていることがわかった。

5-2 ^{ブーマ}部間権現青磁出土地 〈仮称〉

所在地：屋部地区安和 ^{ブーマ}西部間

時代：古琉球？

概要：字安和の小字、部間にある部間権現は、安和・部間、そして本部町崎本部の3ヵ部落によって拝まれる拝所であるが、この洞窟内より中国製の青磁が1個採集された（写真参照）。

口縁部は3分の2程が欠損しているが、全形はほぼ完全に推測しうる。底部から

口縁部までの高さ6.1cm、口縁直径9.2cmである。外面には線刻蓮弁文が施してあり、内面の底には、印花文らしきものがあるが、明瞭ではない。この青磁は、15～16世紀頃の中国明時代につくられたものと考えられる。

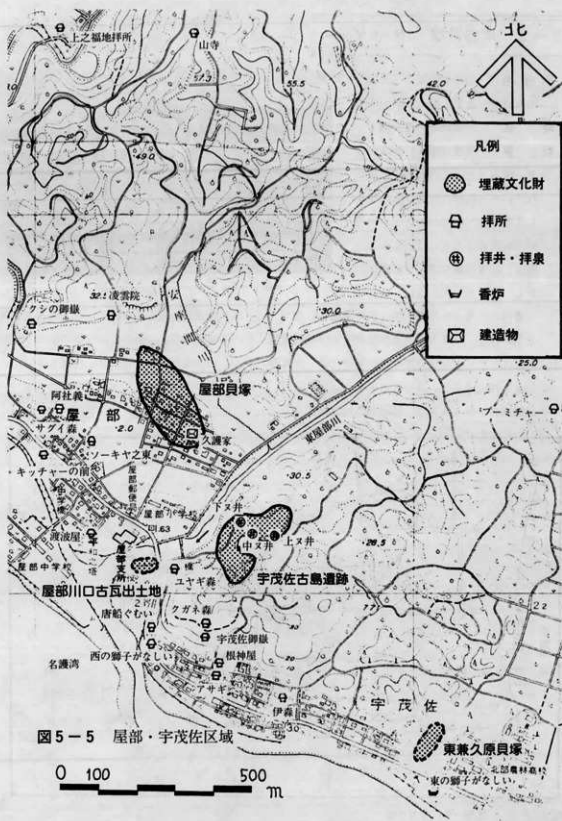
所見：この青磁以外の遺物や遺構は発見されていないので、この遺物の意味づけは難しい。今後、詳しい調査を行わなければならない。



写真5-4 部間権現全景(南側より)



写真5-5 部間権現出土の青磁



5-3 屋部貝塚 (NYbyK)

所在地：屋部地区屋部 久護・加真良原・後兼久原・安座登間原

時代：沖縄貝塚時代後期

概要：屋部貝塚は、部落の後方、標高2～3mの低地に形成されている。遺跡の範囲は久護家から北西方向へ約300mに及ぶ楕円形の範囲と予想される。正確な範囲は、住宅地域や客土された畑が多く、はっきり把めない。



写真5-6 屋部貝塚全景(北側より)

遺物の採集される場所の土壌が黒褐色砂層で、ボーリング調査の結果から、この層が遺物包含層と思われる。採集された遺物は沖縄貝塚時代後期土器、沖縄製陶器、近世期の陶磁器である。後期土器はほとんど小破片で無文、胎土に砂・黒雲母を混入、口縁部が直口かわずかに外反する。

なお1980年7月、県指定有形文化財(建造物)久護家の岸本氏宅の屋敷内新築工事にともない、試掘調査を行なったが、遺物包含層は確認されなかった。

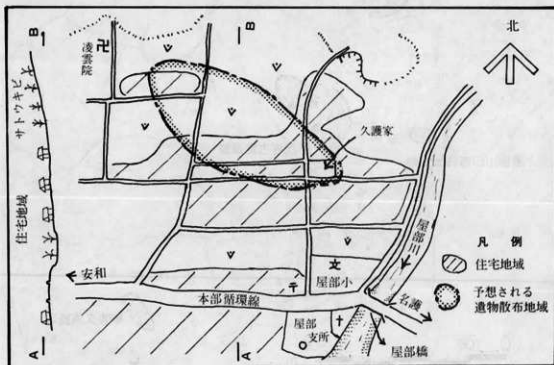


図5-6 屋部貝塚

5-4 東兼久原貝塚 (NYbAgK)

所在地： 屋部地区宇茂佐 東兼久原

時代： 沖縄貝塚時代後期?～グシク時代前期

概要： 本貝塚は北部農林高校の西、宇茂佐 202 番地にある。現在は野菜畑に利用されている。そこはすぐ北側がウンサ森と呼ばれる丘陵になっていて北風がさえぎられると



写真 5-7 東兼久原貝塚全景

もに、遠浅の名護湾の近くにあり、漁撈にたよっていた当時、居住に適した場所であった。

採集された遺物は、土器、貝類、沖縄製陶器等である。貝塚後期土器と思われるなかにこの時期にはめずらしい壺形口縁の破片が入っている。グシク時代の土器と思われるものは、暗褐色軟胎土あんせつしよくなたいで厚手、無混入のいわゆる胎土K土器である。

遺物が散布する土壌は黒色混砂土層である。遺跡付近は客土されたキビ畑や住宅地になっていて調査が困難であった。黒色混砂土層の広がりから、図 5-7 に示したような遺跡範囲が予想される。

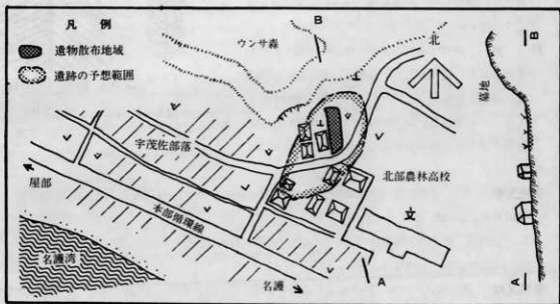


図 5-7 東兼久原貝塚

5-5 屋部川口古瓦出土地

所在地：屋部地区宇茂佐 ウラモサゴ 西兼久原

時代：グシク時代？

概要：本出土地が初めて明らかにされたのは多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」においてである¹⁾。同論文の阿波根城趾遺跡の項で、中村九郎氏が宇茂佐の屋部川内から高麗瓦を採集した、とされている。その後、1960年9月に大川清氏が現地調査を行っている。

大川氏の調査結果から古瓦出土地の場所を推察すると、図5-9に示された所と推定される。現在上流から赤土が流れてきてヘドロとともに相当堆積し、当時の状況とは一変している。大川氏は、ここで採集された灰色瓦が高麗系古瓦で、男瓦が浦添城跡1類、女瓦が同城跡4類・5類であると言う。男瓦1類と女瓦4類は図5-8に示された文様で、女瓦5類は裏面に羽状押型文がついた「有段式女瓦」である²⁾。

高麗系古瓦は「癸酉年高麗瓦匠造」銘瓦を模して作ったものとされている。「高麗」銘瓦の製作された年代や場所については、伊波普猷をはじめ多くの歴史・考古学者によって論議されている。製作地は考古学的調査から、沖縄現地で焼かれた可能性が強くなっている。

所見：屋部川河口の近くに宇茂佐古島があり、そこから「高麗系瓦」が採集されている。「屋部港の津口を唐船曲りと呼び十五六反帆の唐船を繫留することができた³⁾」ことから、13、14世紀の昔も屋部港は宇茂佐古島の良港として利用されていたようだ。

引用文献：1) 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」琉球政府文化財保護委員会『文化財要覧』1956年

2) 大川清「琉球古瓦調査抄報」同『文化財要覧』1962年

3) 比嘉宇太郎「名護町六百年史」1958年10月、P.50

参考文献：関口広次「沖縄に於ける造瓦技術の変遷とその間の事情」『考古学雑誌』62巻3号、1976年

三島格「琉球の高麗瓦など」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』1980年10月



図5-8 川口から採集された古瓦の文様

1 浦添城女瓦第4類 2 同男瓦第1類 右より転載

5-6 ウムサ 宇茂佐古島遺跡 (NYbUF)

所在地：屋部地区宇茂佐 古島原
ウムサ
ウムサ
 ・西兼久原

時代：グシク時代後期～近世

概要：宇茂佐古島は、屋部川の東岸、屋部橋から東へ約300m離れた二つの又にある。ちょうどそこは、屋部小学校の対岸に当たっている。北、東、南の三方が丘陵に囲まれ、冬の北風や暴風から身を守るのに最適な土地である。現在はキビ畑や野菜畑に利用されている。



写真5-8 宇茂佐古島遺跡全景

古島は北の又と南の又に分かれる。北の又は割合大きな平地になっていて、略図に示されているように三つの井弁がある。ここから土器、青磁、染付、南蛮陶器、高麗系瓦、沖縄製陶器が採集された。いわゆる「高麗系」瓦は、小破片のため明確な分類ができないが、灰色の平瓦で羽状押型文（松葉状）であることから、図5-8に示された女瓦に似ているため屋部川口古瓦出土地と大きな関連を持つと思われる。南側の又からは近世期の陶磁器しか出ないので、時代は新しい。人口増加にともなって南側に広がったと思われる。

伝承：屋部部落の人たちは、宇茂佐古島の所を屋部古島と呼ぶ。つまり古島は両村の祖先が住んでいた場所であった。実際、屋部の人たちも古島の井を拝んでいる。むしろ屋部の方へ多くの人々が移って行ったとも言う。

所見：土器が数個しか採集されていないことから、人々はグシク時代終末期に住んでいたようだ。中国製陶磁器が多いので、屋部川河口の良港を利用して海外貿易をきかんに行なった、と思われる。

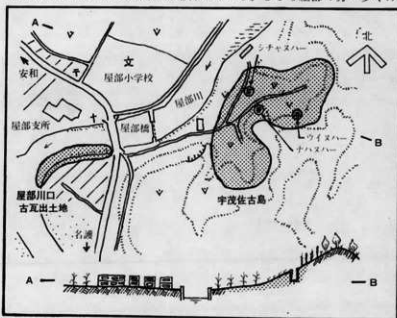


図5-9 屋部川口古瓦出土地・宇茂佐古島

第6章

名護地区の遺跡





名護地区の概要

名護(旧名護町)の始まりは、名護城(ナングシク)から、というのが、一般的に言われている名護の歴史である。はたしてそうなのか、もっと以前からではないか、という疑問が名護地区の調査結果から感じられる。名護地区で、これまで確認された遺跡は16ヵ所あるが、このうちナングシク遺跡群(約700年～100年前)よりも古い時代の遺跡が、名護市街地や許田、喜瀬などに6ヵ所も確認されているからである。

これまでの調査で言えることは、市街地の沖縄貝塚時代後期(約2000年～800年前)の遺跡は、海岸近くの砂丘(カニクチー)上に立地している。次のグシク時代(約800年～500年前)の前半ないし中頃にはナングシクの丘陵上に住むようになり、その後、大堂原オウボノハラや柳原のほうにも分散していったと考えられる。そして、それから、現在の市街地や宮里などの海岸近くに移動したと思われる。

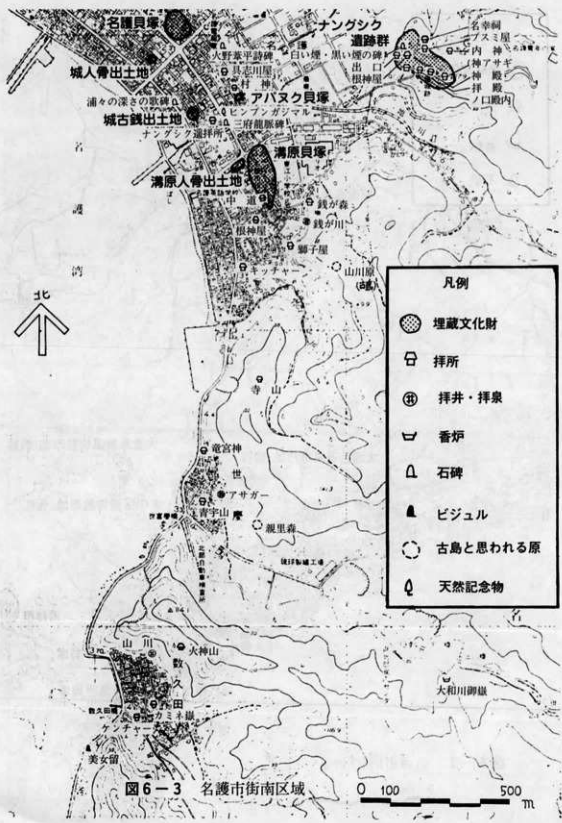
世富慶や数久田、そして許田、幸喜、喜瀬などの各部落は古い部落であり、遺跡の存在が予想されるにもかかわらず、これまで確認された遺跡は市街地に比較して少ない。今後、さらに詳しい調査が必要である。

名護では、ナングシクを中心にした歴史が言い伝えられてきた。今後、この歴史をさらに深めるためにも、名護地区内の遺跡を保存し調査していく必要がある。



図 6-2 名護市街北区域

0 100 500 m



凡例	
	埋蔵文化財
	拝所
	拝井・拝泉
	香炉
	石碑
	ビジュアル
	古島と思われる原
	天然記念物

図 6-3 名護市街南区域

0 100 500 m

6-1 宮里古島遺跡 (NNMF)

所在地：名護地区^{セイマツ}為又^{ウアマツ}大又原
 時代：古琉球?～近世
 概要：字名護^{ナマノ}の柳原^{ヤナギハラ}の西側に古湊

御嶽とよばれる拝所と、3ヵ所の拝泉があるが、宮里の人々はこの一帯を宮里の古島と言っている。古湊御嶽は南向きだが、背後は小丘陵によってまもられており、この丘陵上部や斜面から中国製の青磁や沖縄製陶器が採集された。ここは、東屋部川の中流にあ



写真6-2 宮里古島遺跡全景

たり、南側は低地が広がり、北側は標高20～30mの丘陵地帯になっている。この丘陵地帯では数年前までパイン栽培が盛んで、この宮里古島も例外ではなく、更新によって地表面は、すでに数m失われていた。パイン栽培が行なわれない最近でも、採土が行なわれており、赤土がむき出している。

所見：採集された青磁は線刻蓮弁文が施されたもので15～16世紀の遺物である。ナングシク(名護城)を最初に降りた人々の一部がこの宮里古島に住んだと言われている。興味深い。

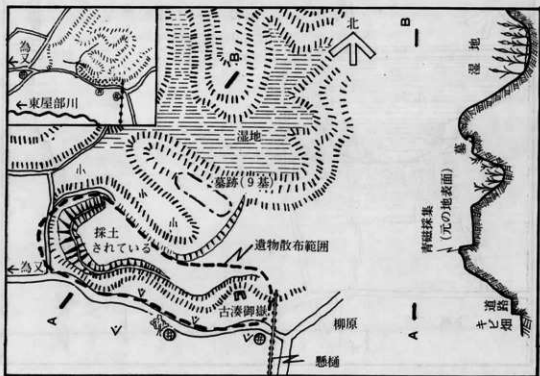


図6-4 宮里古島遺跡

6-2 大西区遺物散布地〈仮称〉

所在地：名護地区名護 ^{ナカグー} 暗川原
(大西区)

時代：不明

概要：名護小学校の北側、大西区の通称「遊び場」と呼ばれる広場から土器が数片採集された。ここは名護市街地の北側背後の丘陵上にあたり、標高は約8mである。その北側は湿地帯に面している。地盤はいわゆる赤土で、畑の耕作土をのぞく



写真6-3 大西区遺物散布地全景(北より)

と、その他の土層はみあたらない。北東側約150mには^{オウゴン}大堂原西遺跡がある。

所見：現在まで採集された遺物では時代の判定が難しいが、土器の胎土から推定すれば、沖縄貝塚時代後期の可能性がある。

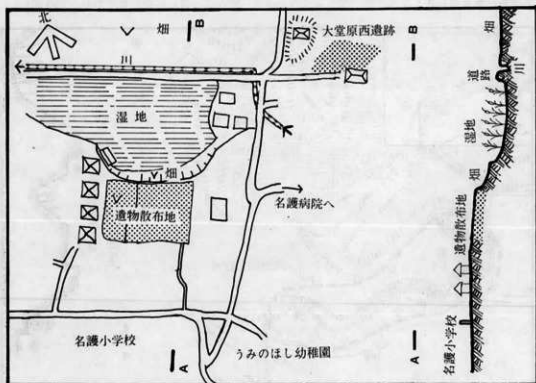


図6-5 大西区遺物散布地

ボードーバルニシ
6-3 大堂原西遺跡 (NNPW1)

所在地：名護地区大中区 大堂原

時代：グシク時代後期～近世

概要：名護小学校からほぼ北東へ200m行くと、元豚舎の前に野菜やイモを植えてある畑に来る。この一帯から、グシク時代土器、青磁、染付、沖縄製陶器、赤瓦、貝類、獣骨等が採集された。土器は少量で全て胴部であり、一応胎土から微砂粒混入(胎土I)と無混入(胎土K)に分けられる。



写真6-4 大堂原西遺跡全景

本遺跡は標高10mで、北側が大堂原線道路の通る丘陵になっている。周辺は一段低く、湿地帯である。付近に住む人の話から、現在家が建っている所は低く客土したことや、戦前は一帯が水田であったが、遺跡の所は畑地であったことがわかった。遺跡の部分は、昔から微高地になっていたと思われる。本遺跡も他の遺跡と共通して、丘陵の南側低地に立地し、周辺で稲作農耕をしながら生活を営んでいたようだ。

所見：伝承によると、^{ゴーゴニク}大兼久は大堂原から移って来た、という。これが事実であれば、大兼久の古島はこの遺跡の可能性が強い。遺跡の周辺は、略図でもわかる通り、都市化が進み、また都市計画事業の街路計画の範囲にも入っている。名護の歴史を明らかにするためにも貴重な遺跡であり開発計画との十分な調整が必要である。

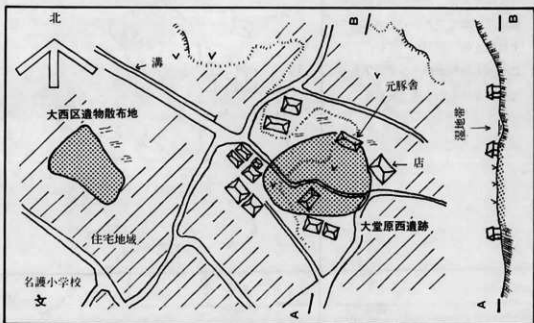


図6-6 大堂原西遺跡

6-4 大堂原東遺物散布地 〈仮称〉

所在地：名護地区大中区 大堂原
時代：沖縄貝塚時代後期?～近世
概要：本遺物散布地は大堂原線の沖縄県林業試験場の入口付近で、プレハブ置き場に隣接する平坦部と、その斜面に立地する。平坦部は今スキや雑草がはえる荒蕪地であるが、ヒヤリングによれば、元は森であったが後に敷きならしてサトウキビ畑にされたと言う。表面はかなり削り取られて茶褐色を呈している。包含層は確認されていない。

採集した遺物は、土器、青磁、染付、沖縄製陶器、赤瓦、貝類などである。土器は無文胴部で数が少ない。胎土に微砂粒、石英、黒雲母を混入しているものと泥胎土のものがある。土器は貝塚時代後期的だが確定できない。斜面部の方は段々畑に利用されていて、そこから遺物が拾えるが、上から流れ落ちたものと考えられる。



写真6-5 大堂原東遺物散布地全景

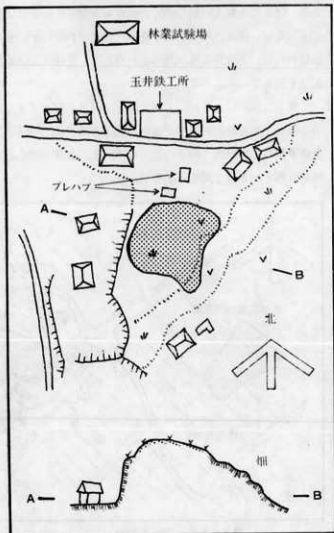


図6-7

大堂原東遺物散布地

6-5 大中区土器出土地 〈仮称〉

所在地：名護地区大中区 大堂原

時代：不明

概要：大中区土器出土地は、ちようど沖縄県立名護病院裏 100m の所にある。ここは大堂原線が通る丘陵と名護病院のある台地との中間に当り、盆地状の凹地になっている。この付近は、最近都市計画事業による街路と側溝が一部でき上っている。



写真6-6 大中区土器出土地全景

そして北側の方も、以前ならかなな傾斜をなしていたが、宅地化が進み、ほとんど平坦に整地されている。本出土地は野菜畑に利用されており、淡褐色土壌で元地表面を削ったか、客土されたものである。

採集遺物は土器、沖縄製陶器、赤瓦、貝類、獣骨である。採集された土器是一片のみで、時代決定は困難である。胎土が無混入、暗褐色軟胎土でグク時代前期の可能性もあるが、大堂原東遺物散布地に以たものが一片ありはっきりしない。

なお、1982年3月に発刊した『名護市の遺跡(1)』で、本出土地を「大北区遺物散布地」(仮称)としたが誤りであり、上記の名称に変更した。

所見：本出土地のすぐ北側に新築の家屋があり、その家を建てる際、かなり整地している。土器は、その整地過程で流れ落ちたと思われる。本出土地から北東へ170m離れた所に大堂原東遺物散布地があるが、同一の遺跡に含めるのは難しい。

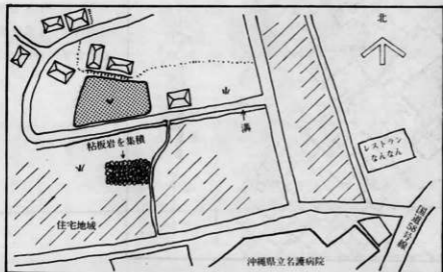


図6-8

大中区土器出土地

6-6 名護貝塚 (NNNK)

所在地：名護地区名護 （市立大久原）

時代：沖縄貝塚時代後期

概要：名護大兼久（現市街地）

の教育会館一帯が名護貝塚である（下図参照）。この貝塚の存在は早くから知られ、完全に破壊されたといわれていた。しかし名護貝塚のひろがりはさらに広く、今でも土器などが採集されることが、今回の調査で明らかになった。

ここは南西側の名護大通り（県道116号線）あたりからやや盛りあがった標高約3mの砂丘地で、これまで沖縄貝塚時代後期の土器と石器、また食糧にされたと思われる貝殻等が採集された。この遺跡の南西側約300mが埋立前の海岸線であり、この砂丘は2列目にあたる。また北東側はこの砂丘背後の湿地にあたり、戦前は水田として利用されていた。その北東側には、標高約30mの護佐喜宮の丘があり、これを東端とする丘陵が北西-南東方向につらなっている。

所見：名護貝塚の土器は、竹のようなヘラでつけた刺突文や、底の部分がくびれたくびれ平底の形を特徴とし、沖縄貝塚時代後期の後半（約1000年前）頃の遺跡と考えられる。この貝塚は、住

宅密集地に位置するため、新築・改築工事の際に保存の問題が生じている。今後とも、関係地主とのきまこまかな事前調整が重要である。



写真6-7 名護貝塚出土の遺物

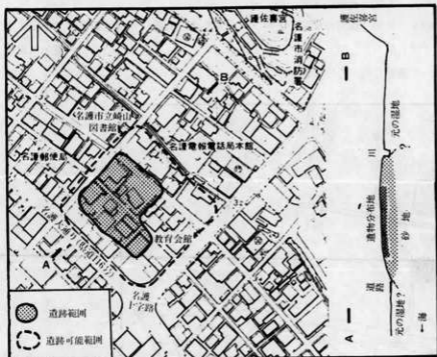


図6-9 名護貝塚

6-7 アバヌク貝塚 (NNAK)

所在地：名護地区名護 大暮久原
(大東区)

時代：沖縄貝塚時代後期

概要：ヒンプンガジマルの北側約80mにある個人の宅地内から、沖縄貝塚時代後期の土器片が採集された。ここは埋立前の海岸線より約300m内陸に位置する。南東側にはアバヌクガールと呼ばれる幸地川が流れ、北西側



写真6-8 アバヌク貝塚近景(南側より)

にはこの川の支流が遺跡に接して流れている。なお、中国製青磁もこの遺跡より一片採集された。

聞きとり：この遺跡の付近は、戦後米軍によって採砂されたということであるが、現在遺物の採集される宅地(名護302番地)は昔の状態をとどめているという。

所見：本遺跡の遺物分布範囲は、現在までの調査では狭いが、南西側から北西側にかけて砂地が分布するので、この砂地上に遺跡の範囲が広がる可能性がある。

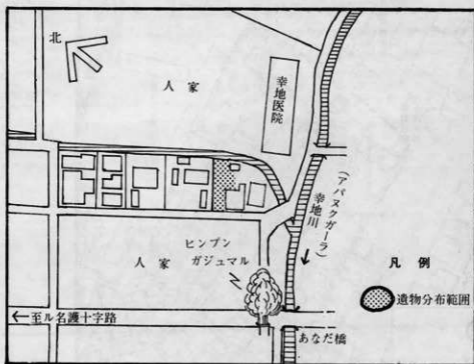


図6-10 アバヌク貝塚

6-8 ^{ミズハル} 溝原貝塚 (NNMK)

所在地：名護地区名護東江 ^{ミズハル} 溝原

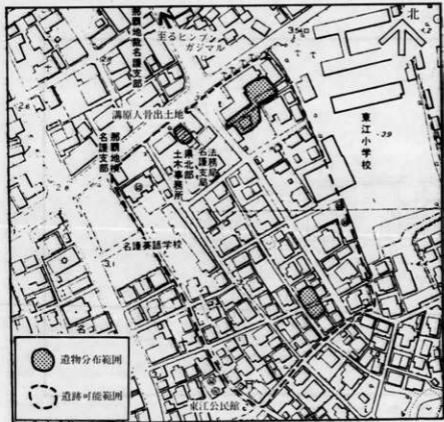
時代：沖縄貝塚時代後期

概要：東江のなご博物館準備室（名護間切番所跡、旧名護市役所）から東江公民館付近にかけて、沖縄貝塚時代後期の土器や貝殻等が散布している。このあたりは標高約3mの砂地で、埋立前の海岸線より約300m内陸に位置しており、南西側から北東側にかけては名護岳^{ナグエ}の裾野にあたる標高約100mの丘陵地帯になっている。なお、なご博物館準備室の発足にあたり、その敷地内の本遺跡部分（名護291番地）の試掘調査を行った。



写真6-9 溝原貝塚試掘状況(名護291番地)

所見：現在まで得られた土器の底部はすべて^{せんてい}実底であり、これから本遺跡は沖縄貝塚時代後期のなかでも前半（約2000年～1500年前）の遺跡と考えられる。なご博物館準備室敷地の試掘調査では、未擾乱^{みせうらん}の遺物包含層は確認されなかった。この土地は名護間切番所時代から旧名護市役所の時



代まで数百年にわたって利用されてきており、擾乱が進行している。しかし、未擾乱の部分も期待され、周辺の住宅地ともあわせて、現状変更の際は十分な注意が必要である。

図6-11 溝原貝塚

6-9 ^{ミズバウル} 溝原人骨出土地

所在地：名護地区名護 溝原（東江）
時代：不明
概要：東江の県北部土木事務所の新築工事中に確認されているが、市や県等の文化財保護関係機関への通知がなかったために、詳細は不明である。
聞き取り：この人骨の発見当時に現場立会いをした名護警察署の係官によれば、出土した深さは約1m 50cmで、人骨は工事のために頭部と胸部の一部分しか残っていなかったそうである。また、かなり風化が進んでおり、非常に古い骨のように思われたという。

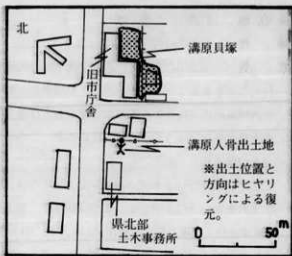


図6-12 溝原人骨出土地

所見：本人骨出土地は、沖縄縄文時代後期の溝原貝塚（前頁参照）に隣接しているため、この貝塚との関連を十分に考慮する必要がある。

6-10 城人骨出土地

所在地：名護地区名護 ^{スタフ} 城
時代：不明
概要：個人住宅の建設中に発見された。出土状況など、詳細は不明である。人骨は、現地表のアスファルト道路から深さ75cmの地点より出土した。この建設現場は砂地で、近世～近代の沖縄製陶器や赤瓦が採集された。
所見：本人骨は、出土地点の断面状況から、埋葬されたものと考えられる。

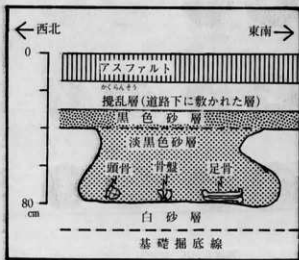


図6-13 城人骨出土地の出土状況

6-11 ^{グスク}城古銭出土地 〈仮称〉

所在地：名護地区名護 ^{グスク}城

時代：グスク時代(?)

概要：幸地川の河口付近より、数十個の古銭が出土している。この発見は約10年前の事で、当時のことを覚えている人が少なく、不明な点が多かったが、幸いにして、当時工事の請負いをされた大城嘉助氏が出土した古銭の一部である14個を保管されていた。これを沖縄考古学会の嵩元政秀氏が鑑定され、ようやく一部ではあるが、この古銭の具体的な内容が判明した。次のページは、嵩元氏の鑑定結果である。

なお、大城氏によれば、古銭が出土したのは、城の大西医院の裏側の道で、排水路工事中に掘り出されたということである。ここは砂地で、出土した深さは50cm～1m位と言う。

本出土地は、埋立前の幸地川河口より約200m奥にはいった砂丘上にあたり、昔、港に利用されていたというこの河口と近接している。港との関連性があるのかも知れないが、嵩元氏が指摘されているように、出土した古銭全部の鑄造年代がわからないと、埋まった年代さえも正確に推定できない。今後、追跡調査を行い、本出土地の性格を明らかにしていく必要がある。

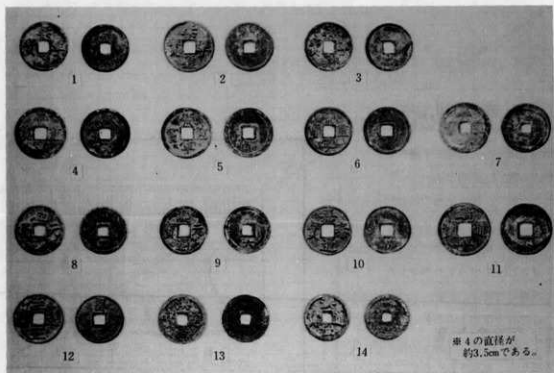


写真6-10 城古銭出土地の中国銭(大城嘉助氏蔵)

鑑定と所見（嵩元政秀氏による）

1 鑑 定

表6-1 古銭鑑定一覧表

写真 No	古 銭 銘	鑄 造 王 朝	鑄造年（中国暦） 西暦	備 考
1 3	すうねいつうほう 崇寧通宝（當十）	北宋	崇寧元年（1102）	
4 7	すうねいじゅうほう 崇寧重宝（當十）	北宋	崇寧3年（1104）	
8	けいげん 慶元通宝（當三）	南宋	慶元4年（1198）	銭の裏に四の文字がある。 四は慶元4年の4の意。
9	慶元通宝（當三）	南宋	慶元6年（1200）	銭の裏に六の文字がある。 六は慶元6年の6の意。
10	かたい 嘉泰通宝（當三）	南宋	嘉泰元年（1201）	
11	たんへい 端平通宝（當三）	南宋	端平元年（1234）	
12	しせい 至正通宝（當三）	元	至正10年（1351）	裏の文字は蒙古文字。
13 14	こうぶ 洪武通宝（當三）	明	洪武元年（1368）	裏の文字は三銭とある。

※當十＝十文銭のこと

※當三＝三文銭のこと

2 所 見

- 14個で最古のものは崇寧通宝（西暦1102年）、最新は明の洪武通宝（1368年）。
- 14個とも大変保存状態が良好。
- 沖縄各地から出土した銭貨は一般的に一文銭（本土地の14個よりひとまわり小さい）が多いが、この14個はすべて三文以上であるのが特徴。
- 白砂に埋まったのはいつか？ この14個のみでは判断は出来ない。（外に一緒に出土した銭貨も鑑なければならぬ。）

しいて、この14個のみで判断するとすれば、白砂に埋まったのは1368年（洪武通宝の鑄造年）以降の可能性が高い。

6-12 ナングシク遺跡群 (NNNG)

所在地：名護地区名護^{ナグサ} 城原・以上原^{イシノ}

時代：グシク時代中期～近世

概要：名護市街地の東側背後にある丘陵がナングシク（名護城）である。ここは、北・東・南の三方が急傾斜をなす標高103.5 m の山で、頂上から中腹付近までグシク土器や類須恵器、中国製の青磁や染付、沖縄製陶器などが採集される。遺物の分布する範囲は図のA、B、C、Dの4地点に細分される。



写真6-11 ナングシク遺跡群全景

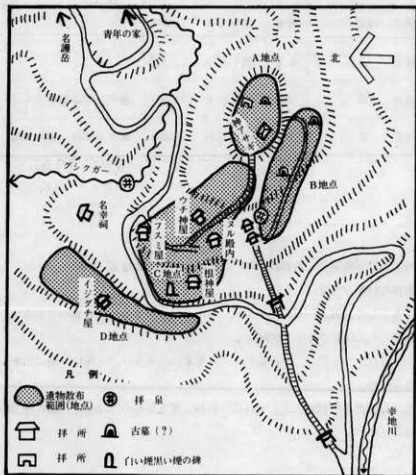


図6-14 ナングシク遺跡群

A 地点： 神アサギのある頂上平坦部分。標高は103.5 mでナングシクでもっとも高所になる。ここからは、前面に広がる護国市街地はもちろん、残波岬・喜瀬・幸喜・湖辺底・屋部・安波・部間などを一望のもとに見わたせ、このグシクが要地に位置することを思わせる。

他の地点に比較して数は少ないが、グシク土器、中国製の青磁、染付などや、くぼみ石と呼ばれる石器が採集された。これらの遺物に14世紀前後のものが多く、A地点に人の営みが始まったのは、いまのところこの時期頃に想定される。



写真6-12 ナングシク遺跡群A地点



写真6-13 A地点出土の遺物

B 地点： A地点の南側斜面をB地点とした。ここには東側の拝殿から頂上のA地点へ通じる小道と、その道沿いに押まれている古墓らしきものが2ヵ所ある。このB地点は、本遺跡中もっとも遺物の多く採集される場所で、とくにグシク土器・類須恵器（かひすゑき）などが目立つ。土器の胎土は、粘板岩粒混入（胎土H）、砂粒混入（胎土I）、表面がアバタ状を呈するもの（胎土J）、無混和（胎土K）などバラエティーにとむ。類須恵器は灰黒色を呈し、格子目状のタタキ痕が表面にみられる。他に中国製の青磁等も採集される。



写真6-14 B地点の状況(古墓?)



写真6-15 B地点出土の類須恵器

C 地点：A地点の東側斜面にあたり、ヌル殿内、根神屋、ウチ神屋、フスミ屋などの神屋（拝所）が建っている付近である。現在まで、グシク土器や中国製青磁、そして灰色瓦などのグシク時代～近世の遺物が採集されたが、量的には少なく、むしろ近世～近代の沖縄製陶器等の出土量が多い。

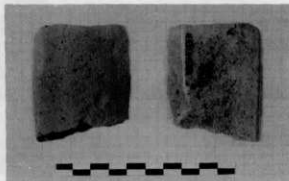


写真6-16 C地点出土の灰色瓦

D 地点：白い煙黒い煙の碑の下方にイジグチという神屋の建っている畑がある。このなかよりグシク土器や中国製青磁などと、近世～近代の沖縄製陶器が採集される。また棒状の石器や沖縄貝塚時代後期の底部に類似する土器も出土しておりナングシクの由来を知るうえでも重要な地点である。

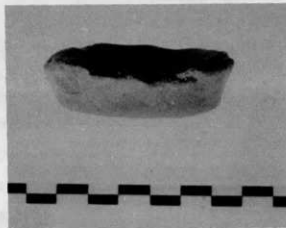


写真6-17 D地点出土の土器底部

本地点は、今は市街地におりている城の移動前の部落跡だといわれている。

所見：現在までの表面調査からすれば、本遺跡は名護湾岸地区（名護・屋部）のグシク時代の遺跡の中でもっとも大きな規模をもつ中心的な遺跡だと考えられる。

本遺跡は拝所としてだけではなく、公園として多くの人々に親しまれており、また整備が進められているので、諸工事が遺跡を破壊しないよう、十分に注意する必要がある。

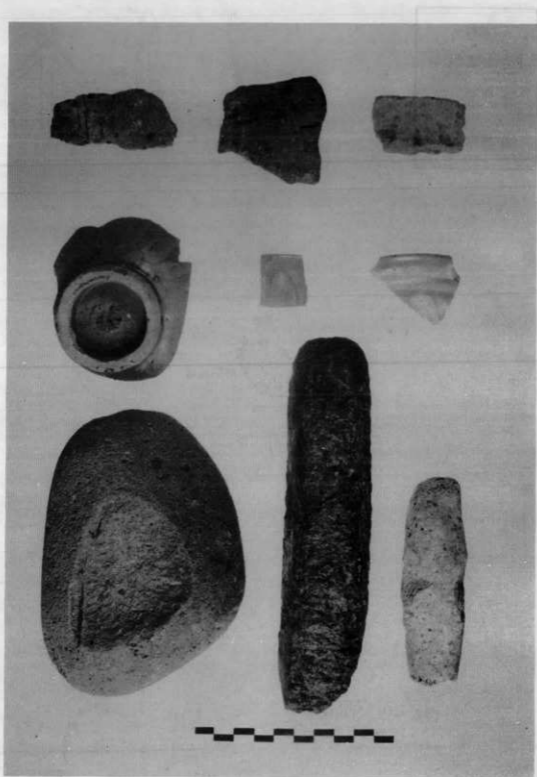
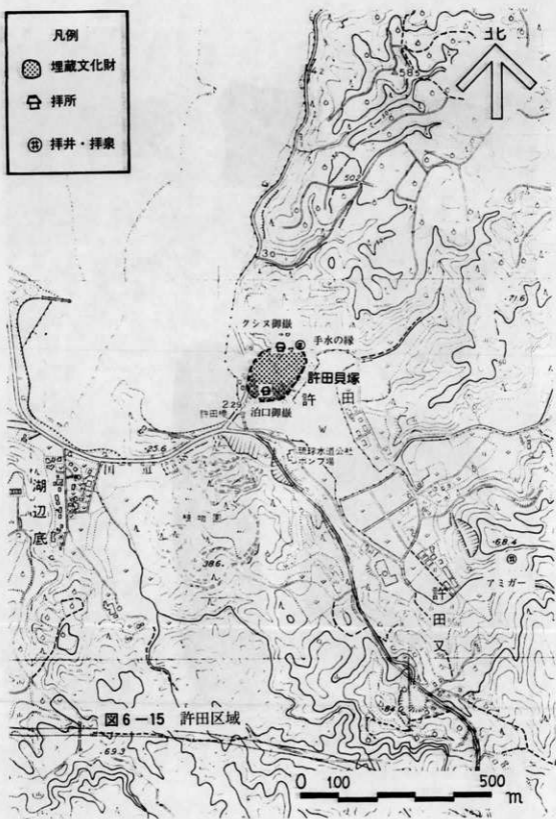


写真6-18 ナングシク遺跡群出土遺物



6-13 許田貝塚 (NNKK)

所在地：名護地区許田 オキナワ 手水原

時代：沖縄貝塚時代後期

概要：「手水の緑」で有名な許田の手水は、許田部落の背後にあたる北側の丘陵下にある。この手水の東側前方約100mの部落内の畑や道路（許田222・227番地）より沖縄貝塚時代後期（約2000～800年前）の土器片が採集された（下図参照）。この一带は、名護湾にそそぐ福地川の河口に形成された砂丘地で、標高は約1.5～2mである。公民館のある東側の平地は、近年埋立てられたもので、それまでは広い内海であった。北側は標高40～60mの丘陵があり北風を防いでいる。



写真6-19 許田貝塚全景

所見：土器はいずれも小片で、詳細な時代の決定は今後の課題である。遺物の散布する部落内はほとんどが宅地で、かつ道路は舗装されており、遺跡の範囲を決定することは難しいが、南側にも広がる可能性がある。

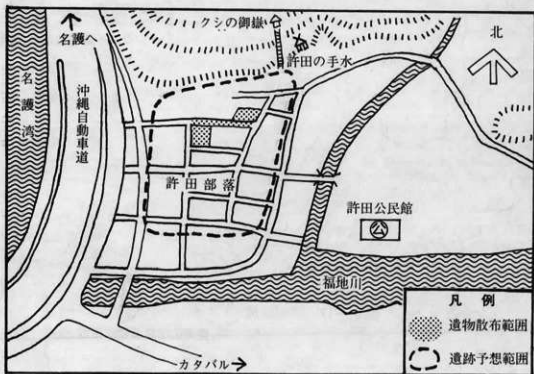
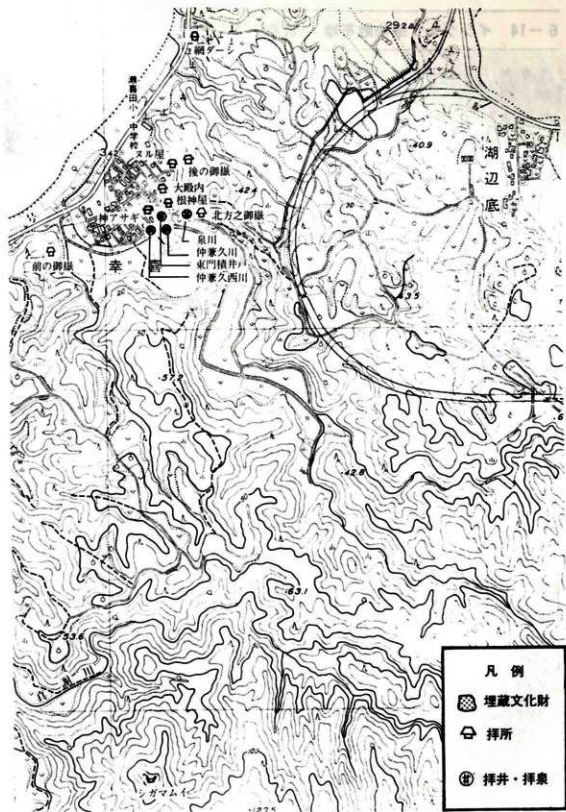
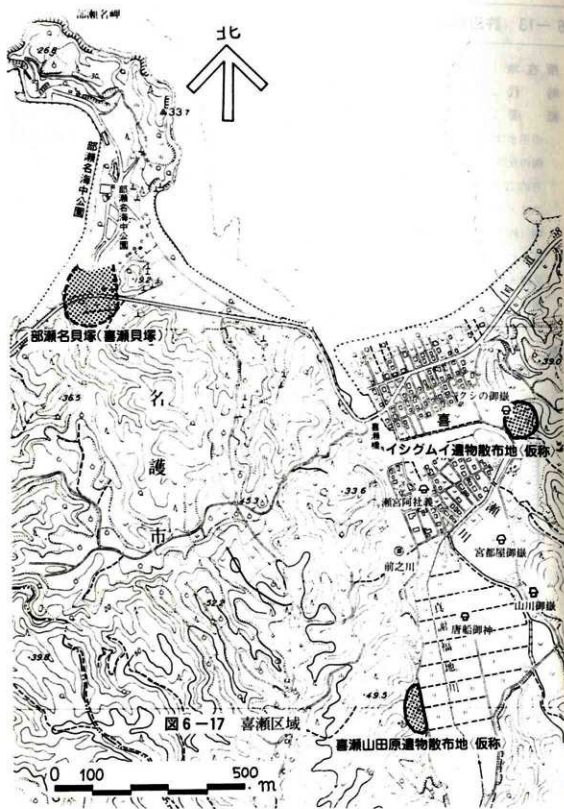


図6-16 許田貝塚



6-14 イシグムイ遺物散布地 〈仮称〉

所在地：名護地区喜瀬 明地原

時代：不明

概要：字喜瀬の東側、上流から流れてきた喜瀬川が大きく西側にまがる所にクシの御嶽と呼ばれる坪所がある。この坪所の南側のサトウキビ畑より数個の土器片が採集された。ここは、イシグムイと呼ばれ、今でこそ埋立てられサトウキビ畑になっているが、数十年前までは御嶽のすぐ前まで川がはいりこんでいたということである。



写真6-20 イシグムイ遺物散布地全景

所見：土器は小破片のみで、いつの時代のものかはわからない。今後とも調査を重ねて資料収集を行なうことが必要である。この遺物散布地の北側から西側の斜面は、以前は畑として利用されているので、ここから土器が落ちてきた可能性もある。

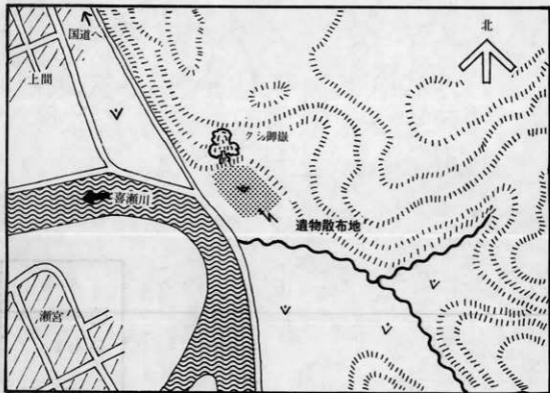


図6-18 イシグムイ遺物散布地

6-15 喜瀬山田原遺物散布地 〈仮称〉

所在地：名護地区喜瀬 マフヂノハ 山田原

時代：不明

概要：喜瀬部落を奥に入ると、水田とサトウキビ畑を主体にした広い平地がある。この西端にあたる丘陵に入りこんだ小谷内の畑に土器片が散布していた。土器はいずれも小片の無文胴部であるが、胎土は硬質の泥胎で、沖縄貝塚時代後期の土器に類似する。



写真6-21 喜瀬山田原遺物散布地全景

所見：遺物の散布する畑の土は、以前は水田だったらしく、灰色の土である。それと同時に、この畑には砂をまいた痕跡もある。いままでのところ、土器がどちらの方に由来するのか不明であり、今後、他の遺跡から持ち込まれた可能性も含めて検討する必要がある。



写真6-22 喜瀬部落の遺跡遠景

6-16 部瀬名(喜瀬)貝塚 (NNBK)

所在地：名護地区喜瀬 部瀬名原

時代：沖縄貝塚時代後期

概要：部瀬名貝塚は喜瀬貝塚とも呼ばれ、1953年に多和田真淳氏によって発見された遺跡である。名護市内では初期に発見された遺跡であるにもかかわらず、詳しい調査が行なわれないまま海中公園の建設によって北側の部分は壊滅したと言われている。現在、



写真6-23 部瀬名(喜瀬)貝塚全景

遺物の採集されるのは、海中公園と国道をはさんで反対側のサトウキビ畑内である。ここは、北側に開いた丘陵内の小さな低地にあたり、地面は海岸側が砂地で、その後が後背湿地の跡と思われる泥地である(下図参照)。前者の砂地部分から沖縄貝塚時代後期(約2000～800年前)の土器片や貝殻などが採集される。

所見：従来、壊滅したと言われていた部瀬名貝塚が、国道の南側に一部分ながら残存している可能性が今回の調査で確認された。一部であるが残されたこの貝塚を保存し活用する工夫と努力が必要である。

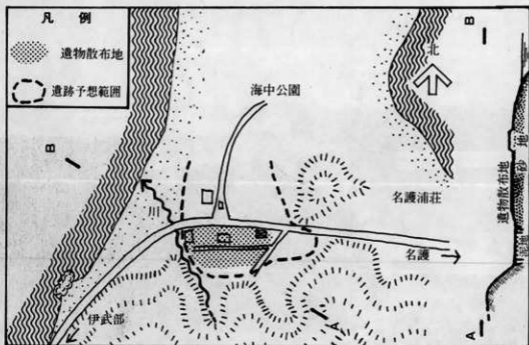


図6-19 部瀬名(喜瀬)貝塚

第7章

久志地区の遺跡

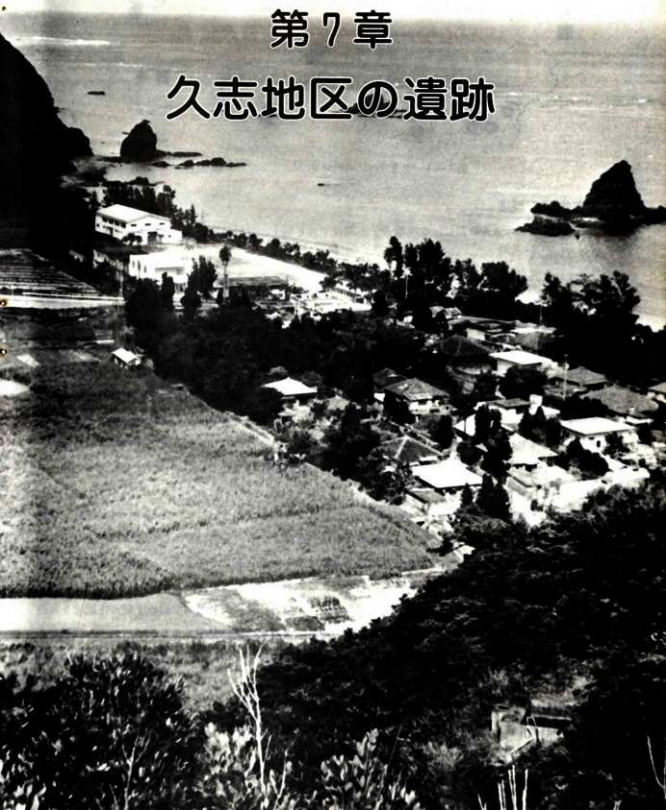




図7-1 久志地区の遺跡分布

久志地区の概要

久志地区における遺跡数は、3年間の分布調査で12も増え、合計15である。次に時代ごと簡潔に記してみたい。

沖縄貝塚時代前期（今から2500年～3500年前）の遺跡は、ちょうど本地区の北と南に有津遺跡と大川田原遺跡がある。両方とも川の側に立地しているが、開発によって埋まってしまう、詳しいことはわからない。貝塚時代中期（今から2500年～2000年前）の遺跡は、まだ見つかっていないためこの期間が空白である。しかし今後の調査によって見つかると思われる。貝塚時代後期（今から2000年～800年前）の遺跡は嘉陽・安部・久志各貝塚と思原遺跡がこの時期の可能性が高い。これらの遺跡はいずれも磯湖に面しており、漁撈に適していたであろう。嘉陽・安部・久志各貝塚は、現在のそれぞれの部落と重なるか接している。この3貝塚からはグシク時代（今から800年～500年前）の遺物も出ることから、現部落が2000年もたどれる可能性がある。グシク時代の遺跡は、これらに加えて天仁屋の部落にも確認されている。古琉球時代（今から500年～350年前）以降の遺跡は幾つかの部落で確認されているが、そのほとんどが伝承と一致する古村である。

現在の汀間部落は、嘉手苅村^{ツナヅキ}と大村栗村^{オホムラノ}が合わされてきた¹⁾、とされているが、大村栗村跡から遺物が拾われていない。田村浩は大浦に石器時代の洞穴遺跡がある²⁾、と書いているが未確認である。しかし大浦の拝所から青磁が拾われたという情報があるので、引き続き調査が必要である。辺野古の古村は南側の川を越えた台地上の高里原と言われているが、これも確認されていない。

1979年に行なわれた久志貝塚発掘調査は、久志区民の協力により、名護市で初めて竪穴住居址を発掘する等多大な成果を取めた。しかしながら住宅の新築工事直前の緊急発掘であり、いろいろと問題があったことも否めない。久志地区には前述した通り、数千年の歴史が現村落まで連続と続く可能性の強い遺跡が多いことから、私たちの世代で失なわせることなく、後世に伝えるべきものである。

- 1) 仲松弥秀『古屑の村』沖縄タイムズ社 1977年1月 181頁
- 2) 田村浩『琉球共産村落の研究』1927年（至言社版）141頁



図7-2 有津区域

市

7-1 ^{アツ}有津遺跡 (NKAI)

所在地：久志地区天仁屋 有津原

時代：沖繩貝塚時代前期

概要：久志地区の最北の部落が有津である。ここは天仁屋部落の小学で、北側は東村の有銘に接している。遺跡は、有津川河口に形成された砂丘上に位置するが、現在は県道工事によって盛土され、採集される遺物は少ない。これまで採集された遺物は、口縁部にコブ状突起をもつものや沈線文を施した沖繩貝塚時代前期（約3500～2500年前）の土器が多い。

この遺跡を発見した一人である知名定順氏によれば、発見当時に採集した遺物は前期の^{ホコグロウ}萩堂式土器が多かったそうである。

所見：採集した遺物の中に沖繩貝塚時代中期（約2500～2000年前）と後期（約2000年～800年前）のものらしき土器があるが、詳細については今後の課題である。



写真7-2 有津遺跡出土の土器

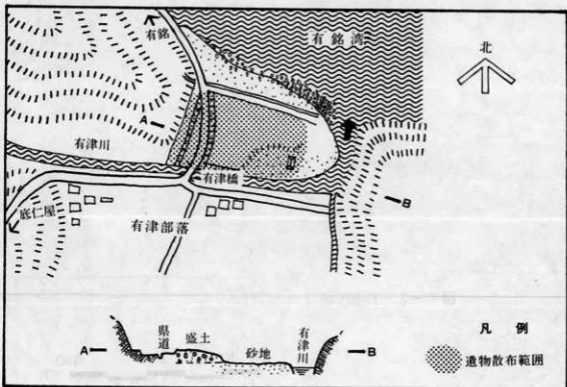


図7-3 有津遺跡



7-2 天仁屋原遺跡 (NKT1)

所在地：久志地区天仁屋 オレンナハラ 天仁屋原

時代：古シク時代～近代

概要：天仁屋公民館の南東側は神アサギやニガミヤーなどの押所のある広場になっているが、ここから古シク時代（約800～500年前）の土器片や中国製の青磁、染付などや近世・近代の沖縄製陶器が採集される。ここは標高約30mの台地末端で、すぐ南側は崖になっており、天仁屋川の谷に続いている。神アサギの



写真7-3 天仁屋原遺跡全景(東側より)

ある広場の周囲は道の造成によって削られているが、この断面には厚さ20cm程の遺物包含層がみられ、中から中国製の染付がみつかった。神アサギのそばにあるタンカウガミ（遙拝所）では嘉陽を拝むそうである。

所見：本遺跡からは、古シク時代より近代（約100年前）までの遺物が採集され、天仁屋部落の歴史を語る貴重な遺跡である。遺跡は押所を中心にして存在しているため、遺跡全体の破壊はないが、道の造成による周辺部の削土やブランコ・遊具の設置による部分的な攪乱がみられる。今後は注意する必要がある。

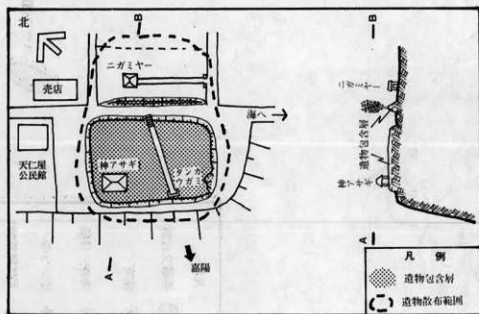


図7-5 天仁屋原遺跡

7-3 ハサマ遺跡 (NKHI)

所在地：久志地区天仁屋 後原
(底仁屋)

時代：近代

概要：天仁屋小学校のある底仁屋の部落から南方に直線距離で約2kmはなれた山間の小谷内にハサマと呼ばれる集落の跡がある。ここは、底仁屋が現在の位置に移る前の集落跡だそうで、南向きに開いた幅10～20m位の小谷内の低地とその斜面に住居や井戸、溝を

側に掘り込んだ階段状の畑ないし水田の跡と思われる遺構などと一緒近代末から近代にかけての特徴をもつ壺屋焼の陶器類や日本製の染付(スンカンマカイ)などの遺物が確認された。

聞き取り調査によれば、底仁屋は廃藩置県後に成立した屋取集落だが、大正元年か2年頃に現在の位置に移ってきたという。移動した理由は水の問題だそうで、その当時の戸数は13戸ということである。また、このハサマには現在でも拝んでいる墓があるという。

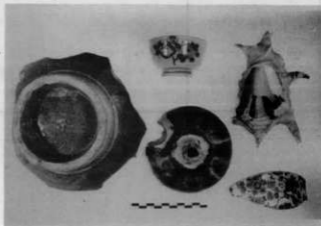


写真7-4 ハサマ遺跡出土の近代陶磁器

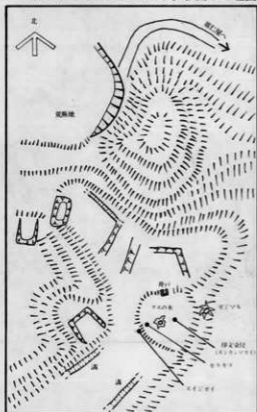


図7-6 ハサマ遺跡

所見：このハサマは時代的には新しい近代の集落址だが、部落の成立・変遷を基礎にして、名護・山原の歴史を考えるという課題から、近代の前半(明治)に成立する屋取部落の遺構・遺物を残すこの集落址を遺跡としてとりあげた。当時の状況を記憶している人もおり、いまのうちに記録することが急務である。



写真7-5 ハサマ遺跡に残る井戸

7-4 嘉陽貝塚 (NKKaK)

所在地：久志地区嘉陽^{マサノ} 東・西

時代：沖繩貝塚時代後期～グシク時代

概要：字嘉陽は、嘉陽川の河口に形成された砂丘上に位置しているが、この部落内より沖繩貝塚時代後期の土器と、グシク時代の土器や類須恵器、中国製の青磁、染付、南蛮陶器などが採集される。ここは、南側に開いた平野の入口にあたり、正面南側は太平洋を望み、背後はこの砂丘の後背



写真7-6 嘉陽貝塚出土の遺物

湿地だったと考えられ、現在は水田に利用されている。遺物の中では特に沖繩貝塚時代後期の土器が多く、口唇部に刻みを施したのものや、幅広の沈線文、凸帯文に刻みをつけたものなどの有文土器がみられ、底部はこれまでのところくびれ平底だけが採集されている。これらのことから、本貝塚は沖繩貝塚時代後期後半（約1500～800年前）およびグシク時代（約800～500年前）の遺跡と考えられる。

所見：本貝塚の北東側にある嘉陽原遺跡もグシク時代の遺物が採集されているが、これまでのところ、本貝塚のグシク時代との先後関係は不明である。貝塚時代からグシク時代の初期まで嘉陽貝塚に住んでいた人々が、その後、嘉陽原遺跡に移ったのだろうか？

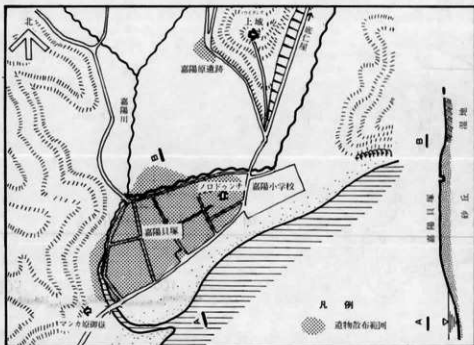


図7-8 嘉陽貝塚

ハ ヨーパロ
7-5 嘉陽原遺跡 (NKHa1)

所在地：久志地区嘉陽 ^{ハヨロ} 嘉陽原
時代：グシク時代中期～近世
概要：嘉陽原遺跡は上城のある丘陵の西側平地に立地する。斜面下を通る道路が二又に分かれる下側に当たり、現在サトウキビ畑になっている。そのそばに水田への水路が通っている。畑は嘉陽層の礫がまざる土である。



写真7-7 嘉陽原遺跡全景(西側より)

採集された遺物は土器、沖繩製陶器等である。土器はすべて無文胴部で、グシク時代中期のものとして胎土に粘板岩粒を混入したもの(胎土H)、後期のものとして砂粒混入(胎土I)、アバタ状(胎土J)に分類される。

遺跡の前面は平野をなし、そのなかに嘉陽川の水を利用した水田がひろがっている。調査によって、グシク時代は嘉陽原や現村落のある砂丘地に居を構え、小規模な稲作を行っていた、と考えられる。

伝承：嘉陽部落は、嘉陽大主が勝連から嘉陽上城の後方に移住して村が始まった、と言われている。

所見：嘉陽上城周辺からは遺物が採集されていない。上城の斜面下に本遺跡が形成されているが、両者の関係の解明は今後の調査課題である。なお、本遺跡は嘉陽団体営圃場整備事業(1983年以降)の範囲に入っており、保存のための調整が必要である。

参考文献：玉城定喜『久志村誌』久志村役所 1967年10月

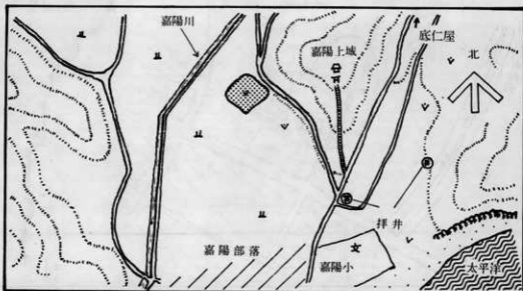


図7-9 嘉陽原遺跡

7-6 ア フ 安部貝塚 (NKAK)

所在地：久志地区安部 ムラウチ ツツシノ 村内・提原・大袋原

時代：沖縄貝塚時代後期、グシク時代～近世

概要：安部部落の北側、久志商店の後方三つの原の境界あたりに遺物が散布している。散布地域はサトウキビ畑や野菜畑に利用され、一部は宅地にかかっている。遺物包含層と思われる土壌は灰褐色の細砂である。貝塚の北は標高20m以上の丘陵で北風を防ぎ、南は遠浅の砂浜で、沖の方にはリーフが発達している。貝塚の近くにはクバ川御嶽と呼ばれる拝泉があるので、貝塚時代から人々の飲料水に供されていたと思われる。当時人々が住むのに、最適の土地であったであろう。



写真7-8 安部貝塚全景

採集遺物は貝塚時代後期のものとしては、土器だけである。口縁部は少なく、壺形、丸く肥厚するもの、直口の3種類に分けられる。胴部は薄く赤褐色の無文がほとんどで、一片だけ二又のヘラで施文したものがある。底部も少なく、尖底と平底である。土器の拾える畑の周辺から、グシク時代の陶磁器が採集された。青磁、染付、南蛮陶器、沖縄製陶器等である。青磁のなかには、内面の底に「福」という字をスタンプした焼きの弱い茶色味がかったものがある。

所見：本貝塚には貝が散布していないことから、住居地の可能性が強い。なお、安部団体営土地改良総合整備事業（1982年予定）範囲に入っており、早急に保存のための調整が必要である。

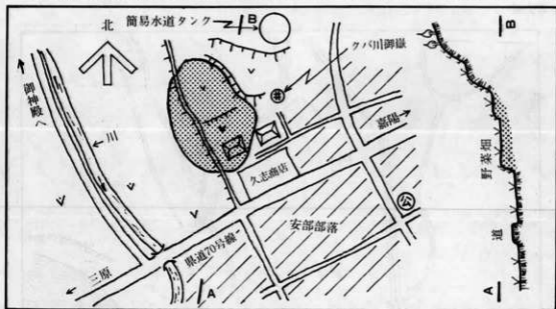


図7-10 安部貝塚

7-7 ^{キタウーバル}北上原遺跡 (NKKI)

所在地：久志地区安部 北上原

時代：グシク時代～近世

概要：北上原遺跡は、安部部落の西側にある標高15mの台地上に立地する(図7-11参照)。本遺跡は安部 226番地の畑で、まわりはサトウキビ畑に囲まれ、そばから1957年に作られた農業用懸樋が通っている。畑の土壤は国頭マージである。

本遺跡から類須恵器^{カイトキ}、南蛮陶器^{カヌカ}、染付、沖縄製陶器、赤瓦等が採集される。類須恵器は2個で、裏面に格子目の叩き^カが施され、焼きが弱いものである。

なお、本遺跡より泉道を越えた西上原^{ニシウイーバル}の低地の畑からも類須恵器と思われるものが1個採集されたが、これは本遺跡から流れ落ちたものか運び込まれたものと推定される。

所見：本遺跡周辺は近代期に屋取^{ヤトリ}があったと聞けるが、昔から人が住んでいたという伝承はない。遺跡の土質が国頭マージであること、グシク時代の土器が見つからないこと等、今後追究すべき課題である。本遺跡は安部団体営土地改良総合整備事業(1982年予定)区域に入っており、保存に向けた調整が必要である。



写真7-9 北上原遺跡全景



写真7-10 北上原遺跡出土の類須恵器

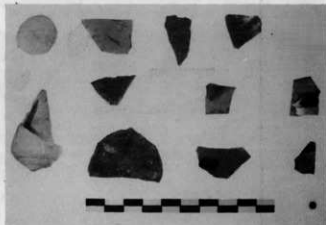


写真7-11 上之島遺跡出土の遺物

7-8 ワイヌシマ 上之島遺跡 (NKU11)

所在地：久志地区安部 アヌベ 提原・大袋原

時代：古琉球?～近世

概要：字安部の北西側背後に上之島と呼ばれる、標高約15mの丘陵があるが、この丘陵先端付近より、中国製の青磁、染付、喜名(知花?)焼、壺屋焼などの沖縄製陶器が採集される。ここは、後方に「御神殿」と書かれた拝所があり、現在の位置に部落が移る前の部落跡だと言いつたられている。この丘陵の南東側の低地にはマチンガーという昔からの拝所がある。

伝承：安部部落は、勝連から移ってきた安部大王が上之島に住んだことによって始まったと言われている。

所見：本遺跡は、これまで採集された遺物が少量で、時代を決定するには資料不足であるが、土器片も1片だけ採集されており、グシク時代までさかのぼる可能性もある。

安部部落には、上之島遺跡の他に安部貝塚と北上原遺跡が確認されており、時代から考察すれば部落は約2000年前安部貝塚にはじまり、次に約800年前に北上原遺跡にも人が住みはじめ、約500年前には上之島遺跡にも居住者ができたことになり、この時点で、安部は3ヵ所の集落に分散していたと考えられる。そして最後に現在の安部(村内)に集合するわけだが、その時代はこれまでの調査では断定できないが、約300年前ではないかと考えられる。このように部落の変遷をとらえることができるが、伝承のとおり上之島が現部落の始まりで、それ以前は、現部落とは直接の関係はない「先住民」の部落だったのかどうかは、今後の検討課題である。

参考文献：玉城定喜「久志村誌」久志村役所 1967年10月

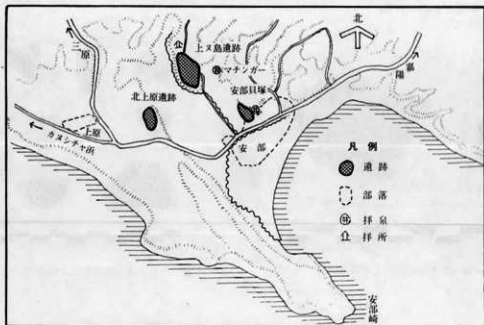
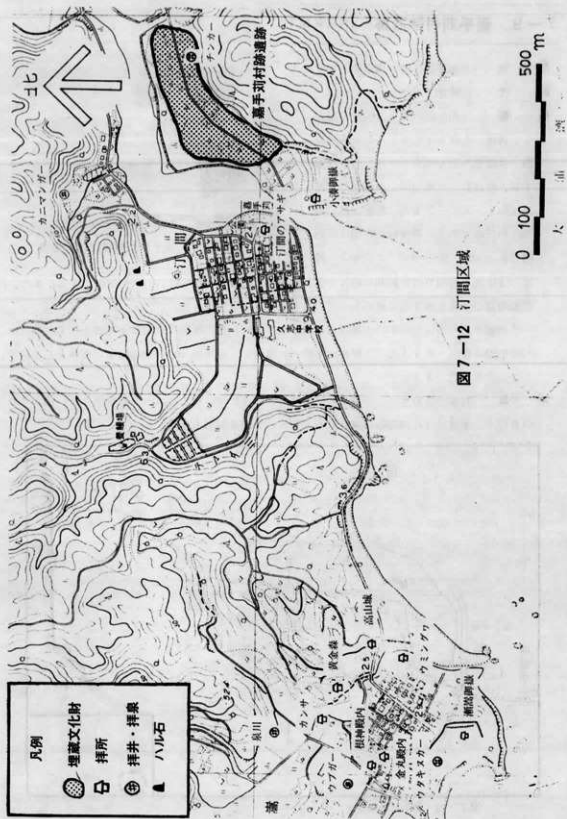


図7-11 安部部落の遺跡



7-9 嘉手苺村跡遺跡 (NKKMI)

所在地：久志地区汀間 嘉手苺

時代：古琉球?～近世

概要：汀間川河口の東岸畑地一帯から、近世～近代を中心にした外来の陶磁器や沖縄製陶器が採集される。ここは嘉手苺と呼ばれる汀間川河口の低地で、標高は約1～2.5 mである。背後は標高約75mの丘陵である。遺物散布範囲は広範囲におよぶが、なかでも「チンカー」付近

には中国製青磁や近世初期の染付と思われる、本遺跡においては古い遺物が出土する。また、沖縄製陶器では喜名焼や壺屋焼が多いが、古我知焼も1片採集された。

この嘉手苺一帯は1980年に土地改良事業が行なわれ、元的地盤は大部分が破壊されてしまった。元的地盤は砂だったそうだが、現在でも所々に露出している灰黒色の砂に陶磁器が含まれるので、このことを確認できる。

所見：対岸の恩計と、この嘉手苺は、現在の海岸砂地に移る前の古い部落跡と言い伝えられているので、本遺跡は汀間部落の成り立ちを知るうえで重要である。

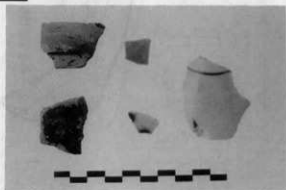


写真7-12 嘉手苺村跡遺跡出土の遺物

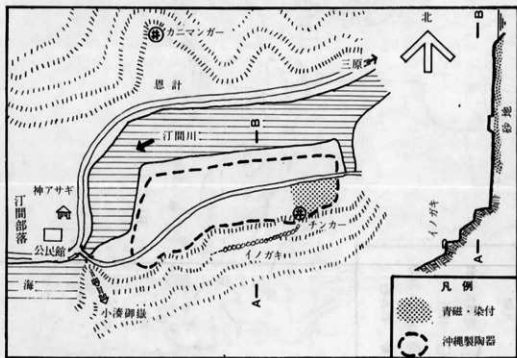


図7-13 嘉手苺村跡遺跡



7-10 思原遺跡 (NKU1)

所在地：久志地区辺野古 思原

時代：沖縄貝塚時代後期?

概要：思原遺跡は、辺野古部落とキャンプ・シュワープ基地が境をなす海岸にある。そこは遠浅の砂浜で、略図に見るように遺物がフェンスをはさんで見つかる。遺跡の北側は丘陵で、沖にはリーフが発達している。



写真7-13 思原遺跡全景(南側より)

1982年2月18日、キャンプ・シュワープ基地の諸建築予定地内文化財調査を実施した際、整備工場建設に関連して本遺跡の確認調査を行なった。本遺跡のある浜は、海兵隊のLST(上陸用舟艇)の上陸訓練場で、砂浜は無残にもキャタビラーの歯で50~60cm程ひっくり返されていた。この調査で土器数個が見つかった。

基地内外の踏査によって採集された遺物は、土器、穿孔石板である。貝塚時代後期土器と思われるものは無文胴部で、器厚が5mm以下の薄手で、色調が暗褐色と黒褐色のものであり、石英微粒を含み、液に洗われ磨滅が著しい。別の時期の土器と思われるものは、同じく無文胴部だが、器厚7~8mmの厚手で暗褐色、胎土に石英を入れてあるが、小アバタ状を呈している。石板は、風化した千枚岩に大小二つの穴があげられているが、時期ははっきりしない。ガードボックスの下の方は、丘陵の赤土が流れて堆積しているが、さらにその下層に茶褐色土層がある。この層が遺物包含層であるかどうかは不明である。

所見：基地内調査は、行動範囲が制限され、また短い時間であったため、十分な調査が不可能であった。今後、米軍当局に対し、上陸演習を停止し遺跡の保全をはかることや、十分な文化財(遺跡)調査を要求していかねばならない。

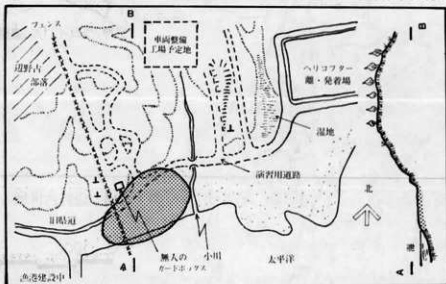


図7-15 思原遺跡

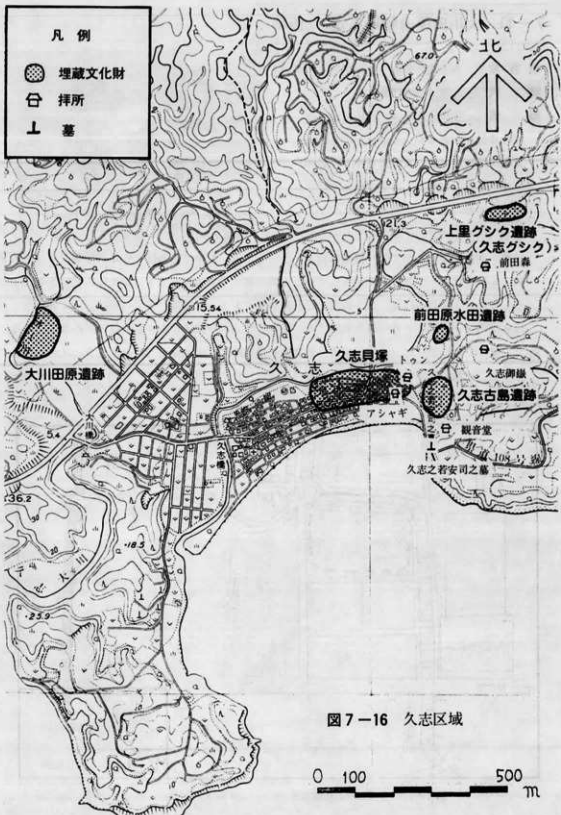


図7-16 久志区域

7-11 ^{オーカダバル}大川田原遺物散布地 (仮称)

所在地：久志地区久志 大川田原
 時代：沖縄貝塚時代前期
 概要：字久志の背後に^{オーカダバル}大川田原と呼ばれる低地があるが、このなかより沖縄貝塚時代前期と思われる土器片と貝殻が採集された。現場は、県企業局久志浄水場の北西側の畑で、上流から流れてきた久志大川が右に蛇行する所にあたる。北

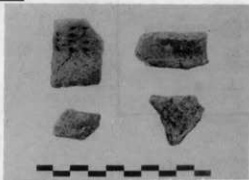


写真7-14 大川田原遺跡出土の土器

・東・西を山に囲まれており標高は約4～5mである。市農林課と行なった試験掘りでは地表より約1mまでは、水田として使用されていた当時の耕土で、これ以下4～5mは灰色粘土層だった。そして4～5m以下はサンゴや貝殻を含む白砂層である。土器は、有文の口縁部が2個あり、一つは先端のものがつたヘラでつけた^{しづつもん}刺突文で、もう一つは細い粘土ヒモを貼り付けた^{とつかいもん}凸帯文である。

所見：この畑には、久志大川の当遺物散布地に隣接する部分を浚渫したときの土砂が敷かれているが、遺物の散布する範囲はこの土砂の範囲と一致する傾向があり、遺物がこの土砂に含まれている可能性も考えられる。

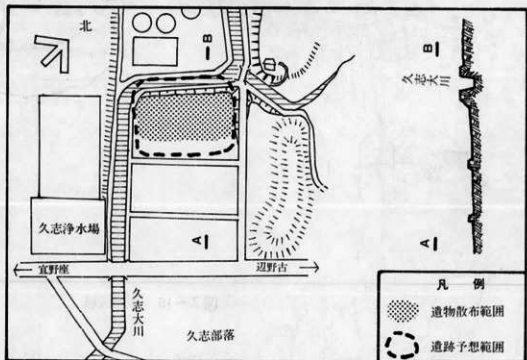


図7-17 大川田原遺物散布地

7-12 久志貝塚 (NKKK)

所在地：久志地区久志 久高

時代：沖縄貝塚時代後期～グシク時代前期

概要：久志貝塚は、久志部落の東側にある屋号アタヌヤー（24番地）付近から、部落中央にあたる公民館付近までひろがっている。アタヌヤー付近は、新築工事に伴い緊急発掘が行われ、沖縄貝塚時代後期後半（約1500～800年前）

の居住址が六軒確認された。また、口縁部に網目状の文様を施す、沖縄貝塚時代後期の土器をはじめ小さなコブをつけたグシク時代前期（約800年前）の土器まで数多くの土器片が得られた。さらに、前者の中に、稲のモミ圧痕がついているものが確認され、当時、久志のどこかで稲作が行われていたことを推測させる資料になった。

所見：これまでの調査では、5ヵ所の遺跡が、久志部落区域から確認されており、最も古い時代の大川田原遺跡の時代から推測すれば、約3500～2500年前の沖縄貝塚時代前期には久志部落で人が生活していた可能性がある。また、久志貝塚（約1500～700年前）、上里グシク遺跡（約700～600年前？）、久志古島遺跡（約600～300年前）の三遺跡は時代的に連続しており、このことと、現在の部落が久志古島遺跡より移ったという、地元の伝承と合わせて考えれば、久志部落の歴史は約1500年前の久志貝塚まではさかのぼることができる。

参考文献：名護市教育委員会「久志貝塚緊急発掘調査概報」1980年3月

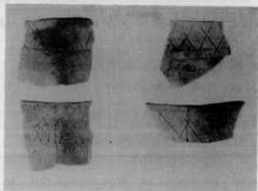


写真7-15 久志貝塚出土の土器

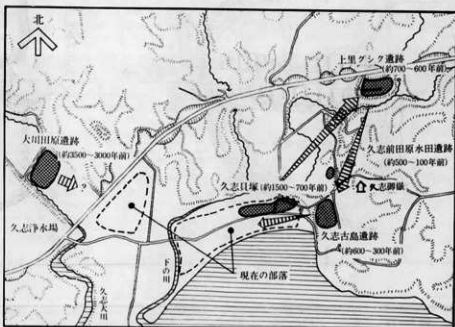


図7-18 久志の遺跡と村落移動

7-13 上里グシク遺跡 (NKUG)

所在地：久志地区久志 前田原

時代：グシク時代

概要：字久志の北側後方に上里グシクと呼ばれる丘があるが、この上より中国製の青磁が採集された。現場は、国道329号線沿いで、久志と豊原の中間にあたるが、この丘の東・西・南側は谷になっている。北側は、国道によって切りとられており、元の地形は不明である。また、数十年前までは石垣が残っていたというが、現在ではこの丘陵上は約2mほど土がとられており、「久志若按司の居城なりしといふ」と世に紹介された、このグシクのおもかげは今はほとんど見るができない。

所見：このグシクは、久志部落では、久志貝塚（約1500～700年前）と久志古島遺跡（約500～300年前）との間の時期にくる遺跡である。久志部落の変遷と発展を知るうえで貴重な遺跡だが、遺跡の中心部がほとんど失われてしまった今日、周囲の丘陵上など地形的に関連すると思われる所を詳しく表面調査する必要がある。



写真7-16 上里グシク遺跡出土の青磁

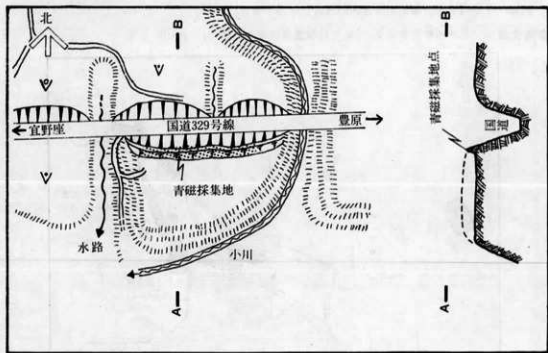


図7-19 上里グシク遺跡

7-14 久志古島遺跡 (NKKF)

所在地：久志地区久志 当原

時代：古琉球～近世

概要：字久志の東側にある標高約20mの平坦な丘陵上の畑は当原と呼ばれ、久志部落の古島（以前の部落）と言いつたられているが、ここより喜名、または知花焼と思われる沖縄製陶器を中心に、中国製青磁、南蛮陶器、灰色瓦、そして壺屋焼の陶器などが採集された。ここは南側に海を望み、西は久志部落とその背後の低地にあたり、

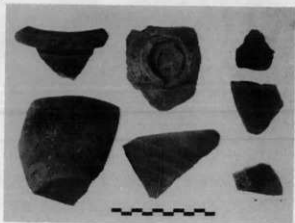


写真7-17 久志古島遺跡出土の遺物

東もティンマンジャーと呼ばれる小川の流れる小さな谷底低地になっている。また北側はしだいに高くなり、久志御嶽の森になる。北側と東側を流れるイチマンジャーとティンマンジャーといわれる小川の周囲は以前は水田で、久志古島当時も水田として利用されていたのではないだろうか。

所見：これまでの表面調査によれば、この久志古島遺跡では喜名焼（知花焼？）と思われる陶片が多く、壺屋焼は少量しか採集されない。これに対して現在の久志部落内では、前者よりも後者が圧倒的に多い。このことから、久志部落が古島から現在の砂丘上に移動したのは喜名焼、知花焼などが、廃されて壺屋焼が創設された1682年前後の可能性が考えられる。

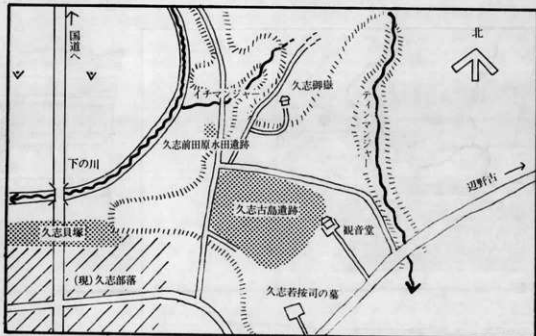


図7-20 久志古島遺跡

7-15 久志^{メーダバ}前田原水田遺跡

所在地：久志地区久志^{メーダバ} 前田原

時代：古琉球～近代

概要：久志古島遺跡の北側、イチマンジャーと呼ばれる小川沿いの低地より古琉球（約500年前）から近代（約100年前）にわたる水田遺跡が確認されている。ここは、1979年に行われた久志貝塚の発掘調査の際に水田址を確認する目的で、久志416番地と460番地に2ヶ所の試掘溝を設けたが、前者より、時代判定の資料になる遺物を伴う明瞭な水田址が確認されたのである。この416番地試掘溝は、第Ⅰ層が明治頃から戦前まで（近代）の畑、Ⅱ層が明治頃の水田、Ⅲ層、琉球王国時代（近世）末期～明治の水田、Ⅳ層、琉球王国時代（近世）の水田、Ⅴ層、古琉球（15世紀頃）の水田、そしてⅥ、Ⅶ層は古琉球以前の湿地と、7枚の層に大別される。

これらの水田の層中からは、炭化した米や麦が検出されたが、特にⅢ層の下部では溝に木枝を敷いた遺構が発見された。また第Ⅴ層からは15世紀頃、中国（明）でつくられた線刻蓮弁文の青磁が出土し、この層が古琉球の水田址と確定する資料になった。

所見：この遺跡の最古の水田址は古琉球（15世紀頃）時代のもので、久志古島遺跡に住んでいた当時の水田址と考えられる。



写真7-18 久志前田原水田遺跡青磁出土状況

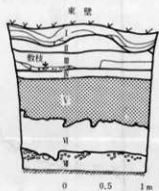
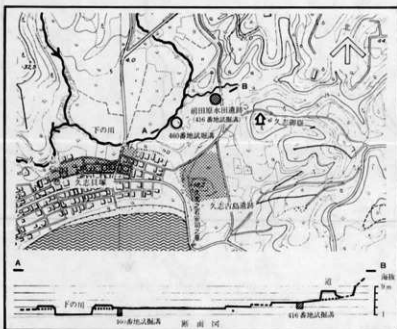


図7-22 416番地試掘溝の層序

図7-21 久志前田原水田遺跡

第8章

まとめと今後の課題



成果と遺跡保存について これまでの遺跡分布調査の結果、名護市内の遺跡は70ヵ所を数えるようになった。調査前は10ヵ所あまりであり、約7倍近くに増えたことになる。これらを地区別にみでみると、屋敷地12、羽地21、屋部6、名護16、久志15となり、屋部地区以外は10ヵ所以上であり、特に羽地が多い。

第2章「名護市の遺跡の特色」で述べているように、名護市では約5000～4500年前よりすでに人が住んでいたことがわかった。また、早期や沖繩貝塚時代などの漁撈や狩猟、植物採集を生活の基礎にしていた時代から、農業を生活の基礎にするようになったグシク時代、古琉球、近世、そして近代と現在の私たちが生活している各部落が、どのような歴史を歩んできたのかということも徐々に明らかになってきている。

このように、私たちの名護市の歴史を具体的に知るための遺跡は歴史資料であり、また文化財である。遺跡を発見し詳しく調査すると同時に、私たちは子孫に遺跡を残していかなければならない。このため第1章の目的と方法で述べたように、名護市の遺跡分布調査では、開発予定地を優先して踏査するようにした。しかし現在知ることのできる1991年まで計画されている公共開発事業のうち、ほぼ踏査を終了したのは1981年度までであり、後10年分の開発予定地の踏査が残っていることになる。また、個人による開発も小規模ながら多く、遺跡保存については、公共事業と同様に注意を払わなければならない。実際、開発予定地を優先して踏査する場合、発見される遺跡はただちに保存に向けての処置をとらなければならないものが多く、新遺跡の発見が続く時は、このように振りまわされることが多かった。そして、やむをえず、緊急発掘を行い綿密な記録保存を行おうとすれば、普通、3ヵ月位は1つの遺跡にかかりっきりにならざるをえず、他の開発地を踏査する時間が制限されることになる。特に名護市のように未発見の遺跡が多く予想されるところでは、1つの遺跡を保存または記録保存をする間に、他の数ヵ所の未発見の遺跡を破壊させてしまう

表8-1 地主一覧表

地区	番地	面積	所有者	備考
A	1-1	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-2	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-3	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-4	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-5	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-6	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-7	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-8	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-9	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-10	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-11	18	〇〇〇	〇〇〇
	1-12	18	〇〇〇	〇〇〇

という矛盾を生み出す危険がある。これまでの名護市の遺跡分布調査で、開発計画に関連して何らかの調整を行う必要があるものが、まだ29ヵ所残っている。これらの遺跡については、可能な限り保存するように努力していくつもりである。また、今後できるだけ、開発事業の計画段階で、遺跡保存と開発事業との事前調整を徹底するようにならなければならない。

そして、遺跡地とその周囲の土地の地主を調べ、遺跡であること、および遺跡の可能性があることを通知し、保存に向けての協力を要請する計画をもっているが、これは次年度までかかると思われる。さ

らに、すでに一部の市町村で実施されているように、各遺跡に文化財標識ないし説明板を設置し、遺跡の位置を直接示すようにしなければならない。

遺跡の本格的な調査と保存に向けて これまでの調査では、久志貝塚や屋我グシク遺跡群のように発掘調査を行ったものもあるが、大部分の遺跡は地表にあらわれ残っている遺物や、遺跡の立地する周辺の環境などを調査することによって、その遺跡の性格づけを行ってきた。また、開発計画との調整に追われ、このような基本的な調査を行っていない遺跡もある。今後は、未発見の遺跡の確認作業とともに、これらの遺跡の性格づけの調査も重ねなければならない。

個々の遺跡の遺物や立地、周辺環境に関する情報を整理することにより、もっと具体的に私たちの祖先や地域の歴史を明らかにすることができると思う。また、このような個々の遺跡の調査によってでくる疑問や課題については、適当な遺跡を選び、正式な方法によって発掘調査を行えば明らかにすることができ、さらに具体的な歴史を知ることができるのである。

遺跡とは、私たちの祖先がある時代に住んでいた家や食べていた食物、使っていた道具などが残っている場所である。私たちは、これらの遺跡を時代順じゆんに数珠玉のようにつなぎあわせることによって、遠い昔の祖先から現在の私たちまでの歴史を確かめることができるのである。私たちは、私たち自身の歴史を知ろうとするためには、身近にある遺跡を知る必要がある。さいわい名護市には「なご博物館準備室」があり、遺跡から出土した遺物や、遺跡に関する情報を保管している。また、いま進められている「名護市史」づくりの中でも、遺跡や遺物から名護市の先史時代を明らかにする作業が進められている。市立図書館でも、名護市の歴史や考古学に関する基本的な図書をそろえている。自分たち自身や地域の歴史について疑問がでてきたら、これらの施設・機関をたずねたらどうだろうか。

一方、諸開発事業によって貴重な遺跡が壊される確率も増えてきている。現在、私たちが知ることのできる遺跡は、数百年、数千年の間、運良く全壊することをまぬがれたものである。すでに知られることもなく破壊された遺跡も多いと考えられる。このような状況の中で、遺跡をつうじて私たち自身や地域の歴史を知ろうとするとき、やはり私たち市民全員で遺跡を守らなければならないと考えるのである。祖先の時代から残ってきた遺跡を私たちは継承し、子孫に引き継がせなければならないのである。

付 編 参 考 文 献 目 録

この参考文献目録は、沖縄の考古学を知り、学んでいくうえで基本的な文献と、名護市をふくむ山原地域の考古学関係資料を中心に作成したものである。沖縄全体の考古学についての詳細な文献目録は、友寄英一郎編「琉球考古学文献総目録・解題」(1977年)を参照していただきたい。なお、本目録は、著者別・アイウエオ順に配列されている。

- 伊江村教育委員会 『石器時代の伊江島』 1977年
 —— 『沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査—第一次概報』 1977年
 —— 『沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査—第二次概報』 1978年
 —— 『伊江村南西地区の遺跡分布』 1978年
 —— 『伊江島具志原貝塚』 1978年
 —— 『伊江島ナガラ原西貝塚』 1979年
 —— 『浜崎貝塚』 1980年
- 伊是名村教育委員会 『具志川島遺跡群—第一次発掘調査報告書』 1977年
 —— 『具志川島遺跡群—第二次発掘調査報告書』 1978年
 —— 『具志川島遺跡群—第三次発掘調査報告書』 1979年
 —— 『具志川島遺跡群—第四次発掘調査報告書』 1981年
 —— 『伊是名貝塚緊急発掘調査報告書』 1980年
 —— 『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』 1980年
- 伊平屋村教育委員会 『久里原貝塚』 1981年
- 大宜味村教育委員会 『喜知嘉貝塚発掘調査報告書』 1979年
- 大城精徳・宮城篤正編 『古我知焼』 琉球文化社 1972年
- 沖縄県教育委員会 『沖縄の文化財』 1975年
 —— 『沖縄県の遺跡分布』 1977年
 —— 監修 『沖縄文化財調査報告』 那覇出版社 1978年
 —— 『掘り出された沖縄の歴史』 1982年
 —— 『伊江島ナガラ原西貝塚出土の土器』
 —— 『仲泊遺跡発掘調査概報(Ⅰ)』 1975年
- 沖縄考古学会編 『石器時代の沖縄』 新星図書 1978年
- 沖縄第四紀調査団・沖縄地学会編 『沖縄の自然』(増補新装版) 平凡社 1981年
- 沖縄電々管理局・沖縄県教育委員会 『恩納村熱田第2貝塚発掘調査報告書』 1979年

- 沖縄歴史研究会編 『沖縄県の歴史散歩』 山川出版社 1977年
 恩納村教育委員会 『仲泊遺跡—75・76年度発掘調査報告書』 1977年
 ——— 『仲泊遺跡』 1978年
 勝山誌編纂委員会 『勝山誌』 名護市勝山区
 宜野座村教育委員会 『宜野座村乃文化財（I）』 1981年
 呉我誌編纂委員会 『呉我誌』 名護市呉我区 1976年
 島袋源一郎 『沖縄県国頭郡志』 1919年
 社会経済研究所 『季刊沖縄アルマナック』 第2号 1980年
 新里恵二 『沖縄史を考える』 勁草書房 1970年
 新里恵二・田港朝昭・金城正篤 『沖縄県の歴史』 山川出版社 1972年
 新星図書編 『図説郷土のくらしと文化』（下巻）新星図書 1981年
 平良盛吉・川上清栄 『羽地村字親川郷土誌』 羽地村（現名護市）親川区 1962年
 高良倉吉 『琉球の時代』 筑摩書房 1980年
 嵩元政秀監修・渡久地正清編 『沖縄史跡マップ』 新報出版社 1981年
 玉城定喜 『久志村誌』 久志村（現名護市） 1967年
 津波仁栄 『幸喜部落の歩み』 名護市幸喜区 1978年
 友寄英一郎編 『琉球考古学文献総目録・解題』 寧楽社 1977年
 仲宗根重吉 『屋我地郷土誌』 1975年
 仲松弥秀 『古層の村』 沖縄タイムス社 1977年
 今帰仁村教育委員会 『渡喜仁浜原貝塚』 1977年
 ——— 『今帰仁城跡』 1979年
 ——— 『特集・今帰仁城跡』 1979年
 ——— 『史跡今帰仁城跡』 1981年
 名護市教育委員会 『名護市の文化財』 1975年
 ——— 『名護市の御嶽林』 1979年
 ——— 『久志貝塚—緊急発掘調査概報』 1980年
 ——— 『名護市の遺跡（1）』 1981年
 名護市史編さん委員会 『近代歴史統計資料集』（『名護市史』資料編—1） 名護市 1981年
 羽地村誌編集委員会 『羽地村誌』 羽地村（現名護市） 1962年
 比嘉宇太郎 『名護町六百年史』 名護町（現名護市） 1958年
 藤本英夫・名嘉正八郎編 『日本城郭大系』（北海道・沖縄） 新人物往来社 1980年
 文化庁文化財保護部 『全国遺跡地図』（沖縄県） 1979年
 本部町教育委員会 『本部町の文化財』（第一集） 1975年
 ——— 『兼久原貝塚発掘調査報告』 1977年
 やらむん会編 『図録沖縄の古窯』 1979年

あ と が き

「山原には遺跡が少ない」というのがこの調査を始めるまでの通説だった。確かに、他の山原の町村でも確認された遺跡は少ないところが多く、何よりも山原でもっとも広い私たちの名護市でさえも、10ヵ所余りの遺跡しか確認されていなかったことがこの通説に真実味を与えていた。このことから、まず遺跡の確認数を増やすことが、私たちの調査の第一のテーマだった。

足かけ3年間の調査をひとまず終えて、私たちは少し安心している。何よりも、第一のテーマであり不安だった遺跡数を70ヵ所にすることができ、また将来はさらに増加させることができるという見通しがついたからだ。

実際に調査をスタートさせてみると、最初の頃は連日のように遺跡が確認され、開始までの不安は吹き飛んだ。そして、調査を重ねるうちに、これまで、ほとんどわからなかった名護市内の古琉球や原始時代の様子が、ほのかにわかりかけてきており、今後の調査課題もはっきりしてきた。しかし、調査をまだ終了していない地域があり、積み残した作業も多い。また、遺跡の保存問題は、3年前よりもむしろ増えており、全体として、多くの課題が残ったままであり、今後も作業を継続していかなければならない。

この3年の間には、様々な方々の直接、間接の御指導や御協力をいただいた。貴重な時間をさいて聞き取り調査に協力して下さった多くの市民の皆様にもまずお礼を申し述べたい。また調査にともなってでくる遺跡の保存問題を真剣に審議して下さいました名護市文化財保存調査委員会の委員の諸氏、墨屋原遺跡の遺物の鑑定を快くおひきうけ下さった沖縄国際大学の高宮広衛教授、城古銭出土地の中国銭の鑑定を行われ、本報告書に鑑定資料を提供して下さいました沖縄考古学会会長の嵩元政秀氏には末尾ながら厚く御礼申し上げる。

調査スタッフ

- 安里 進 (名護市史専門委員)
- 知名定順 (市文化財保存調査委員)
- 比嘉武則 (市文化財保存調査委員)
- 岸本義彦 (沖縄県教育委員会文化課専門員 名護市史専門委員)
- 家田淳一 (市遺跡分布調査員)
- 上原政昌 (市遺跡分布調査員)
- 呉屋義勝 (琉球大学学生)
- 大城洋子 (琉球大学学生)
- 前川嘉俊 (琉球大学学生)

事務局

- 島袋正敏 ●中村誠司 ●比嘉良則 ●家田淳一

●印は本文執筆および写真担当者

なお、市単独予算で行った1979年度の調査には、調査スタッフに、上記以外に、米田善治(現沖縄県企業局)、橋本雅文(現大分県教員)の参加を得、事務局は、島袋、中村と島福善弘が担当した。また、遺跡分布調査中に行った墨屋原遺跡、墨屋原浜崎遺跡、奥武原遺跡、安和貝塚、溝原貝塚の試掘調査にあたっては、照屋正賢(現那覇市役所)、真喜屋みゆき(沖縄キリスト教短大学生)、上地栄春(琉球大学学生)、仲里安昭(農業)、そして名護高校、宜野座高校の生徒のみなさんの協力を得た。また、遺跡関係地主名簿の作成作業については屋高祖律子さんに、遺物の整理作業と本報告書の原稿の清書、校正については原園子、比嘉道子、内村孝子の諸氏の協力を得た。

名護市文化財調査報告-4

名護市の遺跡(2)

分布調査報告

1982年3月25日

発行・名護市教育委員会

名護市字名護 905 番地

TEL 09805(3)-1212 内線124

印刷・崎浜印刷所

名護市字名護 437 番地

TEL 09805(2)-2740

0-101
k-202

名護市の建設 (2)
名護市の発展 192
15/7 26m

2101
61. 10. 23

名護市史編纂委員会

4

名護市史編纂委員会